

博士学位請求論文

指導教員 松田和信教授

カナガナハッリ大塔仏伝図の研究

佛教大学大学院文学研究科仏教学専攻

中西 麻一子

はじめに

カナガナハリ大塔のことを知ったのは 2007 年 8 月のことである。大谷大学より修士の学位を授与された 5 ヶ月後に、ベトナムより帰国された荒牧典俊先生から、龍谷大学大宮学舎東麓の隅にある教室で、その報告を受けたときの衝撃はとても良く記憶している。報告と一緒に配られたダラヤン博士の配布資料には、写真が掲載されて無かったので、想像力だけでカナガナハリ大塔の大きさや姿を、身振り手振りを交えて興奮しながらみんなで話し合ったことが、カナガナハリ大塔を研究する本当のはじまりであったと思う。

それから、カナガナハリ大塔の研究が本格化したのは、1 年半後のことである。当時、留学中であった筆者は、科研の研究調査(研究代表者:荒牧典俊)に同行するためにドイツから合流して、南インドの直射日光に煌々と照らされたカナガナハリ大塔の撮影を実施した。そして 2011 年には、大塔を円環する 59 枚の上段レリーフ石板と、その石板上に刻まれる碑文写真を研究成果として初めて公開させて頂いた。そのことが自然と筆者の博士論文のテーマへと繋がり、現在に至っている。思いがけない仕合わせが私に巡ってきたと思えて仕方がない。ここまで辿り着くことが出来たのは、荒牧典俊先生のご指導によるものである。

カナガナハリ大塔の主な造営時期は、紀元前 1 世紀から紀元後 3 世紀であり、まさに大乘仏教が興起し、仏像が出現したインド仏教史の大転換期にあたる。非常に重要な時代でありながらも、インド内陸部では同時代の仏教文献が回収出来ないことも重なり、未だこの時代の具体的な仏教史は不明瞭なところが多い。他方で、リューダース博士、塚本啓祥博士、並びに静谷正雄博士を代表する碑文の解読研究により、現存の文献資料に記された仏教史とは異なる実際の僧団形成の実態を、時代と地域を結び付けて明らかにした優れた研究成果が提出されている。カナガナハリ大塔からは、300 点を超える碑文史料が新しく発見されており、インド仏教史には当時の実像を伝える興味深い史料の提供が可能である。碑文の解読については、筆者の研究調査報告を読んで下さり、カナガナハリ大塔の価値をいち早く見抜かれた辛嶋静志先生のご厚意とご支援により、フォン・ヒニューバー先生との共著で以下の拙著を 2014 年に出版させて頂いた。

Nakanishi, Maiko, and Oskar von Hinüber

Kanaganahalli Inscriptions, (ARIRIAB 17, Supplement). Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, 2014.

本研究では、上記した碑文の解読に基づいて主題が比定された仏伝図に、どのような図像表現が保存されているのかを文献資料に基づいて検討している。59 枚の上段レリーフ石板のうち仏伝図が描かれているものに研究範囲を絞ることにしたが、それでもなお、すべての仏伝図の解明には程遠い。そんな状況においてこれまでの研究成果をまとめたものがこの博士論文である。

筆者はこれまでカナガナハリ大塔のレリーフに関して、以下の拙稿を発表しており、その内容は加筆・修正を加えて、全て本研究に収められている。

- ・ 「カンガンハリ遺跡調査報告」『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書』(科研費報告書), 2011, 京都: 龍谷大学仏教文化研究所, pp. 51–59.
- ・ 「カンガンハリ遺跡から出土した「ブッダの誕生」図について」『真宗文化 真宗文化研究所年報』 21, 2012, pp. 1–19.
- ・ 「カンガンハリの「初転法輪」図について」『真宗文化 真宗文化研究所年報』 22, 2013, pp. 1–25.
- ・ 「カンガンハリ遺跡調査報告 上段レリーフ石板に描かれた仏教説話の配列を巡って」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』 41, 2013, pp. 79–93.
- ・ 「インド初期仏教美術の仏伝図における出家の場面について」『密教図像』 34, 2015, pp. 1–18.
- ・ 「Kanaganahalli 大塔における祇園精舎布施の場面について」『印度学仏教学研究』 64–1, 2015, pp. 329–332.
- ・ 「祇園精舎布施場面における神変図－Kanaganahalli 大塔を中心に－」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』 45, 2017, pp. 67–84.
- ・ 「カナガナハリ大塔に描かれた雪山地方への伝道伝説について」『密教図像』 36, 2018 (近刊予定).
- ・ 「『佛説義足経』に説かれる因縁物語－第 10 経と第 14 経の因縁物語と図像表現の比較考察－」『支謙訳『佛説義足経』解読研究とその周辺』 2018 (近刊予定).

最後に、本研究を遂行するにあたり、多くの方のご指導とご協力を賜ったことを記しておきたい。

大谷大学大学院から佛教大学大学院への博士課程入学に際して、受け入れを快く承諾下さった松田和信先生に篤く御礼申し上げます。本研究に早い段階から関心を持って下さり、これまで幾度となくご助言を頂き、漢文読解のために研究会を開いて下さった加治洋一先生に御礼申し上げます。

佛教大学仏教学専攻の先生方、及び佛教大学大学院仏教学研究室の大学院生の皆様には、いつも激励の言葉をかけて頂き、数々の有益なコメントを惜しみなく頂戴した。恵まれた環境の中で研究に専心し、無事に博士論文を仕上げる事が出来ました。心から感謝申し上げます。

筆者は、2008 年から 2010 年までの期間、ドイツ国デュッセルドルフ市にある「恵光」日本文化センター(EKO-Haus der Japanischen Kultur e. V.)において在外研究に従事している。その期間中にインド・カナガナハリ大塔への現地調査を行い、素晴らしい環境の中で基礎研究に集中することが出来た。インドへの渡航を許可して下さい下さった所長青山隆夫先生に御礼申し上げます。帰国後は、佛教大学文学研究科博士課程に在籍しながら、光華女子大学真宗文化研究所研究員として、2 度の研究発表と論文執筆の機会に恵まれている。筆者を研究員に採用して下さい下さった一郷正道先生、小澤千晶先生に御礼申し上げます。

ガンダーラ科学研究会及び中央アジア科学研究会では、美術史学を専攻する研究者の方々との交流が深まり、示唆に富んだ貴重な意見を多く賜りました。筆者を研究会での発表(2011 年 10 月 1 日(土)、2014 年 11 月 20 日(木))に招いて下さった宮治昭先生に御礼申し上げます。

そして大谷大学在学時より、これまで一緒に仏教説話と古代初期インド美術を勉強してきた杉本瑞帆さん(龍谷大学)に心から感謝申し上げます。

そしてまた、大谷大学学部生の頃より、幼少期からご縁のある建築家山本良介先生からは、(株)山本良介アトリエのデスクをお借りして、トレースの技術(線画)、CAD(製図)、そして建築学からの視点を現場で学び鍛えていただきました。これらの技術は、図像表現を細部まで分析する場合に非常に有効な手法であり、本研究で活用している。特に図 3、図 4、図 5、図 6、図 7、図 24、図 38、資料 1 に活かされました。専門外の筆者を長年迎え入れて下さり本当に有り難うございました。本研究開始からこれまで、写真データの編集(Photoshop, Illustrator, InDesign)には、川崎宣子さんに多大なご協力を頂いた。いつも親身になって相談に乗って下さり有り難うございました。そして最後に、温かくいつも見守ってくれていた両親にあらためて感謝します。

2017 年 11 月

筆者

博士学位請求論文

カナガナハッリ大塔仏伝図の研究

目次

はじめに.....	3
目次.....	7
凡例.....	11
略号および参考文献.....	13
・ 一次文献.....	13
・ 二次文献.....	16
・ 雑誌・シリーズ名等.....	17
・ 文法用語・その他.....	18
・ 書名等.....	19
・ 参考文献.....	20
図版出典.....	40
序論：カナガナハッリ大塔現地調査の記録.....	43
0.1 カナガナハッリ大塔の概況.....	44
0.2 カナガナハッリ大塔の先行研究と造営過程.....	47
0.3 59枚の上段レリーフ石板について.....	51
0.3.1 上段レリーフ石板の外観的特徴.....	52
0.3.2 上段レリーフ石板の出土状況と配列問題.....	54
資料 1: カナガナハッリ大塔配置図	
0.3.3 上段レリーフ石板の制作年代と図像表現.....	57
0.4 カナガナハッリ大塔に保存される仏伝図ー作業仮説と研究方針ー.....	60
資料 2: 上段レリーフ石板一覧表	
資料 3: インド仏教遺跡地図	

第1章:上段レリーフ石版No. <u>21</u> とNo. <u>22</u> －雪山地方への伝道図－	63
1.1 文献資料に記される雪山夜叉	64
1.1.1 初期經典における雪山夜叉の描写	64
1.1.2 スリランカ史伝に記される雪山夜叉の描写	70
1.2 カナガナハッリ大塔に描かれる伝道伝説の図像表現	73
1.2.1 雪山夜叉が描かれる上段レリーフ石板	74
1.2.2 尊者カッサパゴッタが描かれる上段レリーフ石板	75
1.3 カッサパゴッタの名が刻まれる舍利容器	77
小結 1	79
資料 4: 雪山夜叉經典群対照表	
第2章:上段レリーフ石版No. <u>15</u> －誕生・灌水・七歩図－	81
2.1 誕生伝説と誕生図	81
2.2 カナガナハッリ大塔を飾る上段レリーフ石版No. <u>15</u>	91
2.3 上段レリーフ石版 <u>15</u> に刻まれた彫刻付きの碑文	93
小結 2	97
第3章:上段レリーフ石版No. <u>08</u> とNo. <u>09/05</u> －出城図と頭髮礼拝図－	99
3.1 初期經典における<出家>に関する2つの表現: (abhi-)niṣ-√kram と pra-√vraj	101
3.2 仏伝文学中に物語られる出城伝説と出家伝説	106
3.3 古代初期インド美術における頭髮礼拝図	110
3.4 カナガナハッリ大塔から出土した出城図と頭髮礼拝図	114
3.5 カナガナハッリ大塔から出土したもう一つの頭髮礼拝図	117
小結 3	119
第4章:上段レリーフ石版No. <u>01</u> －初転法輪図－	121
4.1 初転法輪伝説の伝える情景とその図像表現	124
4.1.1 ブッダが初めて説法した場所	125
4.1.2 法輪を回転させるという記述	127
4.1.3 説法の対象者としての五比丘	131
4.2 古代初期インド美術における初転法輪図の図像学的特徴	135

4.3 カナガナハッリ大塔の初転法輪図と法輪柱.....	140
小結 4.....	142
第5章:下段レリーフ石版－祇園精舎布施図と舎衛城の神変図－.....	144
5.1 <祇園精舎布施>を伝える諸文献.....	144
5.2 古代初期インド美術における祇園精舎布施図と舎衛城の神変図.....	151
5.2.1 古代初期インド美術における舎衛城の神変図の図像表現.....	154
5.3 カナガナハッリ大塔に描かれる祇園精舎布施図と舎衛城の神変図.....	158
5.3.1 祇園精舎布施図中のヤクシャとそれに対応する初期経典.....	161
小結 5.....	163
結論: カナガナハッリ大塔仏伝図の図像表現.....	165

凡例

- 本文中で扱う文献資料の表記は、各テキストの表記に従う。
- 本文中における参考文献の表記は次の如くである。例) 著者名[出版年: 該当ページ数]
- 本文中における地名及び遺跡名の表記は、塚本啓祥[1996: 3-43]に記される表記に従う。
- パーリ語のテキストは、全て The Pali Text Society による出版書籍を使用する。例) 経名 (略号を参照)、 経番号 (経名(略号)、巻数、ページ数、行数)
- 漢訳は、大正新脩大蔵經を使用する。例) 『経名』[巻数、経番号、ページ数、行数] また、章のタイトルの場合は「」を使用する。
- 大正新脩大蔵經の検索には、SAT 大正新脩大蔵經 テキストデータベース(<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)を利用し、行数は SAT に準ずる。
- 和訳文における丸括弧()は原語と補足説明、もしくは言い換えを示す。亀甲括弧は〔 〕は訳語の補いを示す。
- サンスクリット語・パーリ語のテキスト中の文頭、もしくは固有名詞などで大文字になっているものは、本研究の引用では全て小文字に改める。
- テキストが校訂者により復元されている箇所の内容・表記はすべて原文に準ずる。
- 本稿で「初期經典」と記す場合、漢訳四阿含、パーリ四部ニカーヤに属する經典と、*Suttanipāta*, *Dhammapada*, *Theragāthā*, *Therīgāthā* の韻文資料とを意味する。漢訳四阿含とパーリニカーヤとの対応は赤沼智善[1929]に従う。
- *Suttanipāta* の各詩節に対応する平行偈については、Franke[1978]、水野弘元[1992]、村上/及川[1986][1988][1989]に従う。
- 漢訳の訳出年代は、小野玄妙(編)『佛書解説大辞典』に従う。
- 仏伝の各エピソードは総称及び呼称であることを示すため<>を使用する。原文には無い。例) <誕生>〔と呼ばれる、もしくは該当するエピソードが説かれる文献群〕
- 本研究では混乱を避けるために、カナガンハリを採用しているシンポジウムや論考であっても、カナガナハッリに統一して記すこととする。
- カナガナハッリ大塔の上段レリーフ石板は、荒牧/Dalayan/中西[2011]で使用した ASI によ

る通し番号を使用する。例) 上段レリーフ石板 No. 01 もしくは、Kanaganahalli 01

略号および参考文献

一次文献

- BĀU** Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad, in *Eighteen Principal Upaniṣads*, vol. I, ed. V. P. Limaye and R. D. Vadekar. Poona: Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, 1958.
- Bc** *Aśvaghōṣa 's Buddhacarita or Acts of the Buddha*, ed. and trans. E. H. Johnston. 2 parts. Calcutta: Baptist Mission Press for University of the Panjab, Lahore, 1936, rpt. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978.
- CPS** *Das Catuspariṣatsūtra, Eine kanonische Lehrschrift über die Begründung der buddhistischen Gemeinde*, ed. Ernst Waldschmidt. Teil I–III. Berlin: Akademie-Verlag, 1952–1962 (*Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst* 1952, 2; 1956, 1; 1960, 1).
- Dhp-a** *The Commentary on the Dhammapada*, ed. H. C. Norman. 4 vols. London: PTS, 1906–1914, rpt. London: PTS, 1970.
- Divy** *The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends*, ed. Edward Byles Cowell and Robert Alexander Neil. Cambridge: The University Press, 1886.
- Dīp** *The Dīpavaṃsa, An ancient Buddhist Historical Record*, ed. and trans. Hermann Oldenberg. London: Williams and Norgate, 1879, rpt. Oxford: PTS, 2000.
- DN** *Dīghanikāya*, ed. T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter. Vol. 1–2. London: PTS, 1889–1910, rpt. London: PTS, 1995; ed. J. E. Carpenter. Vol. 3. London: PTS, 1911, rpt. London: PTS, 1992.
- It** *Itivuttaka*, ed. Ernst Windisch. London: PTS, 1889, rpt. London: PTS, 1975.
- Jā** *Jātaka, together with its Commentary*, ed. V. Fausbøll. 6 vols. London: Trübner & Co, 1877–1896, rpt. London: PTS, 1962–1964.
- Lv** *Lalitavistara, Leben und Lehre des Śākya-Buddha, Textausgabe mit Varianten, Metren und Wöterverzeichnis*, ed. S. Lefmann. 2 vols. Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1902–1908, rpt. Tokyo: Meicho-Fukyū-Kai, 1977.

- MAV** *The Mahāvadānasūtra: A New Edition Based on Manuscripts Discovered in Northern Turkestan*, SWTF, Im Auftrage der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen herausgegeben von Heinz Bechert, Beiheft 10, ed. Takamichi Fukita. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2003.
- Mhv** *Mahāvamsa*, ed. Wilhelm Geiger. London: PTS, 1908, rpt. London: PTS, 1958.
- Mil** *The Milindapañho: Being Dialogues between King Milinda and the Buddhist Sage Nāgasena: the Pali Text*, ed. V. Trenckner. London: Williams and Norgate, 1880, rpt. with *Milinda-Ṭīkā*, ed. P.S. Jaini. London: PTS, 1986.
- MN** *Majjhimanikāya*, ed. V. Trenckner. Vol. 1. London: PTS, 1888, rpt. London: PTS, 1979; ed. R. Chalmers. Vol. 2–3. London: PTS, 1896–1899, rpt. London: PTS, 1977.
- Mvu** *Le Mahāvastu, Texte sanskrit publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire*, ed. Émile Senart. 3 vols. Paris: Imprimerie nationale, 1882–1897, rpt. Tokyo: Meicho-Fukyū-Kai, 1977.
- Mvy** 梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集(梵・藏索引). 2 vols. 東京: 鈴木學術財団, 1916, rpt. 京都: 臨川書店, 1998.
- Pj II** *Suttanipāta Commentary being Paramatthajotikā II*, ed. H. Smith. 2 vols. London: PTS 1916–1917, rpt. London: PTS, 1966. vol. 3.
- Śay-v** *Śayanāsanavastu*, in: *The Gilgit Manuscript of the Śayanāsanavastu and the Adhikaraṇavastu, being the 15th and 16th Sections of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, ed. Raniero Gnoli. 2 parts. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente (SOR 50), 1978.
- Sbhv** *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, ed. Raniero Gnoli. 2 parts. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente (SOR 49/1–2), 1977–1978.
- SN** *Saṃyuttanikāya*, ed. G. A. Somaratne. Vol. 1. Oxford: PTS, 1999; ed. L. Feer. Vol. 2–5. London: PTS, 1888–1898, rpt. London / Oxford: PTS, 1975–1994.
- Sn** *Suttanipāta*, ed. D. Andersen and H. Smith. London: PTS, 1913, rpt. Oxford: PTS, 1990.
- Sp** *Samantapāsādikā: Buddhaghosa's commentary on the Vinaya Piṭaka*, ed. J. Takakusu and M. Nagai. 7 vols. London: PTS, 1924–1947, rpt. London: PTS, 1975–1981.

- Śsj** *Haribhaṭṭa in Nepal : Ten Legends from His Jātakamālā and the Anonymous Śākyasiṃhajātaka*, (Studia Philologica Buddhica, Monograph series 22), ed. Michael Hahn. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies, 2007.
- T** *Taishō Shinshū Daizōkyō* 大正新脩大藏經, ed. 高楠順次郎, 渡邊海旭. 100 vols. 東京: 大正一切經刊行会, 1924–1934.
- Th/Thī** *Thera- and Therī-Gāthā*, ed. H. Oldenberg and R. Pischel. London: PTS, 1885; 2nd ed. with Appendixes K. R. Norman and L. Alsdorf. London: PTS, 1966.
- Ud** *Udāna*, ed. Paul Steinthal. London: PTS, 1885, rpt. London: PTS, 1982.
- Vin** *Vinayapiṭaka*, ed. H. Oldenberg. 5 vols. London: PTS, 1879–1883, rpt. Oxford: PTS, 1969–1995.
- 『長阿含經』 [T. 1, No. 1] 〔法藏部〕仏陀耶舎・竺仏念共訳 413 CE
- 『中阿含經』 [T. 1, No. 26] 〔説一切有部〕僧伽提婆訳 397–398 CE
- 『雜阿含經』 [T. 2, No. 99] 〔根本説一切有部〕求那跋陀羅訳 435–436 CE
- 『別訳雜阿含經』 [T. 2, No. 100] 失訳 350–431 CE
- 『轉法輪經』 [T. 2, No. 109] 安世高訳 148–170 CE
- 『佛説三轉法輪經』 [T. 2, No. 110] 義淨訳 635–713 CE
- 『増一阿含經』 [T. 2, No. 125] 僧伽提婆訳 397 CE
- 『阿羅漢具徳經』 [T. 2, No. 126] 法賢訳 1001 CE
- 『菩薩本生鬘論』 [T. 3, No. 160] 聖勇造 紹徳慧詢等訳 960–1127 CE
- 『修行本起經』 [T. 3, No. 184] 竺大力・康孟詳訳 197 CE
- 『佛説太子瑞應本起經』 [T. 3, No. 185] 支謙訳 222–226 CE
- 『佛説普曜經』 [T. 3, No. 186] 法護訳 308 CE
- 『方廣大莊嚴經』 [T. 3, No. 187] 地婆阿羅訶訳 683 CE
- 『異出菩薩本起經』 [T. 3, No. 188] 聶道真訳 280–312 CE
- 『過去現在因果經』 [T. 3, No. 189] 求那跋陀羅訳 394–468 CE
- 『佛本行集經』 [T. 3, No. 190] 闍那堀多訳 523–600 CE

『佛説衆許摩訶帝經』	[T. 3, No. 191] 法賢訳 985–994 CE
『佛説佛所行讃』	[T. 4, No. 192] 馬鳴造 曇無讖訳 414–426 CE
『佛本行經』	[T. 4, No. 193] 宝雲訳 424–453 CE
『僧伽羅刹所集經』	[T. 4, No. 194] 僧伽跋澄訳 384 CE
『佛説十二遊經』	[T. 4, No. 195] 迦留陀伽訳 281 CE
『中本起經』	[T. 4, No. 196] 曇果・康孟詳訳 207 CE
『佛説義足經』	[T. 4, No. 198] 支謙訳 223–253 CE
『賢愚經』	[T. 4, No. 202] 慧覺等訳 445 CE
『雜宝藏經』	[T. 4, No. 203] 吉迦夜・曇曜訳 472 CE.
『法句譬喻經』	[T. 4, No. 211] 法炬・法立訳 290–306 CE
『彌沙塞部和醯五分律』	[T. 22, No. 1421] 〔化地部〕 佛陀什・竺道生訳 423–424 CE
『摩訶僧祇律』	[T. 22, No. 1425] 〔大衆部〕 佛陀跋陀羅・法顯訳 416–418 CE
『四分律』	[T. 22, No. 1428] 〔法藏部〕 佛陀耶舎・竺佛念訳 408 CE
『十誦律』	[T. 23, No. 1435] 〔説一切有部〕 弗若多羅・羅什訳 404–409 CE
『根本説一切有部毘奈耶』	[T. 23, No. 1442] 義浄訳 700–711 CE
『根本説一切有部毘奈耶破僧事』	[T. 24, No. 1450] 義浄訳 700–711 CE
『根本説一切有部毘奈耶雜事』	[T. 26, No. 1451] 義浄訳 710 CE
『佛説立世阿毘曇論』	[T. 32, No. 1644] 眞諦訳 559 CE
『阿育王傳』	[T. 50, No. 2042] 安法欽訳 306 CE
『阿育王經』	[T. 50, No. 2043] 僧伽婆羅訳 512 CE
『高僧法顯傳』	[T. 51, No. 2085] 法顯造 399–418 CE
『大唐西域記』	[T. 51, No. 2087] 玄奘訳 辯機撰 646 CE

二次文献

BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Vol. 2: Dictionary*, Edgerton,

- Franklin. New Haven: Yale University Press, 1953.
- 佛解 『佛書解説大辞典』, 小野玄妙(編), 11 vols. 東京: 大東出版社, 1933–1935.
- DPPN** *Dictionary of pāli Proper Names*, Malalasekera, G. P. 2 vols. London: PTS, 1937–1938.
- EWA** *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen*. 2Bde. Mayrhofer, Manfred. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1986–1996.
- PED** *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, ed. T. W. Rhys Davids and William Stede. London: PTS, 1921–1925, rpt. 2004.
- PW** *Sanskrit-Wörterbuch*, 7 Bde., von Böhtlingk, Otto and Rudolph Roth. St. Petersburg : Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, 1855–1875.

雑誌・シリーズ名等

- ARIRIAB** *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* 『創価大学・国際仏教学高等研究所年報』
- ASI** *Archaeological Survey of India*.
- CII** *Corpus Inscriptionum Indicarum*.
- EI** *Epigraphia Indica*, Delhi.
- IJJ** *Indo-Iranian Journal*, Den Haag / Dordrecht.
- JAOS** *Journal of American Oriental Society*.
- MASI** *Memoirs of the Archaeological Survey of India*.
- PTS** The Pali Text Society, London / Oxford.
- SHT** *Sanskrihandschriften aus den Turfanfunden*, Teil 1–9, ed. Waldschmidt, Ernst & Lore Sander & Klaus Wille, Wiesbaden (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland X, 1–9) 1965–2004.
- SOR** *Serie Orientale Roma*, Roma.
- SWTF** *Sanskrit-Wörterbuch Der Buddhistischen Texte Aus Den Turfan-Funden*.
- WZKS** *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, Wien.
- ZDMG** *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Leipzig, später Wiesbaden.

文法用語・その他

abl.	ablative
Bd. / Bde.	Band / Bände
BCE	Before Common Era
ca.	<i>circa</i> = about, around
caus.	causative
CE	Common Era
cf.	confer
ch.	chapter
Chn.	Chinese
cm.	centimeter(s)
dat.	dative
ed. / eds.	edited by / edited, edition
et al.	<i>et alii</i> = and others
fig.	figure
gen.	genitive
h.	height
i.e.	<i>id est</i> = in other words
n.	neuter / note
p. / pp.	page / pages
Pā.	Pāli
pl.	plate
rpt.	reprint
sg.	singular
Skt.	Sanskrit
s.v.	<i>sub verbo</i> / <i>sub voce</i> = under the specified word
trans.	translated by / translator

v. / vv.	verse / verses
vol. / vols.	volume / volumes
w.	width
√	動詞語根

書名等（表の出典に使用）

AMS.	Shastri, Ajay Mitra see Shastri[1999][2008]
Burgess.	Burgess, James see Burgess[1887]
Coom1935.	Coomaraswamy, Ananda Krishna see Coomaraswamy[1935]
Coom1956.	Coomaraswamy, Ananda Krishna see Coomaraswamy[1956]
Cunn.	Cunningham, Alexander see Cunningham[1962]
Fergusson.	Fergusson, James see Fergusson[1868]
GS.	A. Ghosh and Sarkar, H. see Ghosh/Sarkar[1964-5]
ADN 科研.	荒牧典俊, D. Dalayan, 中西麻一子 see 荒牧/ Dalayan/中西[2011]
Knox.	Knox, Robert see Knox[1992]
肥塚 1975.	肥塚隆 see 肥塚隆[1975]
栗田 I.	栗田功 see 栗田功[2003]
Longhurst.	Longhurst, Albert Henry see Longhurst[1938]
Lüders, List.	Lüders, Heinrich see Lüders[1912]
MASI106.	MASI No.106 see Poonacha[2011]
松岡.	松岡美術館編集 see 松岡美術館編[1994]
MF.	Marshall, Sir John and Alfred Foucher see Marshall/Foucher[1940]
N.	Photographs at Kanaganahalli by Maiko Nakanishi (F. No. 15/2/2009EE, F. No. 20/1/2010-Pub)
Quintanilla.	Quintanilla, Sonya Rhie see Quintanilla[2007]
SB.	Bhandare, Shailendra see Shailendra[1998]
Schlingloff2000.	Schlingloff, Dieter see Schlingloff[2000]
Sharma.	Sharma, R. C. see Sharma[1995]

- Sivaramamurti.** Sivaramamurti, Calambur see Sivaramamurti[1942]
Rosen Stone. Rosen Stone, Elizabeth see Rosen Stone[1994]
Zin2010. Zin, Monika see Zin[2010]
全集 13. 世界美術史大全集 東洋編 13 インド(1) see 肥塚/宮治(編)[2000]

参考文献（アルファベット順）

- 網干善教 Aboshi, Zenkyō
 1997 「2. 佛典にみる祇園精舎創建縁起について」『祇園精舎—サハート遺跡発掘調査報告書—本文編 II』関西大学 日・印共同学術調査団編. 吹田: 関西大学出版部, pp. 1333–1370.
- 阿賀谷友宏 Agatani, Tomohiro
 2011 『*Dhammapada-aṭṭhakathā* における辟支仏の諸相』大阪大学文学研究科博士前期課程インド学・仏教学, 修士論文.
- 荒牧典俊 Aramaki, Noritoshi
 1983 「SN Mārasaṃyutta I の成立について」『日本仏教学会年報』48, pp. 1–22.
 2007 「佛像の出現をめぐる (2006 年度 春季公開講演会 講演録)」『大谷学報』86–2, pp. 57–82.
- 荒牧典俊, D. Dalayan, 中西麻一子 Aramaki, Noritoshi *et al.*
 2011 『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書(代表: 荒牧典俊)』(科学研究費報告書), 京都: 龍谷大学仏教文化研究所.
- 荒牧典俊, 本庄良文, 榎本文雄 Aramaki, Noritoshi *et al.*
 2015 『スッタニパータ [釈尊のことば] 全現代語訳』東京: 講談社学術文庫.
- 赤沼智善 Akanuma, Chizen
 1929 『漢巴四部四阿含互照録』東京: 破塵閣書房, rpt. *The Comparative Catalogue of Chinese Āgamas & Pāli Nikāyas*. Delhi: Sri Satguru Publications, 1990.
 1931 『印度佛教固有名詞辞典』東京: 破塵閣書房, rpt. 京都: 法蔵館 1967.

- 1981 「舎衛城及び祇園精舎の研究」『原始仏教の研究』京都: 法蔵館, pp. 431–464.

Archaeological Survey of India

- 2000 “Excavation at Sannati, District Gulbarga.” In *Indian Archaeology 1994-5 A Review*. ed. Hari Manjhi C. and Dorje Arundhati Banerjasi. New Delhi: The Director General ASI, pp. 39–40.
- 2002a “Excavation at Sannati, District Gulbarga.” In *Indian Archaeology 1995-6 A Review*. New Delhi: The Director General ASI, p. 40, 128.
- 2002b “Excavation at Kanaganahalli, District Gulbarga.” In *Indian Archaeology 1996-7 A Review*. New Delhi: The Director General ASI, pp. 53–55.
- 2003 “Excavation at Kanaganahalli (Sannati), District Gulbarga.” In *Indian Archaeology 1997-8 A Review*. New Delhi: The Director General ASI, pp. 93–96.
- 2004 “Excavation at Kanaganahalli, District Gulbarga.” In *Indian Archaeology 1998-9 A Review*. New Delhi: The Director General ASI, pp. 66–67.

馬場紀寿 Baba Norihisa

- 2008 『上座部仏教の思想形成 —ブッダからブッダゴーサヘー』東京: 春秋社.
- 2011 「上座部仏教と大乘仏教」『シリーズ大乘仏教 2 大乘仏教の誕生』東京: 春秋社.

Bhandare, Shailendra

- 1998 *Historical Analysis of the Satavahana Era: A Study of Coins*. Unpublished doctoral thesis, University of Mumbai. (www.academia.edu から入手)

Bloch, T.

- 1912 “Notes on Bodhi Gaya.” In *Archaeological Survey of India Annual Report 1908-9*. Calcutta: Superintendent Government Printing India, pp. 139–156.

Bunchird, Chaowarithreonglith

- 2005 「北伝と南伝における主要な仏弟子—*Āṅguttara Nikāya* における「是第一弟子」を中心として—」『パーリ学仏教文化学』19, pp. 75–84.
- 2007 『原始仏教における仏弟子伝承の発達 —*Āṅguttaranikāya* の Etadaggavagga を中心として—』学位請求論文, 大谷大学.

Burgess, James

- 1887 *The Buddhist Stupas of Amaravati and Jaggayyapeta in the Krishna District, Madras Presidency, Surveyed in 1882* (Aecheaeological Survey of Southern India 1). London: Trübner, rpt. Varanasi: Indological Book House 1970.

Coomaraswamy, Ananda Krishna

- 1927 “The Origin of the Buddha Image.” In *The Art Bulletin*, vol. 9, no. 4, pp. 287–328.
1928 *Yakṣas (With 23 Plates)*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
1931 *Yakṣas Part II (With 50 Plates)*. Washington, D.C.: The Baltimore Press.
1935 *La sculpture de Bodhgayā*. Paris: Les Éditions d'Art et d'Histoire.
1956 *La sculpture de Bharhut*. Paris: Vanoest.

Cunningham, Alexander

- 1854 *The Bhilsa Topes: Or, Buddhist Monuments of Central India: Comprising a Brief Historical Sketch of the Rise, Progress, and Decline of Buddhism; with an Account of the Opening and Examination of the Various Groups of Topes Around Bhilsa*. Bombay: Smith, Elder, and co.
1962 *Stūpa of Bhārhut: A Buddhist Monument Ornamented with Numerous Sculptures Illustrated of Buddhist Legend and History in the Third Century B. C.* Varanasi: Indological Book House.
1963 *The Ancient Geography of India: I. The Buddhist Period, Including the Campaigns of Alexander, and the Travels of Hwen-Thsang*. Varanasi: Indological Book House.

Dalayan, Duraiswamy

- 2011 “Kanganhalli: A unique discovery of Buddhist site in India.” (a conference paper, Vietnam and the East Asian Buddhist Traditions, Aug. 2007, Vietnam Buddhist University, Vietnam). 再録:『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書』(科研費報告書), 京都: 龍谷大学仏教文化研究所, pp. 41–49.

Das, Jitendra

- 2004 “Spread of Buddhism in northern Karnataka.” In *Kevala Bodhi: Buddhist and Jaina*

History of the Deccan (The BSL Commemorative Volume), *Volume 1*, ed. Aloka Parasher-Sen, assisted. E. Siva Nagi Reddy, and B. Subrahmanyam. New Delhi: Bharatiya Kala Prakashan, pp. 139–147, Pl. 7–20.

Dehejia, Vidya

- 2007 “Questioning Narrativity and Inscribed Labels: Buddhist Bharhut, Sannati and Borobudur.” In *Sacred Landscapes in Asia: Shared Traditions, Multiple Histories*, ed. Himanshu Prabha Ray, India International Centre - Asia Project. New Delhi: Manohar Publishers, pp. 285–307.

Falk, Harry

- 2006 *Asokan Sites and Artefacts A Source-Book with Bibliography*. Mainz am Rhein: Philipp von Zabern Verlag, pp. 130–131.
- 2009 “Two Dated Sātavāhana Epigraphs.” In *IJJ* 52, pp. 197–206.

Fergusson, James

- 1868 *Tree and Serpent Worship: Illustrations of Mythology and Art in India in the First and Fourth Centuries after Christ, from the Sculptures of the Buddhist Topes at Sanchi and Amravati*. London: Indian Museum.

藤田宏達 Fujita, Kotatsu

- 1954 「転輪聖王について」『印度学仏教学論集：宮本正尊教授還暦記念論文集』東京：三省堂出版, pp. 145–156.

福田 琢 Fukuda, Takumi

- 2006 「ブッダに称賛される在家声聞」『パーリ学仏教文化学』20, pp. 23–40.

福山泰子 Fukuyama, Yasuko

- 2014 『アジャンター後期壁画の研究』東京：中央公論美術出版.

Franke, Rudolf Otto

- 1978 “Die Suttanipāta-Gāthās mit ihren Parallelen.” In *ZDMG* 63, 1909, pp. 1–64,

255–286, 551–586: 64, 1910, pp. 1–57, 760–807: 66, 1912, pp. 204–260, 699–708. rpt.
Kleine Schriften, (Glasenapp-Stiftung, Bd. 17), ed. Oskar von Hinüber. Wiesbaden:
Franz Steiner Verlag, pp. 474–777.

Ghosh, A. and H. Sarkar

1964–5 “Beginnings of Sculptural Art in South-east India : A Stele from Amaravati.” In
Ancient India 20–21, pp. 168–177.

Gonda, Jan

1966 *Ancient Indian kingship from the religious point of view*. Leiden: E.J. Brill.

Goyal, S. R.

2005 *Ancient Indian Inscriptions: Recent Finds and New Interpretations*. Jodhpur:
Kusumanjali Book World.

林 良一 Hayashi, Ryōichi

1974 「仏教美術の装飾文様③ 聖樹 2」『仏教芸術』96, p. 101–122.

樋口隆康(編) Higuchi, Takayasu

1984 『パキスタン・ガンダーラ美術展図録』東京: 日本放送協会.

干潟龍祥 Hikata, Ryūsho

1978 『本生経類の思想史的発達 (改訂増補版)』東京: 山喜房書林.

Hillebrandt, Alfred

1987 “Vedisch yakṣá.” In *Kleine Schriften*, (Glasenapp-Stiftung, Bd. 28), ed. Rahul Peter
Das. Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH, pp. 17–23.

von Hinüber, Oskar

1996 *A Handbook of Pāli Literature*. Berlin / New York: Walter de Gruyter.

2014 “Mitteilung aus einer vergangenen Welt. Frühe indische Buddhisten und Inschriften.”
In *ZDMG* Bd. 164–Heft 1. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 13–32.

2016 “Buddhist Text and Buddhist Images: New Evidence from Kanaganahalli (Karnataka /
India).” In *ARIRIAB* 19, pp. 7–20.

- 平川彰 Hirakawa, Akira
 1989 『平川彰著作集第三巻 初期大乘仏教の研究 I』 東京: 春秋社.
- 平岡三峰子 Hiraoka, Mihoko
 2015 「カナガナハッリ仏塔の仏伝図～アーヤカ柱基台の作例について～」 科研「中央アジア仏教美術の研究－釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に－(代表: 宮治昭)」, 2015 年度 12 月, 第 3 回全体研究会, 会場: 龍谷大学大宮学舎西翼大会議室, 発表資料.
- 平岡聡 Hiraoka, Satoshi
 2007 『ブッダが謎解く三世の物語 上』 東京: 大蔵出版.
 2010 『ブッダの大いなる物語 上 梵文「マハーヴァストゥ」全訳』 東京: 大蔵出版.
 2011 「梵文根本有部律破僧事「給孤独長者入信説話」和訳」『佛教大学仏教学会紀要』19, pp. 33–53.
- Hultsch, E
 1925 *Inscription of Aśoka. New Edition, CII, Vol. 1*, Oxford: Clarendon Press, rpt. Delhi: Indological Book House, 1969.
- 井上陽 Inoue, Akira
 2001a 「ヴィディシャー周辺のストゥーパ遺跡について」『北陸宗教文化』13, pp. 63–88.
 2001b 「舍利分骨の意味: Vidisa 周辺の仏教の一樣態」『パーリ学仏教文化学』15, pp. 85–95.
 2002 「ストゥーパと出家者」『仏教学研究』57, pp. 48–77.
- 石黒淳 Ishiguro, Jun
 1984 「インド古代初期仏教美術にみられる舞楽図について」『仏教芸術』153, pp. 57–80.
- 岩田朋子 Iwata, Tomoko
 2001 「臥坐具撻度について－精舎奉納の因縁譚を中心として－」『龍谷大学 佛教学研究室年報』11, pp. 25–52.
 2003 「パーリ律に説かれる vihāra の布施の果報」『佛教学研究』58:59, pp. 235–258.

- 2004a 「臥坐具捷度に説かれる vihāra 奉納の因縁譚－根本説一切有部律を中心に－」
『仏教史学研究』 47, pp. 28–51.
- 2004b 「僧伽への土地寄進」『印度学仏教学研究』 52–2, pp. 863–865.
- 2008 「舍利弗と給孤独長者」『印度学仏教学研究』 56–2, pp. 820–825.
- 2009 「舍利弗による給孤独長者への臨終説法」『佛教学研究』 65, pp. 1–20.
- 2011 「出家者の修行場所－『根本説一切有部毘奈耶臥坐具事』 *Śāyanāsanavastu* の和訳 (1)－」『インド学チベット学研究』 15, pp. 97–133.
- 加治洋一 Kaji Yoichi
- 2016 「支謙訳『義足経』解説研究 (三)」『真宗文化－真宗文化研究所年報－』 25, pp. 33–64.
- 梶山雄一ほか(編) Kajiya, Yuichi *et al.*(eds.)
- 1985 『原始仏典 第十巻 ブッダチャリタ』 東京: 講談社.
- 1986 『原始仏典 第七巻 ブッダの詩 I』 東京: 講談社.
- 辛嶋静志 Karashima, Seishi
- 2013 「言葉の向こうに開ける大乘の原風景－経文に見える大乘、一闍提、観音、浄土の本当の意味 (第 42 回 光華講座 講演録)」『真宗文化－真宗文化研究所年報－』 22, pp. 1–48.
- 片山一良 Katayama, Ichiro
- 2001 『パーリ仏典 第一期 5 中部(マッジマニカーヤ) 後分五十経編 I』 東京: 大蔵出版.
- 北畠利親 Kitabatake, Rishin
- 1998 「仏伝における五比丘」『日本仏教文化論叢: 北畠典生博士古稀記念論文集』 京都: 永田文昌堂, pp. 81–105.
- Knox, Robert
- 1992 *Amaravati: Buddhist Sculpture from the Great Stūpa*. London: British Museum Press.
- 肥塚隆 Koezuka, Takashi
- 1975 「インドの佛伝美術」『南都仏教』 35, pp. 87–111.

1976 「インドにおける仏誕生の図像」『美術史』 90–92, pp. 58–71.

1979 『美術に見る釈尊の生涯』 東京: 平凡社.

肥塚隆, 宮治昭(編) Koezuka, Takashi and Miyaji, Akira (eds.)

2000 『世界美術大全集 東洋編 13 インド(1)』 東京: 小学館.

小泉恵英 Koizumi, Yoshihide

2005 「古代インドの従三十三天降下図—パキスタン・ザールデリー遺跡出土品を中心に—」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』 598, pp. 7–35.

雲井昭善 Kumoi, Syozen

1980 「初期仏教教団と夜叉 (Yakkha, Yakṣa)」『仏教の歴史と文化』 pp. 3–19, 同朋舎出版.

栗田功 Kurita, Isao

2003 『ガンダーラ美術 I 佛伝 (改訂増補版)』 東京: 二玄社.

Longhurst, Albert Henry

1938 *The Buddhist Antiquities of Nāgārjunakoṇḍa, Madras Presidency, MASI. No. 54.*
Delhi: Manager of Publication.

Lüders, Heinrich

1912 “A List of Brāhmī Inscriptions from the Earliest Times to about AD 400 with the Exception of those of Aśoka.” In *EI* 10, Part. I–VII, 1909–10, Appendix. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing.

1941 *Bhārhut und die buddhistische Literatur. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes*, Bd. 26, No. 3. Leipzig: Brockhaus.

1963 *Bhārhut Inscriptions*. Revised and supplemented Ernst Waldschmidt, and Madhukar Anant Mehendale, Archaeological Survey of India, *CII*, Vol. II. Part 2. Ootacamund: Government Epigraphist for India.

前田恵学 Maeda, Egaku

1964 『原始仏教聖典の成立史研究』 東京: 山喜房佛書林.

Marshall, Sir John and Alfred Foucher

- 1940 *The Monuments of Sāñchī*. 3vols. London: Probshain, rpt. Delhi: Swati Publications, 1982.

松田祐子 Matsuda, Yuko

- 1990 「蔵訳 *Abhiñskramaṇa-sūtra* 研究 (序)」『日本仏教学会年報』55, pp. 15–25.

松岡美術館(編) Matsuoka Museum of Art (ed.)

- 1994 『館蔵古代東洋彫刻』東京: 松岡美術館.

Maythee, Pitakteeradham

- 2006 「犢子部の成立と名称について—舍利壺に刻まれている諸聖者あるいは伝道師名に基づく—」『世界宗教學刊』7, pp. 155–176.

増谷文雄 Masutani, Fumio

- 1981 『増谷文雄著作集 5 仏陀の伝記—資料の研究—』東京: 角川書店.

Meister, Michael William

- 2002 “Evidence for Early Buddhist Architecture from Kanganhalli.” In *Ancient Pakistan* 25, pp. 61–64.
- 2004 “Notes Toward the Study of Representations of Early Indian Architecture, Kanganhalli.” In *Prasadam: Recent Researches on Archaeology, Art, Architecture and Culture* (Professor B. Rajendra Prasad Festschrift), ed. S.S. Ramachandra Murty, D. Bhaskara Murti, and D. Kiran Kranth Choudary. New Delhi: Harman Publishing House, pp. 120–24.
- 2007 “Early architecture and its transformations: New evidence for vernacular origins for the Indian temple.” In *The temple in south Asia*, ed. A. Hardy (vol. 2 of the proceedings of the 18th conference of the European association of South Asian archaeologists, London 2005). London: British Association for South Asian Studies, pp. 1–19.
- 2010 “Places Kings, and Sages: World Rulers and World Renouncers in Early Buddhism.” In *From Turfan to Ajanta volume II, Festschrift for Dieter Schlingloff on the Occasion*

of his Eightieth Birthday, ed. Eli Franco, and Monika Zin. Bhairahawa, Rupandehi: Lumbini International Research Institute, pp. 651–652.

- 南清隆 Minami, Kiyotaka
- 1986 「『義足経』と *Atthakavagga* —因縁譚の対照を中心に—」『仏教史学研究』29-1, pp. 1-16.
- 2010 「初期仏教文献の伝持形態に関する一考察」『華頂短期大学研究紀要』55, pp. 83-92.
- 宮治昭 Miyaji, Akira
- 1971 「舎衛城の神変」『東海仏教』16, pp. 40-60.
- 1981 『インド美術史』東京: 古川弘文館.
- 1993 「宇宙主としての釈迦仏—インドから中央アジア・中国へ—」『曼荼羅と輪廻—その思想と美術』立川武蔵(編), 東京: 佼成出版社, pp. 235-269.
- 1994 「インド古代初期美術の「降魔成道」の諸相」『名古屋大学文学部研究論集』哲学40, pp. 189-194.
- 1995 「インドの仏伝美術の三類型」『仏教芸術』217, pp. 15-32.
- 1996 『ガンダーラ仏の不思議』東京: 講談社.
- 1997 「仏像の起源に関する近年の研究状況について」『大和文華』98, pp. 1-18.
- 2002 「「舎衛城の神変」と大乘仏教美術の起源—研究史と展望」『美学美術史研究論集』20, pp. 1-27.
- 2005a 「南インドの転輪聖王の図像—マンダータル王説話図を中心に—」『マンダラの諸相と文化 下: 頼富本宏博士還暦記念論文集』京都: 法蔵館, pp. 163-184. 再録: 『インド仏教美術史論』東京: 中央公論美術出版, 2010.
- 2005b 「ガンダーラにおける最初期の仏像について」『仏教美術と歴史文化: 真鍋俊照博士還暦記念論集』京都: 法蔵館, pp. 5-25.
- 2010 『インド仏教美術史論』東京: 中央公論美術出版.
- 2013 「仏像の誕生—異宗教の受容による仏教尊像の生成—」『密教図像』32, pp. 1-18.
- 水野弘元 Mizuno, Kogen
- 1957 「釈尊の降誕に関する伝説の謎」『大世界』3月号, pp. 28-32.

- 1992 「『スッタニパータ』の偈や経の対応表」『仏教研究』21, pp. 2-56.
- 1996 「『転法輪経』について」『水野弘元著作選集第1巻 仏教文献研究』東京: 春秋社, pp. 243-273.
- 水谷真成 Mizutani, Shinjo
- 1971 『中国古典文学大系 22 大唐西域記』東京: 平凡社.
- 森 章司, 本澤綱夫, 岩井昌悟(編) Mori, Syoji *et al.*(eds.)
- 2000 『原始仏教聖典資料における釈尊伝の研究【3】資料集編 II 「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」』東京: 中央学術研究所.
- 村上真完, 及川真介 Murakami, Shinkan and Oikawa, Shinkai
- 1986 『仏のことば註 (二)ーパラマッタ・ジョーティカーー』東京: 春秋社.
- 1988 『仏のことば註 (三)ーパラマッタ・ジョーティカーー』東京: 春秋社.
- 1989 『仏のことば註 (四)ーパラマッタ・ジョーティカーー』東京: 春秋社.
- 永田郁 Nagata, Kaoru
- 2003 「インド古代初期におけるヤクシャの神像彫刻について」『名古屋大学博物館報告』19, pp. 55-72.
- 中川正法 Nakagawa, Masanori
- 1982 「舎衛城神変説話」『印度学仏教学研究』30-2, pp. 657-658.
- 中村元 Nakamura, Hajime
- 1966 『中村元選集 第6巻 インド古代史 上』東京: 春秋社.
- 1969 『中村元選集 第11巻 ゴータマ・ブッダー釈尊の生涯ー原始仏教1』東京: 春秋社.
- 1992 『決定版 中村元選集 第11巻 ゴータマ・ブッダ 原始仏教I』東京: 春秋社.
- 中西麻一子 Nakanishi, Maiko
- 2011 「カンガンハリ遺跡調査報告」『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書 (科研費報告書)』京都: 龍谷大学仏教文化研究所, pp. 51-59.

- 2012 「カンガンハリ遺跡から出土した「ブッダの誕生」図について」『真宗文化 真宗文化研究所年報』 21, pp. 1-19.
- 2013a 「カンガンハリの「初転法輪」図について」『真宗文化 真宗文化研究所年報』 22, pp. 1-25.
- 2013b 「カンガンハリ遺跡調査報告 上段レリーフ石版に描かれた仏教説話の配列を巡って」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』 41, pp. 79-93.
- 2015a 「インド初期仏教美術の仏伝図における出家の場面について」『密教図像』 34, pp. 1-18.
- 2015b 「Kanaganahalli 大塔における祇園精舎布施の場面について」『印度学仏教学研究』 64-1, pp. 329-332.
- 2017 「祇園精舎布施場面における神変図－Kanaganahalli 大塔を中心に－」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』 45, pp. 67-84.
- 2018a 「カナガナハリ大塔に描かれた雪山地方への伝道伝説について」『密教図像』 36, 近刊予定.
- 2018b 「『佛説義足経』に説かれる因縁物語－第 10 経と第 14 経の因縁物語と図像表現の比較考察－」『支謙訳『佛説義足経』解説研究とその周辺』 近刊予定.

Nakanishi, Maiko and Oskar von Hinüber

- 2014 *Kanaganahalli Inscriptions (ARIRIAB 17, Supplement)*. Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology.

中野義照 Nakano, Gishou

- 1956 「原始仏教における転輪聖王」『密教文化』 32, pp. 4-19.

並川孝儀 Namikawa, Takayoshi

- 1987 「初期仏教経典における buddhānubuddha の意味」『日本仏教学会年報』 53, p. 33-46.
- 2012 「初期経典にみられる仏弟子の表現」日本佛教学会第 82 回学術大会, 会場: 花園大学, 発表資料.

奈良国立博物館(編) Nara National Museum (ed.)

- 1988 『シルクロード大文明展 シルクロード・仏教美術伝来の道』奈良: 奈良国立博

物館 (財)なら・シルクロード博協会.

則武海源 Noritake, Kaigen

2008 「仏教交渉史考(序)」『仏教文化の諸相: 坂輪宣敬博士古稀記念論文集』東京:
山喜房佛書林 pp. 3-24.

Norman, Kenneth Roy

1991 “Asokan Inscriptions from Sannati.” In *South Asian Studies* 7. London: Society for
South Asian Studies, pp. 226-244.

小谷仲男 Odani, Nakao

1996 『ガンダーラ美術とクシヤン王朝』京都: 同朋舎出版.

岡本健資 Okamoto, Kensuke

2014 「舍利弗の外道調伏譚に関する試論」『佛教学研究』70, pp. 55-77.

岡野潔 Okano, Kiyoshi

1990 「仏陀の永劫回帰信仰」『論集』17, 印度学宗教学会編, pp. 1-17.

1992 「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」『中央学術研究所紀要』27,
pp. 55-91.

1999 「仏陀が永劫回帰する場所への信仰ー古代インドの仏蹟巡礼の思想ー」『論集』
26, 印度学宗教学会編, pp. 77-92.

小野玄妙 Ono, Genmyo

1916 『佛教之美術及歴史』東京: 佛書研究会.

Poonacha, K. P.

2013 *Excavations at Kanaganahalli: (Sannati) Taluk Chitapur, Dist. Gulbarga, Karnataka,*
MASI No. 106. Delhi: Chandu Press. (出版年は2011年と記載されているが、実際に
刊行されたのは2013年である)

Quintanilla, Sonya Rhie

2007 *History of Early Stone Sculpture at Mathura, ca. 150 BCE-100 CE.* Leiden: Brill.

- 李柱亨 Rhi, Ju-hyung
 1991 *Gandhāran Images of the “Śrāvastī Miracle” : An Iconographic Reassessment.*
 Unpublished Ph D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Rosen Stone, Elizabeth
 1944 *The Buddhist Art of Nāgārjunakoṇḍa.* Delhi: Motilal Banarsidass.
 2008 “Some Begram Ivories and the South Indian Narrative Tradition: New Evidence.” In
Journal of Inner Asian Art and Archaeology 3. Trunhort, Belgium: Brepols Publishers,
 pp. 47–50.
- Roth, Gustav
 1986 “The Woman and Tree Motif – Śālabhañjikās-Ḍlamalika in Prakrit and Sanskrit text
 with special reference to Śilpaśāstras including notes on Dohada.” In *Indian Studies:
 Selected Papers by Gustav Roth. Published at the Occasion of his Seventieth
 Birthday* (Bibliotheca Indo Buddhica 32), ed. Heinz Bechert, and Petra Kieffer-Pülz,
 rpt. Delhi: Sri Satguru Publications, pp. 19–44.
- 定方晟 Sadakata, Akira
 2001 「二商人奉食の伝説について」『東海大学紀要 文学部』76, pp. 77–120.
 2002 「法輪とフヴァルナ」『東海大学紀要 文学部』78, pp. 106–130.
- 定金計次 Sadakane, Keiji
 1981 「サーンチー第一塔の塔門浮彫における共同制作についてー東門の出城図を中心
 にー」『仏教芸術』136, pp. 26–42.
- 阪本(後藤)純子 Sakamoto-Gotō, Junko
 1993 「髪と鬚」『日本仏教学会年報』59, pp. 77–90.
 2008 「「水たち」*āpas*と「信」*śraddhā*ー古代インド宗教における世界観ー」『印度学宗教
 学会 論集』35, pp. 41–62.
 2014 「出家と髪・鬚の除去ージャイナ教と仏教との対比ー」『奥田聖應先生頌寿記念
 インド学仏教学論集』東京: 佼成出版社, pp. 334–349.

Sander, Lore

- 2006 “Anmerkungen Zum Śālabhañjikā-Motiv.” In *Jaina-Itihasa-Ratna: Festschrift für Gustav Roth zum 90. Geburtstag*, Indica et Tibetica, 47. Marburg: Indica et Tibetica Verlag, pp. 439–453.

Sarma, I. K. and J. Varaprasada Rao

- 1993 *Early Brahmi Inscriptions from Sannati*. New Delhi: Harman Publishing House.

Schlingloff, Dieter

- 1981 “Die älteste Malerei des Buddhalebens.” In *Studien zum Jainismus und Buddhismus: Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf* (Alt- und neu-indische Studien 23), ed. Klaus Bruhn, and Albrecht Wezler. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, pp. 181–198.
- 1982 “Aśoka or Māra? On the Interpretation of Some Sāñchī Reliefs.” In *Indological and Buddhist studies : volume in honour of Professor J.W. de Jong on his sixtieth birthday*, ed. L.A. Hercus, F.B.J. Kuiper, T. Rajapatirana, and E.R. Skrzypczak. Canberra: Faculty of Asian Studies, Australian National University, pp. 441–455.
- 1988 *Studies in the Ajanta Paintings, Identifications and Interpretations*. Delhi: Ajanta Publications.
- 2000 *Erzählende Wandmalereien*. Vol. I: *Interpretation*. Vol. II: *Supplement*. Vol. III: *plates*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag (Ajanta. Handbuch der Malereien 1).

Schmidt, Klaus T.

- 2010 “Die Entzifferung der westtocharischen Überschriften zu einem Bilderzyklus des Buddhalebens in der „Treppenhöhle“ (Höhle 110) in Qizil.” In *From Turfan to Ajanta volume II, Festschrift for Dieter Schlingloff on the Occasion of his Eightieth Birthday*, ed. Eli Franco, and Monika Zin. Bhairahawa, Rupandehi: Lumbini International Research Institute, pp. 835–866.

Schwartzberg, Joseph E. (ed.)

- 1992 *A Historical Atlas of South Asia*. New York / Oxford: Oxford University Press.

Sharma, R.C.

- 1995 *Buddhist Art- Mathura School*. New Delhi: Wiley Eastern Limited.

Shastri, Ajay Mitra

- 1999 “Purāṇas on the Sātavāhanas: An Archaeological-Historical Perspective.” In *The Age of the Sātavāhanas, Vol. I*, ed. A. M. Shastri. Delhi: Aryan Books International, pp. 3–72.
- 2008 “Sātavāhana Kṣaharāta Chronology and Art History.” In *South Asian Archaeology 1999*, ed. Ellen M. Raven. Groningen: Egbert Forsten, pp. 341–351.

島田明

Shimada, Akira

- 2000 「アーンドラ美術のブッダ像—浮彫像に見るその成立と展開—」『佛教芸術』249, pp. 13–48.
- 2006 「アマーラヴァティー大欄楯の研究(2)–大欄楯の建造年代—」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』602, pp. 34–39.
- 2010 「造形と仏教」『仏教の形成と展開, 新アジア仏教史 02 インド II』奈良康明・下田正弘(編), 東京: 佼成出版社, pp. 270–326.
- 2012 “Formation of Andhran Buddhist Narrative: A Preliminary Survey.” In *Buddhist Narrative in Asia and Beyond: In Honour of HRH Princess Chakri Sirindhorn on her Fifty-Fifth Birth Anniversary, Vol. I*, ed. Peter Skilling and Justin McDaniel. Bangkok: Institute of Thai Studies, pp. 17–34.
- 2013 *Early Buddhist Architecture in Context: The Great Stūpa at Amarāvati (ca. 300BCE–300CE)*. Leiden / Boston: Brill.

静谷正雄

Shizutani, Masao

- 1963 「碑銘から見たサールナートの佛教」『印度学仏教学研究』11-1, pp. 132–133.
- 1978 『小乗仏教史の研究: 部派仏教の成立と変遷』京都: 百華苑.

Sivaramamurti, Calambur

- 1942 *Amaravati Sculptures in the Madras Government Museum*, Bulletin of the Madras Government Museum, New Series, General Section, IV. Madras: The Director of Stationary and Printing.

杉本瑞帆

Sugimoto, Mizuho

- 2011 「聖遺物としての舍利礼拝」密教図像学会第31回学術大会, 会場: 大正大学,

- 発表資料.
- 2017 「仏教經典における蓮華座の展開―「舎衛城の神変」を起源として―」『龍谷大学佛教学研究年報』21, pp. 25–45.
- 杉本卓洲 Sugimoto, Takusyu
- 1977 「maha (大会)について」『日本仏教学会年報』43, pp. 31–47.
- 1984 『インド仏塔の研究―仏塔崇拜の生成と基盤―』京都: 平楽寺書店.
- 蘇錦坤 Su, Ken
- 2009 「《雪山夜叉經》--巴利經典與漢譯經典對照閱讀」『正觀雜誌』48, pp. 69–142.
- 高田修 Takata, Osamu
- 1967 『仏像の起源』東京: 岩波書店.
- 高橋審也 Takahashi, Shinya
- 1979 「雪山部とその系譜(上)」『仏教研究』8, pp. 105–125.
- 1982 「雪山部とその系譜(下)」『仏教研究』11, pp. 75–100.
- 田辺勝美, 前田耕作(編) Tanabe, Katsumi and Maeda, Kosaku (eds.)
- 1999 『世界美術大全集 東洋編 15 中央アジア』東京: 小学館.
- 谷川泰教 Tanigawa, Taikyo
- 2000 「仏に二言はあるか―五比丘の帰仏をめぐって―」『密教文化』205, pp. 116–174.
- 丹治昭義 Tanji, Teruyoshi
- 1997 「3. 祇園精舎建立縁起の一考察」『祇園精舎―サヘート遺跡発掘調査報告書―本文編 II』関西大学 日・印共同学術調査団編. 吹田: 関西大学出版部, pp. 1371–1408.
- 手嶋英貴 Teshima, Hideki
- 2017 「転輪聖王の誕生―ヴェーダ・仏典・叙事詩を横断する人物像の形成―」, 印度学仏教学会第 68 回学術大会パネル C ―「越境」するヴェーダ研究―ヴェーダ文献研究の方法と広がり―, 会場: 花園大学, 発表資料.

徳岡亮英 Tokuoka, Ryoei

1989 「Sivaka-dvāra と aṭṭhīhi」『印度学仏教学研究』38-1, pp. 278-285.

東京国立博物館パキスタン調査隊 Tokyo National Archaeological Mission to Pakistan

2011 『ザールデリー—パキスタン古代仏教遺跡の発掘調査—』東京：東京国立博物館.

Tripathi, Aruna

2003 *The Buddhist art of Kauśāmbī (from 300 BC to AD 550). Emerging perceptions in Buddhist studies*, no. 17. New Delhi: D.K. Printworld (P) Ltd.

塚本啓祥 Tsukamoto, Keisho

1973 『アショーカ王』サーラ叢書 21. 京都：平楽寺書店.

1976 『アショーカ王碑文』レグルス文庫 54. 東京：第三文明社.

1980 『改訂増補・初期仏教教団史の研究—部派の形成に関する文化史的考察—』
東京：山喜房佛書林.

1996 『インド仏教碑銘の研究 I —TEXT, NOTE, 和訳—』京都：平楽寺書店.

1997 「サールナート(鹿野苑)の今昔」『日蓮教学の諸問題：浅井円道先生古稀記念論
文集』京都：平楽寺書店, pp. 861-883.

1998a 『インド仏教碑銘の研究 II 索引・図版』京都：平楽寺書店.

1998b 「碑文に見られるインド仏教の実態」『印度学仏教学研究』47-1, pp. 418-426.

2001 『インド仏教における虚像と実像』東京：山喜房佛書林.

上枝いづみ Ueeda, Izumi

2007 「ガンダーラの「誕生」図にみる文化基盤」『密教図像』26, pp. 62-76.

2015 「ガンダーラにおける仏伝図の構成—アーンドラとの比較を視野に—」科研「中
央アジア仏教美術の研究—釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に—(代
表：宮治昭)」, 2015年度12月, 第3回全体研究会, 会場：龍谷大学大宮学舎西翼
大会議室, 発表資料.

2017 「インド仏伝美術の変遷からみたカナガナハリ大塔—ガンダーラとの比較を
を中心に—」科研「中央アジア仏教美術の研究—釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術
の生成を中心に—(代表：宮治昭)」, 2017年度6月, 第1回全体研究会, 会場：龍

谷大学大宮学舎西翼大会議室，発表資料。

- 山田明爾 Yamada, Meiji
- 2014 「善き人、sat-puruṣa —舍利供養に関わるいくつかの疑問—」 龍谷大学佛教会主催 2014 年 12 月 4 日仏教学大会，会場：龍谷大学大宮学舎西翼大会議室発表資料。
- 山田龍城 Yamada, Ryujyo
- 1959 『梵語佛典の諸文献 —大乘仏教成立論序説 資料編—』 京都：平楽寺書店。
- 山本眞理子 Yamamoto, Mariko
- 2007 『Śāyanāsanavastu の研究』 佛教大学文学研究科仏教学専攻 修士論文。
- 山崎元一 Yamazaki, Gen-ichi
- 1979 『アショーカ王伝説の研究』 東京：春秋社。
- 1982 『アショーカ王とその時代—インド古代史の展開とアショーカ王—』 東京：春秋社。
- Yazdani, Gulam
- 1942 *Ajanta: Monochrome Reproductions of the Ajanta Frescoes Based on Photography, with an Explanatory Text by G. Yazdani and an Appendix on Inscriptions by N. P. Chakravarti*, part 3. London: Oxford University Press, rpt. Delhi: Swati Publications, 1983.
- Windisch, Ernst
- 1895 *Māra und Buddha*. Leipzig: S. Hirzel.
- 1908 *Buddhas Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung*. Leipzig: B. G. Teubner.
- ヴィンテルニッツ，中野義照(訳) Winternitz, M. and Nakano, Gishou (trans.)
- 1978 『仏教文献—インド文献史 第3巻—』 和歌山：日本印度学会。
- Zin, Monika
- 2006 *Mitleid und Wunderkraft : Schwierige Bekehrungen und ihre Ikonographie im indischen Buddhismus*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

- 2010 “The Purchase of the Jetavana in an Amaravati-Relief.” In *South Asian Archaeology 2007, Proceedings of the 19th International Conference of the European Association of South Asian Archaeologists in Ravenna*, ed. Pierfrancesco Callieri, and Luca Colliva. Oxford: Archaeopress, pp. 369–373.
- 2011a “Narrative Reliefs in Kanaganahalli : Their Importance for Buddhist Studies.” In *Marg* 63.1, pp.16–17.
- 2011b “Heavenly Relics –The Bodhisatva's Turban and Bowl in the Reliefs of Gandhara and Andhra (including Kanaganahalli).” A conference paper at The XVI th Congress of the International Association of Buddhist Studies, June 20–25, 2011, Dharma Drum Buddhist College, Jinshan, New Taipei City, Taiwan.
- 2012 “Māndhātara, the Universal Monarch, and the Meaning of Representations of the Cakravartin in the Amaravati School, and of the Kings on the Kanaganahalli Stūpa.” In *Buddhist Narrative in Asia and Beyond: in honor of HRH Princess Maha Chakri Sirindhorn on her fifty-fifth birth anniversary*, Vol. 1, eds. Peter Skilling and Justin McDaniel. Bangkok: Institute of Thai Studies, Chulalongkorn University.

図版出典

序

- 図 1 Schwartzberg[1992: 22, Pl. III. C. 3]より該当部分を拡大。
- 図 2 N. 4092 を修正して掲載。
- 図 3 筆者制作
- 図 4 筆者制作
- 図 5 筆者制作
- 図 6 筆者制作
- 図 7 筆者制作

第 1 章

- 図 8 荒牧/Dalayan/中西[2011: 74 (Kanaganahalli22)]から転載。
- 図 9 荒牧/Dalayan/中西[2011: 73 (Kanaganahalli21)]から転載。
- 図 10 荒牧/Dalayan/中西[2011: 73 (Kanaganahalli21)]から転載し、該当部分を拡大。
- 図 11 塚本啓祥[1998a: Fig. 25]を修正拡大した。

第 2 章

- 図 12 樋口隆康(編)[1984: Pl. II-5]
- 図 13 Coomaraswamy[1956: Pl.8, Fig.23]
- 図 14 Schlingloff[2000: Vol. III, Pl.12]より該当部分を拡大。
- 図 15 Coomaraswamy[1935: Pl.33]より該当部分を拡大。
- 図 16 荒牧/Dalayan/中西[2011: 70 (Kanaganahalli 15)]から転載。
- 図 17 Stone[1994: Fig. 210]より該当部分を拡大。
- 図 18 荒牧/Dalayan/中西[2011: 95]から転載。

第 3 章

- 図 19 Coomaraswamy[1956: Fig. 32]
- 図 20 Coomaraswamy[1956: Fig. 32] より該当部分を拡大。
- 図 21 筆者による現地撮影写真。
- 図 22 荒牧/Dalayan/中西[2011: 66, 94]を修正拡大して転載。
- 図 23 荒牧/Dalayan/中西[2011: 67, 94]を修正拡大して転載。
- 図 24 筆者制作
- 図 25 荒牧/Dalayan/中西[2011: 78]を修正拡大して転載。
- 図 26 筆者による現地撮影写真。
- 図 27 栗田功[2003: Fig. 172]

第 4 章

- 図 28 田辺/前田(編)[1999: Fig. 138]
- 図 29 Coomaraswamy[1956: Fig. 251]
- 図 30 筆者による現地撮影写真。
- 図 31 Coomaraswamy[1956: Fig. 62]
- 図 32 早島理先生による現地撮影写真 (1989 年 4 月 1 日現地撮影)。
- 図 33 Quintanilla[2007: 285]
- 図 34 肥塚/宮治(編)[2000: 挿図 61]
- 図 35 Yazdani[1942: Pl. 24(b)]
- 図 36 筆者による現地撮影写真。
- 図 37 荒牧/Dalayan/中西[2011: 63]を修正拡大して転載。
- 図 38 筆者制作
- 図 39 荒牧/Dalayan/中西[2011: 54]を修正拡大して転載。

第 5 章

- 図 40 Coomaraswamy[1956: Fig. 67]
- 図 41 Coomaraswamy[1956: Fig. 67] より該当部分を拡大。

- 図 42 筆者による現地撮影写真。
- 図 43 N. 3430 を部分拡大し、修正を加えたものである。
- 図 44 N. 3430 を部分拡大した。
- 図 45 N. 3430 を部分拡大した。

本研究で使用した筆者による現地撮影写真(カナガナハリ大塔の写真を含む)は、平成 20 年-22 年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 20520050、研究代表者: 荒牧典俊(京都大学名誉教授)の研究協力者として、現地調査(2009 年 2 月 12 日-24 日)を実施した際に撮影したものである。カナガナハリ大塔の写真については、インド考古局より写真撮影及び出版許可(F. No. 15/2/2009-EE)を得て撮影したものであることをここに明記します。

資料

資料 1～資料 4 は全て筆者制作。

序論

カナガナハッリ大塔現地調査の記録

カナガナハッリ大塔 (Lat. $16^{\circ} 51' 10''$ N / Long. $76^{\circ} 56' 20''$ E¹) は、インド南部のカルナータカ (Karnataka) 州北部、グルバルガ (Gulbarga) 県に流れるビーマ川 (クリシュナー河の支流) の左岸に位置する仏教遺跡である (→ 図 1 及び資料 3 を参照)。以前は 1989 年にアショーカ王の法勅が発見された場所²として知られるサンナッティ (Sannati) の大塔 (Mahāstūpa) と呼ばれていたが、遺跡に最も近

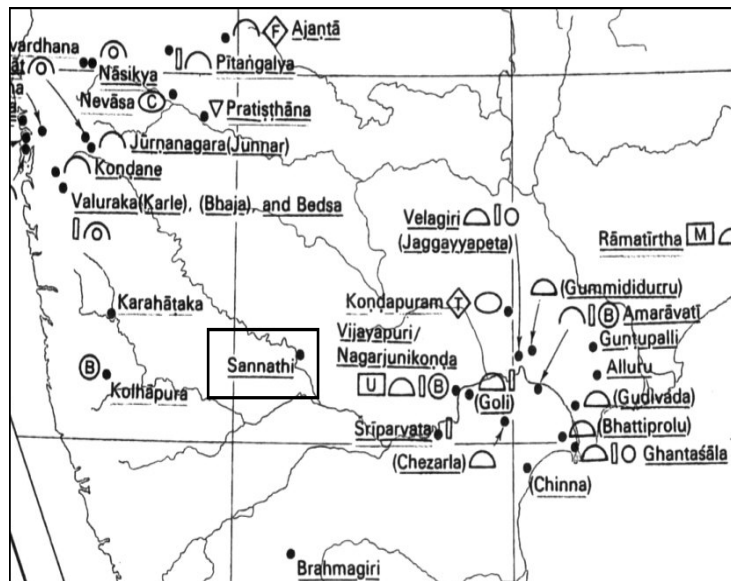


図 1: インド地図 (部分) クリシュナー河流域

¹ カナガナハッリ大塔の経緯度は Dalayan 博士の記した報告に従う。荒牧/Dalayan/中西[2011: 42] Poonacha[2013: 22]にも同様の経緯度が記されている。

2007 年にカナガナハッリ大塔を研究調査した則武海源[2008: 14]の報告によると、経緯度を再測定した結果、正確な所在地の経緯度は Lat. $16^{\circ} 50' 07.3''$ N, $76^{\circ} 56' 03.2''$ E であった。そのことは、Falk[2006: 130]の記した経緯度 (Lat. $16^{\circ} 49' 00''$ N, $76^{\circ} 54' 00''$ E) を訂正したものである。

² アショーカ王の法勅は、サンナッティにある Chandralāmbā 寺院に祀られていた Kālī 像の台座として使用されていたところを発見された。横たわる摩崖法勅は 3 つに分断されており、摩崖法勅の中央付近には、Kālī 像を設置するための正方形の穴が空けられている。発見時の詳細と、刻まれたアショーカ法勅の内容 (摩崖法勅第 12 章、第 14 章 (Rock Edict XII, XIV)、別刻摩崖法勅第 1 章、第 2 章 (Separate Edict I, II)) は、Norman[1991]、Sarma and Rao[1993]、Goyal[2005: 54–60]、Falk[2006: 130–131] 等を参照。

現在は、カナガナハッリ大塔の西門正面に、アショーカ法勅のレプリカが設置されており、鑑賞することが出来る。筆者は、2009 年 4 月に現地を確認することが出来た。

いところにあるカナガナハリ村にちなんで、現在はカナガナハリ(Kanaganahalli)大塔と呼ばれている³。近年、碑文の解読によって、古名はアダーラカ大塔(Adhāraka-Mahācaitya)であることが確定された⁴。

筆者は、荒牧典俊博士(京都大学名誉教授)を研究代表者とする「大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究」科学研究費補助・基盤研究(C)の研究協力者として、現在も発掘・復元途中のカナガナハリ大塔の研究調査を2回(2009年2月と4月)実施している。その調査報告は拙稿[2011][2013b]に記しているが、その後、インド考古局によるカナガナハリ大塔の報告書Poonacha[2013]と、ヒニューバー博士と筆者によるカナガナハリ大塔碑文の研究Nakanishi and von Hinüber[2014]の刊行によって訂正や追加を要する箇所が格段に増えている。序論では、このような新規情報を含めたカナガナハリ大塔の現状把握と本研究の研究方針を述べる。

0.1

カナガナハリ大塔の概況

Poonacha[2013]によれば、大塔は直径約26メートル、その周囲を幅3.75メートルの右繞道が取り囲んでいる⁵。右繞道に沿って高さ2.55メートルの欄楯柱130本が36–45センチメートルの間隔で設置されている。全ての欄楯柱は崩壊し、貫石を嵌め込んだ完全な姿で残っているものは無い。崩壊した欄楯柱を観察すると、2本の金属の棒が欄楯内部に打ち込まれているものが散見され、補強のために金属が使用されていたことは興味深い(→図2を参照)。大塔の円胴部表面は石灰岩の講材で組み立てられていて、半円形のドームは完全に崩壊している。中核は

³ ASI[2002b]より Kanaganahalli という名称が使用され始めたことが確認される。以前はドイツでのシンポジウムや Meister[2002]、[2004]、Dalayan[2011]では、カンガンハリ(Kanganhalli)と記されることが多かったが、現在はカナガナハリに統一される。

本研究では、混乱を避けるために、カンガンハリを採用しているシンポジウムや論考であっても、カナガナハリに統一して記すこととする。

⁴ Nakanishi and von Hinüber[2014: 31–33 (I. 8), 42–43 (II. 1, 3)]を参照。

筆者は、現在のところ、文献資料中にアダーラカ大塔(Adhāraka-Mahācaitya)に由来する記事を見出せていない。

⁵ Dalayan[2011: 42]の報告では、仏塔は直径22メートル。その周囲を幅3メートルの右繞道が取り囲み、欄楯を含めた全体の直径は28メートルと記している。

レンガや石の破片を伴う泥で満たされている⁶。

ストウーパの基壇は2段になっており、上段となる円胴部に 59 枚の上段レリーフ石版(Upper drum slabs)が並び、80 センチメートルの上段右繞道 (Upper pradakṣiṇapatha)を隔てて、表面に欄楯文様が施された碑文付きのコーニス (cornice / puphagahanis⁷)がストウーパを取り囲んでいる。そして下段となる基壇の表面にも 76 枚の下段レリーフ石版 (Lower drum slabs)が円環している(→ 図 3 を参照)⁸。基壇の四方には、5 枚の下段レリーフ石板(正面に 3 枚、左右に 1 枚ずつ)によって構成されるアーヤカ基壇 (āyāgaplatforms i.e. āyakaplatfroms)が設置されている(→ 図 4 を参照)。その高さは、1.25 メートル、3 枚の下段レリーフが並ぶ正面の横幅は、3.60 メートルである。出土状況から東のアーヤカ基壇上にのみ碑文が刻まれた 4 本のアーヤカ柱が建っていたことが確認される⁹。簡易的ではあるが筆者が復元したカナガナハッリ大塔の東正面は図 5 のようになる(→



図 2: カナガナハッリ大塔 欄楯柱内部

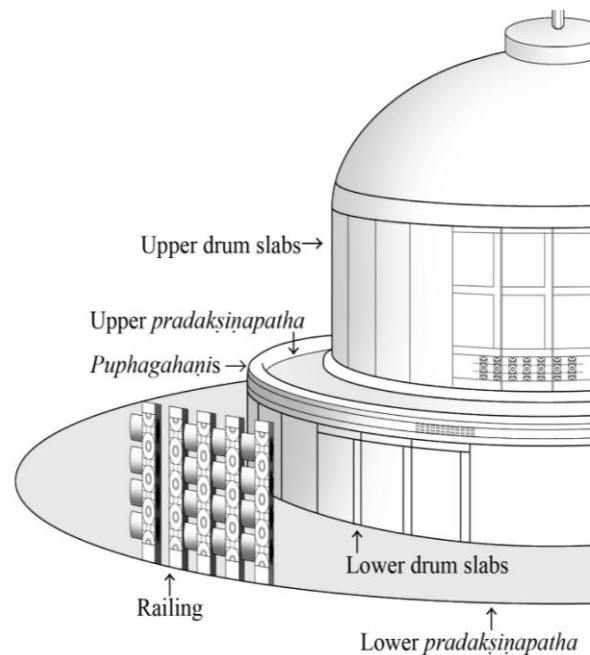


図 3: カナガナハッリ大塔 各部材解説図

⁶ Dalayan[2011: 42]参照。筆者も現地調査にて肉眼で確認した。

⁷ コーニスに刻まれる数点の碑文に、寄進名とコーニスが *puphagahanis* (*puṣpa-gahani*)であることが記されている。Nakanishi and von Hinüber[2014: 44–57 (II. 2, 1–10)]

⁸ Poonacha[2013: 171]参照。

⁹ Nakanishi and von Hinüber[2014: 40–42 (II. 1, 1–2)]

図5を参照)¹⁰。アーヤカ基壇上に設置されたコーニスには、仏伝の各場面によって構成されたフリーズが右から左へと時系列に描かれている¹¹。そのことは、右繞に沿って仏伝フリーズが鑑賞されていたことを意味している。

カナガナハッリ大塔を構成する主要な部材は以上であるが、その他に、仏像出現後に設置された仏立像や過去仏座像なども出土していることから、カナガナハッリ大塔は上段レリーフ石板などに描かれる無仏像時代の表現形式から、仏像出現後の表現形式へと移行してもなお増改築を経て長期間機能していたと言って良いだろう。

そのカナガナハッリ大塔の編年については、現在の研究状況と合わせて次節に整理しておきたい。

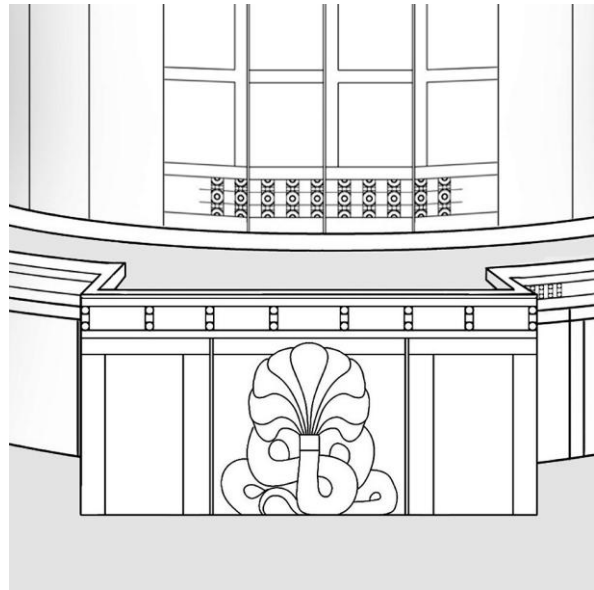


図 4: カナガナハッリ大塔 西門正面図

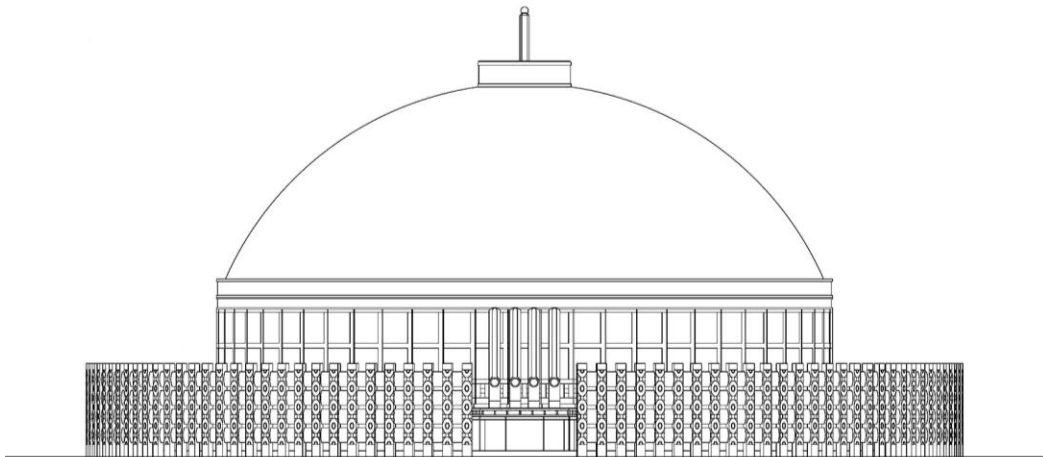


図 5: カナガナハッリ大塔 東門正面復元図

¹⁰ Poonacha[2013]の扉絵には、南門正面の復元図が掲載されており、図5よりも詳細に描き込まれているので参照されたい。

¹¹ Poonacha[2013: 428–431, Pl. CXXII–CXXV] 四方のアーヤカ基壇に設置された仏伝フリーズの主題については、平岡三保子[2015]による研究発表レジюмеに問題点が整理されている。

0.2

カナガナハリ大塔の先行研究と造営過程

2000 年に出版された *Indian Archaeology 1994-5 A Review* には、1994 年から 1995 年にかけて実施されたカナガナハリ大塔の試験発掘が記されている。試験発掘の段階では、舗装された右繞道、彫刻された欄楯の一部やレリーフ石版が出土したことが報告されている¹²。主要な発掘は直径 26m の大塔を中心に 2500 平方メートルの範囲にわたって、1996 年から 2001 年まで実施された¹³。

他方で、欧米の美術史学及び考古学に携わる研究者にカナガナハリ大塔が周知されるようになったのは、1999 年にライデンで開催された国際学会(EurASEAA¹⁴)において、当時インド考古局に所属していたアジャイ・シャンカール(Ajay Shankar)博士による発表が発端となっている。翌年の 1 月にはクリスチャン・ルクザニッツ(Christian Luczanits)博士がカナガナハリ大塔の現地調査を実施している¹⁵。しかし残念なことに、その 1 ヶ月後にアジャイ・シャンカール博士が交通事故により他界し、1999 年の発表原稿は出版されていない¹⁶。

¹² ASI[2000: 39-40]

¹³ Dalayan[2011: 42]、ASI[2002b: 53-55]、ASI[2003: 93-96]、ASI[2004: 66-67]

¹⁴ The 15th International Conference of the European Association of South Asian Archaeologists, Leiden, 1999.

¹⁵ 筆者は、2011 年 8 月 5-6 日に大谷大学で開催された「浄土教に関する特別国際シンポジウム、(龍谷大学アジア仏教文化研究センター・国際真宗学会共催)」でポール・ハリソン博士との共同研究発表 “New Light on (and from) the Muhammad Nari Stele.” のために来日されたルクザニッツ博士と後日、カナガナハリ大塔について情報交換する機会に恵まれた。多忙にもかかわらずお時間を取って下さり、その際にルクザニッツ博士から非常に貴重な 2000 年に撮影されたカナガナハリ大塔の写真データを頂いた。

ルクザニッツ博士によって撮影されたカナガナハリ大塔の写真は、上段レリーフ石板の配列を考察する上で、原位置を確認することが唯一出来る大変貴重な資料である。現在その写真は、ルクザニッツ博士のホームページ(www.luczanits.net)から閲覧可能となっている。

¹⁶ アジャイ・シャンカール博士の交通事故については、インドのニュースサイト(rediff.com)で知ることが出来た。(<http://www.rediff.com/news/2000/feb/15shirdi.htm>)

Meister[2010: 651, n. 1]にもアジャイ・シャンカール博士の発表原稿が出版されなかったことを記している。

それから 9 年の時を経て 2008 年 1 月に、ドイツ・ベルリン自由大学でカナガナハリ大塔学術シンポジウムが開催された¹⁷。幸いにも筆者は、シンポジウムに参加されたローレ・ザンダー(Lore Sander)博士より、そのシンポジウムでの発表資料を頂いている¹⁸。発表者の一人であるマイケル・マイスター(Michael W. Meister)博士の論考 Meister[2010]には、シンポジウムで討論されたカナガナハリ大塔の造営年代について触れた記述がある。それによると、造営年代については、インド考古局による年代設定が紀元前 2-1 世紀であるのに対して、欧米研究者等による一応の年代設定が紀元前 1 世紀から紀元後 4 世紀頃であり、カナガナハリ大塔が増設されながら長期間に及んで維持されていたという結論に至っている¹⁹。但しそのシンポジウムは、ルクザニッツ博士の記録写真に基づいて研究発表が行われたために、非常に情報の制限があるなかでの開催であった²⁰。

現在は、2013 年にインド考古局から調査報告書が公刊されたおかげで、Poonacha[2013: 623-630]によるカナガナハリ大塔の造営過程が基準となっている²¹。本研究も差し当たり、Poonacha[2013]の記した造営過程に準じて研究を進めるので、次に、カナガナハリ大塔の編年をまとめて記しておこう²²。

¹⁷ ドイツで開催されたカナガナハリ大塔のシンポジウムについては、松田和信先生より教えて頂いた。„Der Stūpa von Kanganhalli: Ein Symposium zu einen neu entdeckten buddhistischen Monument im Indischen Bundesstaat Karnataka,“ in der Freie Universität, Berlin, 11-12 January 2008.

¹⁸ ザンダー博士によるカナガナハリ大塔の碑文の一部を解読したデータを以下の題で頂戴した。„Kanganhalli-Inschriften nach Fotos für Prof Aramaki“ aufgenommen von Maiko Nakanishi (MA) 2009 geordnet nach ihren Fotonummern.

ザンダー博士によるカナガナハリ大塔の碑文の解読は、Nakanishi and von Hinüber[2014]の出版時に参照させて頂いた。ここに感謝の意を表します。

¹⁹ Meister[2010: 651-652, n. 2]

²⁰ 2013 年にインド考古局から報告書が公刊されるまでの間に、カナガナハリ大塔を装飾するレリーフ石板を考察した多くの論考が提出されている。ドイツでのカナガナハリ学術シンポジウムで発表された Rosen Stone[2008]、Meister[2004]、[2007]、[2010]をはじめ、Dehejia[2007]、Zin[2011a]、[2011b]、[2012]、拙稿[2012]、[2013a]等が挙げられる。

²¹ インド考古局より公刊された Poonacha[2013]の報告書には、出版年が 2011 年と記されているが、実際に我々の手元に入手することが可能となったのは 2013 年である。

²² Poonacha[2013]による編年については平岡三保子[2015]、上枝いづみ[2017]によってもまとめられおり、参照した。

第 1 期 マウリヤ時代: *ca.* 320BCE (Period I. The Mauryan Period)

直径 16 メートル、高さ 7.5 メートルの仏塔が造営される。

カナガナハッリ近郊のサンナッティからアショーカ法勅(摩崖法勅第 12 章、第 14 章 (Rock Edict XII, XIV)、別刻摩崖法勅第 1 章、第 2 章(Separate Edict I, II))が出土²³。
サンナッティ地域がアショーカ王(*ca.* 268–233 BCE)の領地下であったことが証明される。

第 2 期 サータヴァーハナ時代 (Period II. The Sātavāhana)

第 1 段階 (Phase I) 紀元前 1 世紀頃～紀元後 1 世紀 (*ca.* the 1st century BCE / CE)

第 1 期に造営された仏塔を石灰岩のブロックが覆蓋し、円胴部に上段レリーフ石板が設置される。その上段レリーフ石板(Kanaganahalli 21²⁴)には、シムカ王在位 16 年 ([AMS. Purāṇa] 36 BCE / [SB. Coin] 64 BCE)に寄進されたことを記す碑文がある²⁵。
基壇には下段レリーフ石板が設置され、その上にコーニスが載る。いくつかの下段レリーフ石板には、祇園精舎布施図²⁶、法輪図²⁷、僧院図²⁸が彫刻される。右繞道と欄楯が付設される。

第 2 段階 (Phase II) ～紀元後 2 世紀初頃 (the early 2nd century CE)

新たな下段レリーフ石板を追加し、基壇が拡張される。上段レリーフ石板にも新しく、複数のサータヴァーハナ王の肖像を描いた上段レリーフ石板が設置される²⁹。上段レリーフ石板上部に、動物の装飾帯フリーズが施される。アーヤカ基壇の原型がこの段階で設

²³ 序論: 註 2 を参照。別刻摩崖法勅第 1 章、第 2 章(Separate Edict I, II)は、ダウリー(Daulī: Falk[2006: 113–115])とジャウガダ(Jaugada: Falk[2006: 121–123])に刻まれているものと同じ内容である。同じオリッサ州に位置するダウリー、ジャウガダ出土の別刻摩崖法勅の内容については、塚本啓祥[1976: 108–114]に記されている。

²⁴ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 73, 92]、Poonacha[2013: 406, Pl. C. 464, no. 101. 495, Pl. CXLIII, A]

²⁵ Nakanishi and von Hinüber[2014: 28 (I. 3. Pl. 1)]

²⁶ Poonacha[2013: 361, Pl. LV, A, B]

²⁷ Poonacha[2013: 357, Pl. LI, A]

²⁸ Poonacha[2013: 361, Pl. LV, C]

²⁹ Poonacha[2013: 628]には、4 名のサータヴァーハナ王(Sātakarṇi、Mātalaka、Sundara Sātakarṇi、Vāsisthiputra Puṣumāvi (Puṣumāvi II))の肖像が設置されたと記す。

置された可能性がある。ヴァーシシュティプトラ・シュリー・プルマーヴィ(プルマーヴィ 2 世)王の在位 35 年([SB. Coin] 120 CE)に寄進された上段右繞道の床板(floor slab³⁰ / *paṭa i.e. paṭṭa*)が設置される³¹。

第 3 段階 (Phase III) 紀元後 2 世紀中～3 世紀 (the mid 2nd century CE～the 3rd century CE)

基壇をさらにレンガで取り囲んで拡張し、四方にアーヤカ基壇が構築される。その上部には、仏伝フリーズが施されたコーニスが付設される³²。東のアーヤカ基壇のみ、4 本のアーヤカ柱が設置される³³。

既存の下段レリーフ石板は再利用し、新たに彫刻が刻まれた下段レリーフ石板を加えることで、基壇の拡張部分が補充される。それに伴い、同じく欄楯と右繞道も拡張される。欄楯柱の背面にヴァーシシュティプトラ・シュリー・サータカルニ王の在位 6 年([AMS. Purāṇa] 125 CE / [SB. Coin] 131 CE)と刻まれる寄進銘あり³⁴。

第 4 段階 (Phase IV)³⁵

大乘仏教の隆盛期に呼応して、南と西のアーヤカ基壇上に仏立像が設置される³⁶。北と東のアーヤカ基壇上には、仏坐像を導入。右繞道上の四維に 2 体ずつ過去仏坐像が配置される³⁷。

第 5 段階 (Phase V)³⁸ ～紀元後 3 世紀中頃 (the mid 3rd century CE)

³⁰ Poonacha[2013: 439–440]を参照。

³¹ Falk[2009: 201–205]、Nakanishi and von Hinüber[2014: 31–33 (I. 8. Pl. 2)]、Poonacha[2013: 458, no. 75. 488, Pl. CXXXVI. 8]

³² 西門のアーヤカ基壇上に設置されたコーニスに、ヴァーシシュティプトラ・チャンダサータカルニ王の在位 11 年([AMS. Purāṇa] 216 CE / [SB. Coin] 211 CE)と記す寄進銘があるので、コーニスは 3 世紀初に設置されたと考えられる。Nakanishi and von Hinüber[2014: 38 (I. 13. Pl. 5)]

³³ 序論: 註 9 を参照。

³⁴ Nakanishi and von Hinüber[2014: 34–35 (I. 10. Pl. 3)]

³⁵ 第 4 段階(Phase IV)を Poonacha[2013: 629–630]の第 9 章:「年代論」に従って記しているが、第 4 章:「彫刻」の編年を記す箇所 Poonacha[2013: 167–168]では、第 9 章の第 5 段階(Phase V)の内容が記されている。

³⁶ Poonacha[2013: 432, Pl. CXXVI]

³⁷ Poonacha[2013: 433–434, Pl. CXXVIIA, B, C, D–CXXVIII A, B, C, D]、Nakanishi and von Hinüber[2014: 76–80 (II. 7, 1–9. Pl. 24–26)]

³⁸ 序論: 註 35 で指摘したように、第 4 章:「彫刻」の箇所 Poonacha[2013: 168]では、第 5 段階(Phase V)

東のアーヤカ基壇を改修。新たに設置された下段レリーフ石板には、マータリープトラ・シュリー・プルマーヴィ(プルマーヴィ 4 世)王の在位時に([AMS. Purāṇa] 225–230 CE / [SB. Coin] 225–240 CE)寄進されたことを記す銘文あり³⁹。

カナガナハッリ大塔の原型は第 1 期マウリヤ時代まで遡るが、Poonacha[2013]によると、その塔内やアーヤカ基壇の内部から舍利容器などの奉納物が出土したという報告は無い⁴⁰。このことは、カナガナハッリ大塔の造営目的を理解する際に留意すべき点である。

続く第 2 期サータヴァーハナ時代には、初代のシムカ王と、王朝最後の王とされるマータリープトラ・シュリー・プルマーヴィ王の年紀付き寄進文があるので、サータヴァーハナ王朝前期(the early Sātavāhanas: ca. 100–20BCE)と、後期(the late Sātavāhanas: ca. 50–60 to 225–245CE)の両期に及び継続的に寄進を受けて大塔の増改築が行われたと考えられる⁴¹。次節以降では、本論で考察する上段レリーフ石板に焦点を絞り、編年に基づく制作年代と図像の特徴をさらに詳しくみてみよう。

0.3

59 枚の上段レリーフ石版について

カナガナハッリ大塔から出土した遺品の中で、これまでに最も注目されてきたのは、仏塔の円胴部と基壇に設置されていた上段・下段レリーフ石板に描かれる図像表現である⁴²。特に、上段レリーフ石板に描かれたアショーカ王の肖像 2 点は、カナガナハッリ大塔を代表するレリ

に仏立像と坐像が設置されたと記しており、第 4 章:「彫刻」の第 4 段階(Phase IV)と第 5 段階(Phase V)が第 9 章の年代論で記される編年とは逆に記されている。

³⁹ Nakanishi and von Hinüber[2014: 38–39 (I. 14)]参照。

⁴⁰ 古代初期インド美術段階の舍利容器は、仏塔の覆鉢部、もしくはより深い基壇部分から出土している。ブッダの遺骨は、ピプラーワーの仏塔から出土した舍利容器に収められていた。しかし、それ以外の区画からの出土や、剥き出しの舍利容器のレリーフ表現も存在している。アマラーヴァティー大塔、バアヴィコンダ等は、アーヤカ柱の基壇より出土しているが、カナガナハッリ大塔からは、仏塔以外の区画から出土したという報告もない。インドにおける舍利容器の出土については、杉本瑞帆[2011]を参照。

⁴¹ サータヴァーハナ王朝の前期・後期の年代については、Shimada[2013: 48–58]を参照。

⁴² 個別の上段レリーフ石板についての先行研究は、序論：註 20 を参照。

ーフとして注目を浴びてきた⁴³。カナガナハリ大塔は、現存最古の仏教美術を保存する中インドのバールフット、西インドのサーンチー大塔と、南インドのアマラーヴァティー大塔とを結ぶ中継地点に位置することから、その図像表現は両地域の特徴を具えていることが予想される(→ 資料 3: インド仏教遺跡地図を参照)。その上段レリーフ石板について、0.3.1: 外観的特徴、0.3.2: 出土状況と配列問題、そして 0.3.3: 制作年代と図像表現の 3 つに分けて順に整理することで、現状把握に努めたい。

0.3.1

上段レリーフ石板の外観的特徴

59 枚の上段レリーフ石板はハンサ鳥のレリーフによって縦に上段・下段と 2 つの区画に分割されており、その両区画に個々の仏伝、ジャータカ、建造物(アショーカ王柱等)、ナーガ、そして王族の肖像等⁴⁴が彫刻されている。必ずしも両区画の図像が関連した内容であるとは限らない⁴⁵。それぞれにその図像に関連した内容の碑文が併存している。そして、一番下部分には、蓮弁で装飾された欄楯文様が彫刻されている。縦の長さは全てのレリーフ石板が 3.30 メートル程度であるのに対して、横の長さはレリーフ石板によって差異があるが、一番横幅が広い石板で 1.30 メートル程である⁴⁶。

上段・下段レリーフ石板は、カナガナハリ大塔の円胴部と基壇を円環していたので、隣接するレリーフ石板と組み合わせるために、両端に建築意匠が見出される。59 枚の上段レリーフ石板には、枠部分に施された壁柱(pilaster)の有無によって次の 4 タイプ(①～④)に分類される(→ 図 6 を参照)。

⁴³ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 91–92, 102]、Poonacha[2013: 410–411, Pl. CIV–CV]

⁴⁴ 序論: 註 29 を参照。

⁴⁵ 例えば、上段レリーフ石板 Kanaganahalli 07 は、上段がヤクシャ塔廟への参拝図であり、下段が帝釈窟説法図であることが碑文の解説により比定されている。
荒牧/Dalayan/中西[2011: 66]、Nakanishi and von Hinüber[2014: 92–93 (III. 2, 4), 95–96 (III. 2, 12)]

⁴⁶ Poonacha[2013: 86] 一番横幅が狭い石板で、1.15 メートルである。

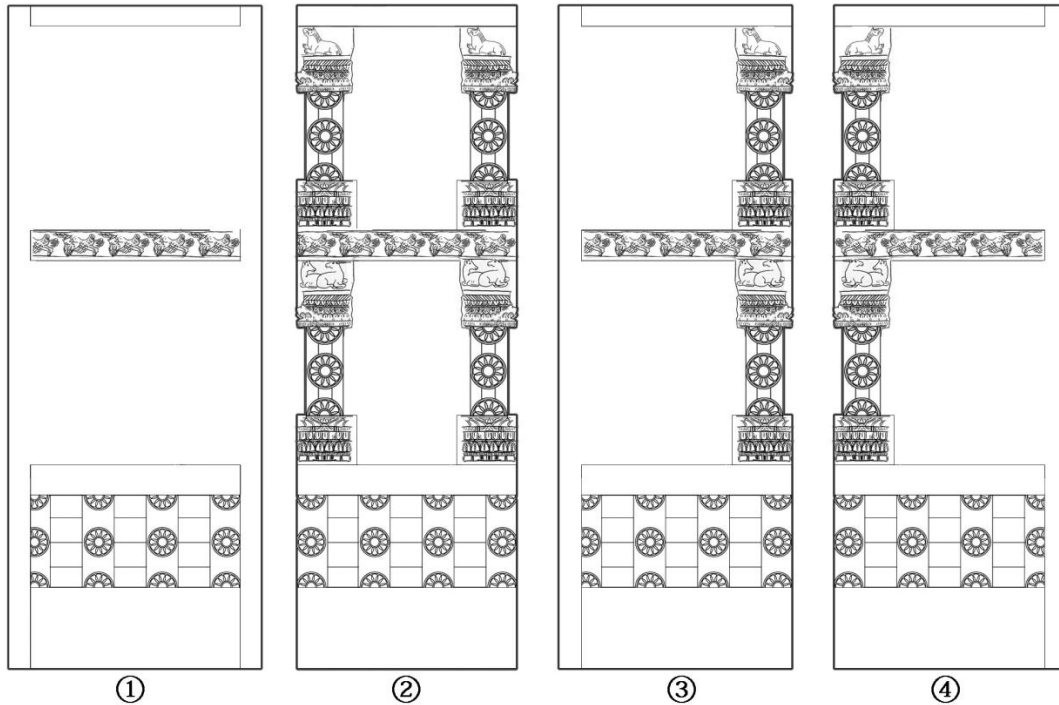


図 6: 上段レリーフ石板 タイプ別解説図

- ① 両端に壁柱の無い上段レリーフ石版 2 枚 (Kanaganahalli 01⁴⁷・37/24⁴⁸)
- ② 両端に壁柱のある上段レリーフ石版 2 枚 (Kanaganahalli 10⁴⁹・14/19⁵⁰)
- ③ 右側に壁柱のある上段レリーフ石版 37 枚
- ④ 左側に壁柱のある上段レリーフ石版 18 枚

図 6 でみるように、①③④に分類した上段レリーフ石版の壁柱の無い接続部分には、隣り合う次のレリーフ石版の壁柱が組み合わさる。この 4 タイプに分類されるレリーフ石版の全ての両端に壁柱があるように配列して、59 枚の上段レリーフ石板はストウパの円胴部を円環している。

⁴⁷ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 63]、Poonacha[2013: 387, Pl. LXXXI]

⁴⁸ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 80, 98]、Poonacha[2013: 424, Pl. CXVIII]

⁴⁹ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 67, 94]、Poonacha[2013: 396, Pl. XC]

⁵⁰ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 70, 95]、Poonacha[2013: 408, Pl. CII]

従って、4つのタイプから構成される上段レリーフ石版の配列は、①と②が2枚ずつあるので、それら計4枚が交互に配列される。そして、その間に配置される③④のレリーフ石版も、全てのレリーフ石版に壁柱があるように並べるために、交互に切り替わることになる。つまり①②に分類した4枚は、③④のレリーフ石版を切り替えるスイッチの役割を果たしている⁵¹。

この建築意匠によって、上段レリーフ石板を配列するための原則は理解し得る。しかしながら、個々の上段レリーフ石板の配列順序は把握し難い。次項では上段レリーフ石板のこれまでの出土状況を確認して、その問題点を整理しておきたい。

0.3.2

上段レリーフ石版の出土状況と配列問題

インド考古局の報告書を担当した Poonacha[2013]には、最も期待していた上段レリーフ石板の本来の配置場所について言及する箇所が無いので、それが配列順序の把握を困難にさせている原因であると言える。現在の上段レリーフ石板の状態は、現地の最新情報(2017年2月)によると、59枚の上段レリーフ石板が西側に新設された屋根付きの保管場で2列に並べて陳列していることを上枝いづみ博士より聞き知っている⁵²。つまり、原位置から離れた場所に全ての上段レリーフ石板が移動させられていることがかえって、配列順序の手がかりを掴めなくしてしまっている。この為に、それより以前の上段レリーフ石板の状態を撮影したルクザニッツ博士と筆者による記録写真の分析が、配列順序を決定付けるのに重要な役割を果たすと考えられる。ルクザニッツ博士の写真には、レリーフ石版の表面に欄楯文様が施された下部分がストゥーパの基壇部分に設置されたままの状態が撮影されている⁵³。その他の部分は、断片となって仏塔周囲に散在し、地中に一部が埋没している様子が記録されている。それに対して、筆者がカナガナハッリ大塔の調査を実施した2009年の段階は、大塔周囲の平地に59枚のレリーフ石版が

⁵¹ 4種類のレリーフ石版については Zin[2011: 17]、Poonacha[2013: 87-89]に言及されている。

⁵² 現地の保存状況については、科研「中央アジア仏教美術の研究－釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に－」2017年度第1回研究会に出席した際に、発表者である上枝博士からお聞きした。一般公開も始まり、近郊の学生などが団体で訪問していることも聞き知った。上枝いづみ[2017: 1]を参照。

⁵³ Poonacha[2013: 140, Pl. XXVIII A]にも同様の写真が掲載されている。

置かれ、しかも別所から発見された断片を繋ぎ合わせる煩雑な復元作業が終了していた。59 枚のレリーフ石板の写真は、撮影後に補正したものを全て荒牧/Dalayan/中西[2011: 63–102]に掲載している。また、その時の上段レリーフ石板の配置場所は、資料 1: カナガナハリ大塔配置図に記録した通りである(→資料 1 を参照)⁵⁴。

以上の情報をまとめると現時点で上段レリーフ石板には、発掘作業中に以下の 3 段階の移動があり、現在に至っているということになる。

1. 発掘途中段階

2000 年のルクザニッツ博士による現地調査写真に記録された上段レリーフ石板の位置。上段レリーフ石板の下部分(欄楯文様)のみ、大塔の基壇に遺っている。

2. 発掘作業終了段階: 2009 年～2016 年迄⁵⁵

筆者による 2009 年の現地調査に基づく上段レリーフ石板の配置(→資料 1 を参照)。

基壇に遺された上段レリーフ石板の下部分を平地に移し、出土した石板断片と接合させた状態で平置きにされている。

3. 保管段階: 2017 年以降

仏塔周囲の平地に復元させた上段レリーフ石板が、屋根付きの保管場に全て移動し二列に並べて陳列されている。

以上の発掘作業過程を踏まえると、ルクザニッツ博士による現地調査写真を手がかりとした復元が、客観的に原位置を探る一番有効な手段と言える。大塔の原位置に遺された状態の下部分の破断面と、復元された上段レリーフ石板とを照合することで、本来の上段レリーフ石板の配置に一番近い場所を特定することが可能となる。筆者がルクザニッツ博士の写真と照合する作業過程を経て、原位置を特定できた上段レリーフ石板は 40 枚であった。残念ながら、東門

⁵⁴ 筆者が現地調査を実施した際に、ストーパーの側面に遺る石灰岩の講材には、5、18、22、36、24、25、41、46、55、49、56、57、54、53、55、と記されている箇所が見受けられた。レリーフ石板の側面に記された番号との関係が予想される。

⁵⁵ 平岡三保子博士が現地調査を実施した 2015 年には、未だ上段レリーフ石板は大塔の周囲に置かれていたとお聞きしている。2015 年段階の現地情報は、科研「中央アジア仏教美術の研究－釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に－」2015 年度第 3 回研究会に出席した際の情報である。平岡[2015]を参照。

から南門にかけては崩壊が著しく、この四分円部分の配列は特定し難い。幸いなことに、未特定の 19 枚のレリーフ石版のほとんどが仏伝場面であり、そうすると南門から東門にかけては、仏伝図が連続して並んでいたと判断できる(→図 7 を参照)。

上段レリーフ石板の配列を示した図 7 に従えば、仏伝場面を描いたレリーフ石版は南東辺りから西門にかけて並び、ジャータカを描いた上段レリーフ石版は西門から東入口付近までにまとめて配列していたことが分かる。そして、サータヴァーハナ朝の諸王の肖像やナーガ像は、その間に嵌め込まれていたと考えられる。仏伝とジャータカとを大きく二分して配置するこのような配列は、バールフットや、場所優先配列を重視するサーンチー大塔の配列とは異なっていることが明らかとなった⁵⁶。

以上の考察より、上段レリーフ石板のおおまかな配列に関しては、ルクザニッツ博士の写真のおかげで見通しを立てることが出来たが、さらに詳細な配列順序を特定することは難しく、次の段階では、上段レリーフ石板に描かれる図像表現の解明によって進めていく必要があると考える。

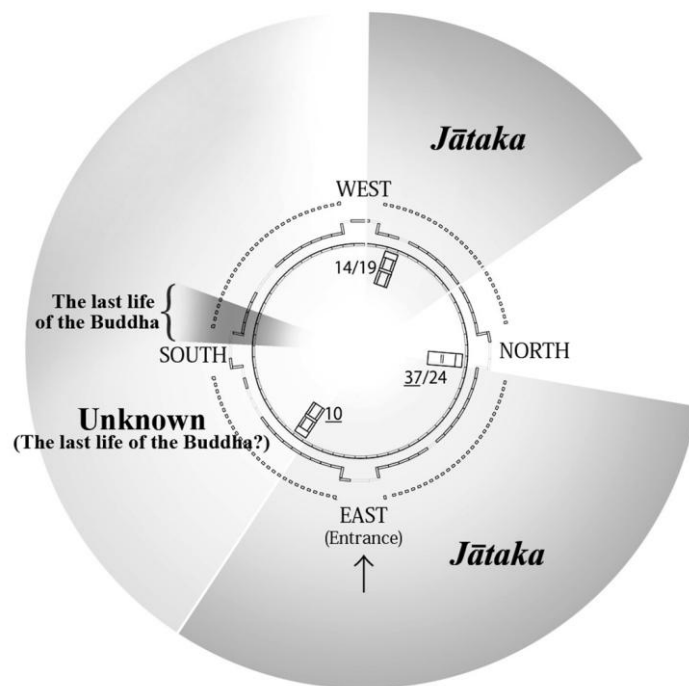
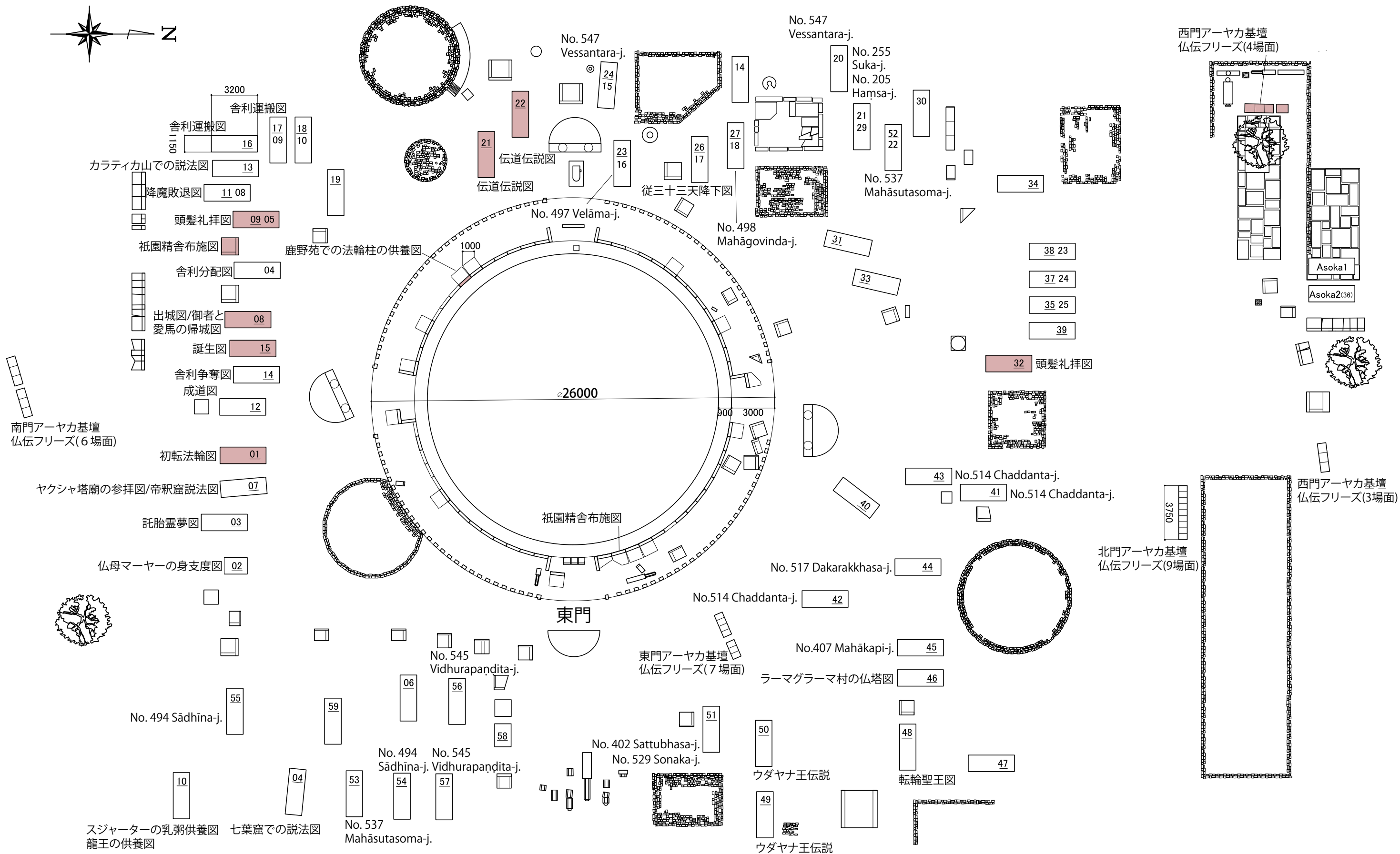


図 7: 上段レリーフ石板 配置図

⁵⁶ 仏伝図の配列については、宮治昭[1995]の論考に詳しく論じられている。仏伝の説話表現の様相を三類型に分類して考察し、サーンチー第 1 塔塔門の仏伝については、釈迦の事蹟を時間軸に沿って追うのでは無く、場所ごとにまとめる地誌的な志向が見られるというフーシェの説を紹介し、サーンチーの仏伝は、出来事が起こった舞台、環境の下で意味を持つという考えに関連して配置されていると指摘している。



0.3.3

上段レリーフ石版の制作年代と図像表現

上段レリーフ石板は、Poonacha[2013]の記したカナガナハッリ大塔の編年に基づく、仏塔円胴部に導入された時期が2回あることが判明している。1回目の設置は、第2期サータヴァーハナ時代の第1段階（紀元前1世紀頃）に行われており、そのことは、シムカ王の在位年を記した寄進文によって明らかとなった⁵⁷。この寄進文が記された Kanaganahalli21⁵⁸には、次章で考察するく雪山地方への伝道伝説⁵⁹が図像化されている。

2回目の設置は、第2期サータヴァーハナ時代の第2段階（紀元後2世紀初頃）に行われている。基壇の拡張に伴って上段レリーフ石板が追加された。Poonacha[2013: 628]によると上段レリーフ石板には、シムカ王の肖像⁵⁸を除く4名(Sātakarṇi⁵⁹, Mantalaka⁶⁰, Sundara Sātakarṇi⁶¹, Vāsisthiputra Puḷumāvi⁶² (Puḷumāvi II))のサータヴァーハナ朝の諸王を描いた肖像が設置されたとしている。それらの王名のうち、プルマーヴィ王が最も年代が下るので、彼の在位期間 ([AMS. Purāṇa] 91–118年 / [SB. Coin] 85–125年)である2世紀初を2回目の設置時期としておくのが妥当であろう。それ以外に追加された上段レリーフ石板がどの程度あったのかは、第2期第1段階の上段レリーフ石板の解明と合わせて今後の研究課題となる。

次に、上段レリーフ石板の図像表現を概観する。資料2: 上段レリーフ石板一覧表で表示した仏伝やジャータカが上段レリーフ石板の主な主題であるが、それに加えて特筆すべきことは、上記した5名のサータヴァーハナ王の肖像と複数のナーガ像が見出されたことであろう。古代初期インド美術の段

⁵⁷ 序論: 註 25 を参照。

⁵⁸ Kanaganahalli58 = 荒牧/Dalayan/中西[2011: 90, 101]、Poonacha[2013: 463, no. 96, Pl. CXXXIX. 4] Nakanishi and von Hinüber[2014: 29 (I. 4)]

⁵⁹ Kanaganahalli59 = 荒牧/Dalayan/中西[2011: 91, 102]、Poonacha[2013: 464, no. 102, Pl. CXXXIX. 10] Nakanishi and von Hinüber[2014: 30 (I. 7)]

⁶⁰ Kanaganahalli40 = 荒牧/Dalayan/中西[2011: 81, 98]、Poonacha[2013: 463, no. 94, Pl. CXXXIX. 2] Nakanishi and von Hinüber[2014: 29–30 (I. 5)]

⁶¹ Kanaganahalli30 = 荒牧/Dalayan/中西[2011: 77, 97]、Poonacha[2013: 477, no. 240, Pl. CXI, A, B] Nakanishi and von Hinüber[2014: 30 (I. 6)]

⁶² Kanaganahalli39 = 荒牧/Dalayan/中西[2011: 81, 98]、Poonacha[2013: 463, no. 99, Pl. CXXXIX. 7] Nakanishi and von Hinüber[2014: 33–34 (I. 9)]

階において、仏塔を装飾するレリーフに単独で描かれる王族の肖像が組み込まれる前例はなく⁶³、カナガナハリ大塔がサーンチー大塔やアマラーヴァティー大塔よりも、サータヴァーハナ王家と極めて密接な関係を形成していたことを証左している⁶⁴。サータヴァーハナ王家に関して碑文より知り得る情報は断片的であるが、そのなかでも中村元[1966: 19–20]が記す、「サータヴァーハナ王家はバラモンであり、それにナーガ族の血統を少しく混じていたらしい。バラモンであることは、銘文のうちにも明記されている」という指摘には、注意しておきたい⁶⁵。バラモンであるサータヴァーハナ王家とカナガナハリ大塔の仏教僧団にどのような接点があるのかは、サータヴァーハナ王とナーガ像の図像表現が手がかりを担っていると推測される。

また次に、他の仏塔から出土したレリーフの図像表現と比較考察する場合に基準となるのは、仏像表現の有無である。それに伴う、仏弟子や菩薩の表現も重要な基準になろう⁶⁶。この基準を図るにあっても、引用した記述が関わっていると考えられる。カナガナハリ大塔は、これまで未発見であったアシヨカ王やサータヴァーハナ王の肖像が描かれる反面、上段・下段レリーフ石板やコーニスの仏伝フリーズには、一貫してブッダの身体的表現が描かれていない⁶⁷。ブッダの姿は、第2期:第4段

⁶³ バールフットでは、ブッダが在世時に東インドを統治していたマガダ国のアジャータシャトル王やコーサラ国プラセナジット王が図像化されているが、全て仏教説話中の登場人物として描写されている。アジャータシャトル王が登場するレリーフは、*Dīghanikāyā 2: Sāmaññaphalasutta* = 『長阿含経』「沙門果経」の一場面を図像化している。Lüders[1963: 118–119]を参照。

⁶⁴ サーンチー第1塔は、原型がマウリヤ時代に創建された後、複数の増改築を経て現在の姿になっている。仏伝やジャータカが彫出される欄楯は、南門に刻まれる碑銘によりサータヴァーハナ王朝前期に設置される。塚本啓祥[1996: 384, Sāñcī 384]

アマラーヴァティー大塔もマウリヤ時代にその基礎が築かれる。その後、サータヴァーハナ王朝の首都がダーニヤカタカに移り、サータヴァーハナ王朝後期に入ると、顕著な増改築が始まる。西門に設置された石板に刻まれる寄進文には、ヴァーシシュティプトラ・シュリー・プルマーヴィ(プルマーヴィ2世)王の年紀と、この石板が制多部(Caitikīya)に対する寄進であることが記されている。塚本啓祥[1996: 224, Amarāvātī 2]

⁶⁵ サータヴァーハナ王家がバラモンであることは、ナーシク石窟、窟院 No. 3 の寄進文に刻まれる内容から知ることが出来る。ゴータミープトラ・サータカルニ王に対して、「唯一のバラモン」と称している。塚本啓祥[1996: 490–494, Nāsik 4]

⁶⁶ 仏弟子の造形については、本研究の第4章で考察する。菩薩については、第2章で考察している。

⁶⁷ それに対して、アマラーヴァティー大塔出土の石板彫刻には、ブッダの姿が図像化された作例が存在し、紀元後二世紀末と考えられている。それはつまり、カナガナハリ大塔よりも早くにブッダの表現が受容されたことになる。

アマラーヴァティー大塔の図像編年に関しては、Burgess[1970]、Sivaramamurti[1942]、島田明[2000]、[2012]を参照。

なお、仏弟子はアマラーヴァティー大塔のレリーフと同様に上段レリーフ石板に描き出され始め

階(Phase IV)に仏立像と仏坐像の設置によって現れ始める。Poonacha[2013: 623–630]の編年に従うと紀元後 3 世紀頃の導入であり、ガンダーラ地域やマトゥラーで仏像が出現し始める紀元後 1 世紀初に比べると、約 150 年ほどの隔たりがある⁶⁸。ここに、クシャーン王朝(紀元後 1 世紀～3 世紀中頃)下で栄えた仏教と、サータヴァーハナ王朝下で栄えた仏教との地域差が認められる。筆者は、この地域差の要因を、それぞれの地域を統治していた王朝の宗教や習俗による相違と、両地域に活動拠点を置いていた仏教僧団(部派)による相違の二つの観点から検討すべきと考える⁶⁹。バラモンであるサータヴァーハナ王家は、そもそも偶像礼拝を行う慣習が無い。インド内陸部にヴェーダ祭儀文化における遺品が確認されないのは、これまでのインド美術史学、考古学の研究成果によって周知されている⁷⁰。この事実は、サータヴァーハナ王家と結び付きの強いカナガナハリ大塔へのブッダ像の導入がガンダーラ地域より遅れることの一要因であったと考えられよう。

そして、もう一つの検討すべき要因であるカナガナハリ大塔を活動拠点としていた仏教僧団(部派)については、残念なことに現在のところ、部派名を記した碑文は発見されていない⁷¹。本研究では、この点を具体的に明らかにするためにも、以下に説明する手順で仏伝図の図像表現を考察することにする。

ている。第 4 章第 1 節第 3 項(4. 1. 3): 説法の対象者としての五比丘を参照。

⁶⁸ ガンダーラ地域における最初期の仏像に関しては、宮治昭[1997][2005][2013]等にこれまでの研究史と最新の研究成果がまとめられている。ガンダーラ地域での最古の仏陀表現は、紀元後 1 世紀初めのティリヤ・テペ出土の金貨が知られている。次いで、プトカラ出土の梵天勧請図が挙げられる。マトゥラーに仏像が出現し始めるのも紀元後 1 世紀後であり、両地域ともに、クシャーン王朝下で隆盛する。

⁶⁹ ガンダーラ美術がはじめてから仏像を持つ背景にはクシャーン王朝によって仏教が擁護されることにある。その作例がギリシア・ローマ風であるのは、シルクロード貿易を掌握していたクシャーン王朝下で、ごく自然にギリシア・ローマ美術の技を持つ工人によってブッダの身体的表現が制作されたとする。小谷伸男[1996: 312–315]参照。

⁷⁰ 「インド美術史は少なくとも現存遺品からみる限り、インダス文明の後、マウリヤ朝のアショカ王の時代まで、およそ 1500 年の間本格的な造形活動をみない」宮治昭[1981: 12]を引用。他に 肥塚/宮治編[2000: 10]、荒牧典俊[2006: 57–58]、島田明[2010: 270]にも同様の記述がある。

⁷¹ Nakanishi and von Hinüber[2014: 18]

0.4

カナガナハッリ大塔に保存される仏伝図－作業仮説と研究方針－

上段・下段レリーフ石板に描かれる仏伝とジャータカの主題は、碑文の解読によってほぼ比定されている(→資料 2 を参照)。さらに個々の図像表現を、他の仏塔から出土したレリーフと比較考察しながら、固有の特徴を明らかにしていくことが次の課題となる。以下に、上段・下段レリーフ石板のうちブッダの伝記に関係する図像を記した表を提示する(→表 1、表 2 を参照)。

表 1. 仏伝図 1 一覧表

仏伝図		ADN 科研	MASI106.
1	託胎霊夢	<u>03</u>	LXXXIII. B
2	仏母マーヤーの身支度	<u>02</u> 下段	LXXXII
3	誕生・七歩	<u>15</u> 下段	LXXXV. B
4	ヤクシャ塔廟への参拝	<u>07</u> 上段	LXXXVII. A
5	出城	<u>08</u> 上段	LXXXVIII. A
6	御者と愛馬の帰城	<u>08</u> 下段	LXXXVIII. B
7	頭髮礼拝	<u>09/05</u>	LXXXIX. B
8	スジャーターの粥供養	<u>10</u> 下段	XC. B
9	竜王の供養	<u>10</u> 上段	XC. A
10	降魔敗退	<u>11/08</u>	XCI. A, B
11	成道	<u>12</u>	XCII. A, B
12	ムチャリンダ竜王	<u>27/18</u> 上段	LVII.A / CVI. A
13	初転法輪	<u>01</u> 上段	LXXXI. A
14	舍利争奪	<u>14</u>	XCIV. A, B
15	舍利分配	04	XCV. A, B

16	舍利運搬	<u>16</u> ・ <u>17</u> /09	XCVI. A, B
17	ラーマグラーマの仏塔	<u>46</u> 上段	CXX. A

表 2. 仏伝図 2 一覧表

説話・説法図		ADN 科研	MASI106.
18	七葉窟での説法	<u>04</u>	LXXXIV B
19	帝釈窟説法	<u>07</u> 下段	LXXXVII B
20	カラティカ山での説法	<u>13</u>	XC III
21	従三十三天降下	<u>26</u> /17	CIII
22	祇園精舎布施	×	LV A
23		×	LV B
24	転輪聖王	<u>48</u>	LXXI. A, B
25	ウダヤナ王伝説	<u>49</u>	LXXII. A, B
26		<u>50</u>	LXXIII. A, B

上記した表 1. 仏伝図 1 一覧表には、仏伝文学に記される仏伝場面を時系列に並べて表示しているが、上段レリーフ石板がこの順番通りに並んでいたとは言い難い⁷²。続く、表 2. 仏伝図 2 一覧表には、初転法輪から涅槃までの期間にブッダが行った教化活動に関するエピソード等をまとめている。本研究では、その中から、3: 誕生、5: 出城、7: 頭髪礼拝、13: 初転法輪、22(23): 祇園精舎布施を取り上げて図像表現を考察している。この選択に基準は無く、本来は表示した全ての上段・下段レリーフ石板の考察結果を示すべきであったであろう。それは、以下に示す研究手順と関係している。

一貫して採用した研究手順は、第一に、その主題が説かれる文献資料と図像資料を一旦別々に考察し、さらに両資料の伝承過程上の相違点や関連箇所を指摘することから始めている。同じ主題が保存されている資料と雖も、それを伝えるツールが文献と図像とでは、得られる情報が異なるうえ、その主

⁷² 上段レリーフ石板の上段区画、下段区画で主題が異なり、2つの主題が時系列に並んでいないレリーフ石板があることは序論: 註 45 に記しているので参照されたい。

題が記述もしくは描写された背景や要因が、当然ながら異なるからである。インド仏教史を研究する場合では特に、両資料は等価値に扱うべきであり、その点を慎重に検討する姿勢をもって両者の比較考察を行うことに努めた。

文献資料は、主に初期経典(韻文資料・散文資料)に説かれてる仏伝記事を抽出し、それら初期経典の記述が仏伝文学へ組み込まれていく過程を注意深く分析している。その理由は、本研究で扱う古代初期インド美術の段階では、それぞれの仏伝場面が無関係に配列されたり、場所優先配列などの極めて独自の配列傾向が見られるからである⁷³。つまり、仏伝場面をブッダの生涯に沿って時系列に配列している例は、ほとんど皆無に等しい⁷⁴。この疑いのような事実は、一つに、古代初期インド美術段階では、ブッダに関する出来事を個別には記録しているが、ブッダの一生の物語る伝記としては、未だ形成途中であったことを示している。それ故に、はじめから仏伝文学の一場面の記述を抜き出して、古代初期インド美術の仏伝図と照合することは控えることにした。

そして第二に、両資料の変遷過程を踏まえて、カナガナハリ大塔が保存するレリーフの図像表現が、文献史上・美術史上のどの辺りに位置づけられるのかを追究している。

このような時間を要する研究手順を採用したのは、主題が異なる 59 枚の上段レリーフ石板を同じ手順で考察し、個々の考察を積み上げることによって得られる研究成果に従って、カナガナハリ大塔の特色を明らかにすることを目的に設定しているからである。さらには本研究を遂行することで、先に問題点として指摘した上段レリーフ石板の配列順序や、2 回の設置時期がある上段レリーフ石板を分類する糸口の発見に繋がることにも期待出来よう。

本研究はその一端を示したものであり、今後の考察結果によっては訂正する可能性が十分にあり得る。その一方で、すでに本研究で扱うレリーフ石板の図像表現に基づいて、仏教の具体的な伝承過程を垣間見ることが可能であったと思う。特に、南伝の伝承経路について、年代と地域が特定出来るカナガナハリ大塔は、説得力のある史料として貢献できることを確信している。

次章からは図像表現の考察に移るが、上段・下段レリーフ石板には、上記した Poonacha[2013]の編年によると 2 回の設置時期があることが判明している。まずはじめに、その 1 回目の設置時期である第 2 期第 1 段階(紀元前 1 世紀頃)に導入された Kanaganahalli 21 の考察を行い、レリーフ石板に込められた仏教僧団側の意図を探りたい。

⁷³ 序論: 註 56 を参照。古代初期インド美術の配列傾向については、第 5 章で祇園精舎布施図中の神変図を考察する際にも解説している。第 5 章: 註 290 を参照。

⁷⁴ アジャンター第 10 窟(前期石窟)の左側壁面には、8 つの仏伝場面が時間の経過に沿って一連に並んでいる。これが、現在、解明された最も早期のブッダの伝記であり、古代初期インド美術のなかで唯一の作例である。それぞれの仏伝場面は、第 4 章: 註 249 を参照。

主題	出典一覧														
仏伝図	Kanaganahallī						Bhārhut			Sañci		Amarāvati		その他	
	ADN 科研	MASI106	碑文 Nakanishi and von Hinüber[2014]		MASI106	Coom1956	碑文 Lüders[1963]		MF	位置		碑文	出土地	碑文	
1 託胎霊夢	03	LXXXIII. B	×			Fig. 61	B19	bhagavato ākramṇi	Pl. 50a–1	東門北柱内側第2区画		Sivaramamurti. Pl. 30–1, 50–2 Knox. nos. 74, 77	Qizil 110	Schmidt[2010: Bild 1]	
2 仏母マーヤーの身支度	02 下段	LXXXII	IV. 11	/ + yana māyā ca	×	no. 247	×			×		×			
3 誕生・七歩	15 下段	LXXXV. B	III. 2, 3	bakavato j(ā)ṭi	CXL. 12	no. 120	×			×		Knox. nos. 41, 61, 70, 71, 74, 75, 77, 104	Ajaṇṭā 10 Qizil 110	Schlingloff[1981: fig. 2] Schmidt[2010: Bild 3, 4]	
4 ヤクシヤ塔廟への参拝	07 上段	LXXXVII. A	III. 2, 4	sākiyavaḍana(m) ce/raṭṭiya(m)	CXL. 13	no. 121	×			×		Knox. nos. 61, 75	Qizil 110	Schmidt[2010: Bild 5]	
5 出城	08 上段	LXXXVIII. A	III. 2, 5	abhinikhama	CXL. 15	no. 123	Fig. 38	B20	arahaguto devaputo	Pl. 40–2	東門正面第2横梁	Sivaramamurti. Pl. 17–1 Knox. no. 11	Qizil 110	Schmidt[2010: Bild 24]	
6 御者と愛馬の帰城	08 下段	LXXXVIII. B	×				×								
7 頭髮礼拝	09/05	LXXXIX. B	III. 2, 6	cuḍāharana(m)	CXL. 16	no. 124	Figs. 30, 32	B22	bhagavato chūḍamahā	Pl. 18–b3	南門西柱側面第3区画	Knox. nos. 5, 11, 49, 51, 55, 63, 69, 71, 73–76			
8 スジャーターへの粥供養	10 下段	XC. B	III. 2, 9	suj[ātā senāpa](ti)kaduhu[tā mahākā](l)jo ca nāgarāyā	CXLI. 7	no. 141	×		Pl. 19–44	南門東柱内面第4区画	Sivaramamurti. Pl. 60–2 Knox. nos. 6, 68	Qizil 110	Schmidt[2010: Bild 31]		
9 竜王の供養	10 上段	XC. A	III. 2, 10	mārabhago	CXL. 17	no. 125	Fig. 145	×							
10 降魔敗退	11/08	XCI. A, B	III. 2, 10		CXL. 17	no. 125	Fig. 145	×		Pl. 28, 29–2 Pl. 40–3 Pl. 61–3	北門背面第2横梁 東門正面第3横梁 西門背面第3横梁	Sivaramamurti. Pl. 42–1 Knox. nos. 8, 37, 70, 83, 84	Qizil 110	Schmidt[2010: Bild 34]	
11 成道	12	XCII. A, B	×				Fig. 23	B23	bhagavato sakamunino bodho			Knox. nos. 8, 63, 74, 86, 88, 89			
12 ムチャリンダ竜王	27/18 上段	LVIIA / CVI. A	III. 2, 11	nāgarāyā mu(ju)lido	×	no. 244		B31a	muchilido nāgarāja	Pl. 19–c1	南門東柱正面第1区画	Knox. no. 70			
13 初転法輪	01 上段	LXXXI. A	×				×		Pl. 55	西門正面第2横梁	Sivaramamurti. Pl. 37–3 Knox. nos. 11, 38, 63, 74, 77, 81–84, 88, 89, 93, 101	Qizil 110	Schmidt[2010: Bild 37]		
14 舍利争奪	14	XCIV. A, B	IV. 3	upayāna	CXL. 22	no. 130	×		Pl. 15–3 Pl. 61–1, 2	西門背面第1横梁 西門背面第2横梁 南門背面第3横梁	Sivaramamurti. Pl. 14–2, 43–1				
15 舍利分配	04	XCIV. A, B	III. 2, 29	sariravibhago	CXL. 14	no. 122	×								
16 舍利運搬	16・17/09	XCVI. A, B	III. 2, 30	sariravibhago	CXL. 21	no. 129	Fig. 15	×							
17 ラーマグラーマの仏塔	46 上段	CXX. A	III. 2, 31	rāmagāmilō aṭṭhabhāga thuvo upari	CXL. 24	no. 132	×		Pl. 11–2	南門正面第2横梁	Knox. nos. 27, 68				
説話・説法図															
1 七葉窟での説法	04	LXXXIV B	III. 2, 13	satipanaganuhā	CXLI. 8	no. 142	×			×		×			
2 帝釈窟説法	07 下段	LXXXVII B	III. 2, 12	idasālaguhā	CXL. 10	no. 119	Fig. 63	B35	idasālaguha	Pl. 35–b1	北門東柱側面第1区画				
3 カラディカ山での説法	13	XC III	IV. 5	khalatiko pavato	CXL. 19	no. 127	×			×		×			
4 徒三十三天降下	26/17	CIII	III. 2, 14	dev(o)har(o)ṇa	CXL. 18	no. 126	Fig. 31	×		Pl. 34–c	北門西柱正面第1区画	Sivaramamurti. Pl. 32–3 大英図書館蔵ドローイング WD1061. f. 74	Kausambi	Tripaṭi[2003: fig. 28] (Inv. No. KS208) p. 66. uppalavana	
5 祇園精舎布施	×	LV A	III. 2, 18–24	18. ayasa ānadasa 19. kosabakuṭi 20. caka(mo) 21. utupāno 22. ayasa rā hula 23. bhagavato 24. yakhi piyekaramātā	CXXXIII. 1–7	nos. 34–40	Fig. 67	B32–34	32. jetavana anādhapeḍiko deti kotisamhatena ketā 33. kosabak[u]ṭi 34. gadhakuṭi	Pl. 34–a2	北門東柱正面第2区画	Amarāvati Museum, No.62: GS. Pl. 41. 全集13. 挿図104	塚本. Amar. 210. Sāvathi 塚本. Amar. 211. Jetavana Anādhapiṇḍikasa āramo		
6 祇園精舎布施	×	LV B	III. 2, 25–27	25. piyeka<ra>m(ā)tu bhavana 26. ayasa sārīputasa vihāro 27. ayasa ānadasa vihāro	CXXXII. 3–5	nos. 24–26						Amarāvati Museum, No. 405: Zin[2007: Fig. 1] Government Museum, Madras No. 147: Zin[2010: Fig. 3]			
7 転輪聖王	48	LXXI. A, B	III. 3, 1	rāyā cakavaṭi sataradano	CXXXIX. 6	no. 98	×								

資料 3: インド仏教遺跡地図



第 1 章

上段レリーフ石版 No. 21 と No. 22 – 雪山地方への伝道図 –

Poonacha[2013: 623–630]によるカナガナハッリ大塔の編年に従うと、上段レリーフ石板は、第 2 期サータヴァーハナ時代の第 1 段階(Phase I)に、第 1 期マウリヤ時代の仏塔に石灰岩のブロックが覆蓋したと同時に、円胴部へ設置されたとする⁷⁵。第 2 期第 1 段階は紀元前 1 世紀頃(*ca.* the 1th century BCE / CE)に設定されており、その根拠となるのは、Kanaganahalli 21 の上枠に刻まれたサータヴァーハナ王朝初代シムカ王在位 16 年 ([AMS. Purāṇa] 36 BCE / [SB. Coin] 64 BCE)に寄進されたことを記す碑文が挙げられている⁷⁶。仏伝図の考察に入る前に、59 枚の上段レリーフ石板のうち、最も早期に設置された Kanaganahalli 21 の図像表現を解明することによって、カナガナハッリ大塔に導入されたレリーフ石板の制作意図を探りたい。

Kanaganahalli 21 には、<高僧たちによる雪山地方への伝道伝説>(以下、伝道伝説と呼ぶ)が隣り合う 2 枚の上段レリーフ石板を用いて図像化されている⁷⁷。この図像は、ブッダや仏弟子⁷⁸以外の仏教徒が描かれた最初期のレリーフであり、インド内陸部においては類例が無い。

次節からは、関連する文献資料と先行研究の精査を行い、続いて Kanaganahalli 21 と Kanaganahalli 22 の図像表現の考察に入ることにする。

⁷⁵ カナガナハッリ大塔の編年については、序論第 2 節(0. 2): カナガナハッリ大塔の先行研究と編年を参照。

⁷⁶ 序論: 註 25 を参照。

⁷⁷ Poonacha[2013] は伝道伝説に関するレリーフが、6 枚のレリーフ石板(16(III. 3, 2), 18/10(IV. 1), 19, 21(III. 3, 3), 22(II. 8, 4), 14/19(II. 4, 23))を用いて描かれているとする。Poonacha[2013: 285–291, Pl. 97–102]を参照。本研究では、配置場所が特定可能であり、隣接して配置される 2 枚のレリーフ石板(21(III. 3, 3), 22(II. 8, 4))を研究対象とする。

⁷⁸ 本研究で言及する仏弟子とは、*Aṅguttaranikāya*, 1. Ekanipāṭa, 14. Etadaggavagga (AN i, 23–26) = 『増一阿含経』第三「弟子品第四」、「比丘尼品第五」、「清信士品第六」、「清信女品第七」[T. 2, No. 125, 557a16–560c4] = 『阿羅漢具徳経』[T. 2, No. 126, 831a4–834b23]に記される優れた 75 人の仏弟子(=是第一弟子)を指す。その 75 人の仏弟子については、Bunchird[2005][2007]に詳しく、特に仏弟子の名を整理した Bunchird[2007: 7, 表 1–1, 〈資料 2〉「各伝承における「是第一弟子」の対応表」]を参照した。

1. 1

文献資料に記される雪山夜叉

伝道伝説が描かれる 2 枚の上段レリーフ石板のうち左側の上段レリーフ石版(Kanaganahalli 22⁷⁹)には、説法の対象者となる雪山地方に住むヤクシャ(Pā. Hemavata-yakkha)(以下、雪山夜叉と略す)とナーガの姿が描かれている。はじめに、この雪山夜叉の特徴を文献資料中に探り、明確にしておきたい。

1. 1. 1

初期経典における雪山夜叉の描写

雪山夜叉⁸⁰についてはおよそ 8 本の文献資料に記されており、便宜的に番号を付けて以下に列挙する⁸¹。

- (1) *Suttanipāta* vv. 153–180 (1. Urugavagga, 9. Hemavatasutta⁸²)
- (2) 『別訳雑阿含経』(328) [T. 2, No. 100, 483c17–485a23] 失訳 350–431 CE
- (3) 『雑阿含経』(1329) [T. 2, No. 99, 365c6–367b4] 求那跋陀羅訳 435–436 CE
- (4) 『佛説義足経』⁸³ 第 13 経「兜勒梵志経」⁸⁴ [T. 4, No. 198, 183b16–184c23] 支謙訳

⁷⁹ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 74 (Kanaganahalli22)], Poonacha[2013: 407, Pl. 101]

⁸⁰ 雪山夜叉という名は、『別訳雑阿含経』(328)に従っている。『雑阿含経』(1329)では「醯魔波低天神」、『佛説義足経』第 13 経では「鵠摩越鬼將軍」、『佛説立世阿毘曇論』「夜叉神品」では「醯摩跋多王」という音写語によって記されている。

⁸¹ 雪山夜叉についてはいくつかの断片記事が見られる。DN 32: *Āṭṇāṭṭiyasutta* (DN iii, 204, 31)、*Jātaka* No. 347: *Ayakūṭajātaka* (Jā iii, 145, 20–147, 16)、*Jātaka* No. 536: *Kuṇḍalajātaka* (Jā v, 419, 18–420, 11)

⁸² *Paramatthajotikā* II (Pj II, 193–216) では、前世で善根を積んだ 2 人の者が過失によって現世で夜叉として生まれたことを記す。

⁸³ 『佛説義足経』と *Paramatthajotikā II* に説かれる因縁物語を比較考察した南清隆[1986]によれば、『佛説義足経』の因縁物語に登場する人物名が北伝の対応経に一致することを指摘している。拙稿

223–253 CE

- (5) 『佛説立世阿毘曇論』⁸⁵ 第 1 卷 第 4 経「夜叉神品」[T. 32, No. 1644, 176c4–178b10] 眞諦訳 559 CE
- (6) *Dīpavaṃsa* Ch. 8, v. 10.⁸⁶
- (7) *Mahāvamsa* Ch. 12 v. 6,⁸⁷ v. 41.⁸⁸
- (8) *Samantapāsādikā*⁸⁹

これら雪山夜叉について伝承する諸文献は 2 系統に分類される。雪山夜叉がブッダの教えを聞いて帰依したことを語る系統 (1)–(5) と、雪山夜叉が長老達の説法により帰依したことを語る系統 (6)–(8) である⁹⁰。両者共に、雪山を住处とする夜叉の集団が教化される話であることは共通している。前者は、*Suttanipāta* の古層に位置する *Hemavatasutta* とそれに対応する漢訳であり、内容は「雪山夜叉が七岳夜叉と共に斎会に出かけて、ブッダの教えを聞いた後に仏教に帰依する」というものである⁹¹。

[2018b]には、『佛説義足経』第 10 経と第 14 経の因縁物語とそれに対応する図像資料(舎衛城の神変図と従三十三天降下)を比較考察して、『佛説義足経』の因縁物語が北伝の伝承経路上に位置するレリーフと近似することを論じている。

⁸⁴ 『佛説義足経』『兜勒梵志経』の詩節は、*Suttanipāta* vv. 915–934 (4. *Aṭṭakavagga*, 14. *Tuvatakasutta*)に対応し、その前半部分に *Suttanipāta* の *Hemavatasutta* と同じ内容が由来物語として記されている。それに対して *Paramatthajotikā II* の対応箇所(Pj II, 562–565)には、雪山夜叉の由来物語は記されないが、詩節の直前にブッダが化仏を生じさせて、自らに質問させて問答するという構成は一致している。南清隆[1986: 4–6]の因縁譚の対照表も合わせて参照。

⁸⁵ 『佛説立世阿毘曇論』はコスモロジーを語るアビダルマ論書であり、岡野潔[1998]が正量部に属する文献であることを論証している。

⁸⁶ *Dīp*, 54, 9–11.

⁸⁷ *Mhv*, 94, 12–13.

⁸⁸ *Mhv*, 98, 5–6.

⁸⁹ *Sp i*, 68, 1–9.

⁹⁰ *Suttanipāta* の *Hemavatasutta* とそれに対応する漢訳については蘇錦坤[2009]による対応表がある。

⁹¹ カナガナハリ大塔の下段レリーフ石版には、*Hemavatasutta* に登場する七岳夜叉が図像化されている。南門アーヤカ基台の西面に設置される下段レリーフであり、中央に仏塔を配置して、その両脇にそれぞれ 1 人ずつ、仏塔に礼拝する人物が描かれている。そして仏塔の左側に描かれている人物の頭上に「七岳夜叉」(*Jkh(o) sādāgiro*)と記され、この仏子を抱えた人物が七岳夜叉であることが分かる。Nakanishi and von Hinüber[2014: 83 (II. 8, 5)] そのことは、筆者が現地でも撮影した写真(N.3751)を用いて確認した。

ブッダと雪山夜叉の問答は、全て *Samyuttanikāya* (1, *Sagāthavagga*) に平行偈が存在する。以下に、3つの問答に便宜的に番号を付けて平行偈を提示する。資料 3: 雪山夜叉經典群対照表を参照されたい。

問答 1

Sn vv. 168–169 = SN 1. 1: *Devatāsaṃyutta* 7. 10, *Loka* (SN i, 41, 2–5) = 『別訳雑阿含經』(235) [T. 2, No. 100, 459a27–459b2] = 『雜阿含經』(1008) [T. 2, No. 99, 264a9–264a13]

問答 2

Sn vv. 170–172 = SN 1. 1: *Devatāsaṃyutta* 3. 10, *Enijaṅgha* (SN i, 16, 7–12) = 『別訳雑阿含經』(177) [T. 2, No. 100, 438a26–438b3] = 『雜阿含經』(602) [T. 2, No. 99, 161a10–161a16]

問答 3

Sn vv. 173–175 = SN 1. 2: *Devaputtasaṃyutta* 2. 5, *Candana* (SN i, 53, 14–21) = 『別訳雑阿含經』(178) [T. 2, No. 100, 438b12–438b20] = 『雜阿含經』(1269) [T. 2, No. 99, 348c13–348c19]

このような *Samyuttanikāya* に平行偈が回収できることに対して村上/及川[1986: 52]は、*Suttanipāta* の *Hemavatasutta* が *Samyuttanikāya* の詩節を取り入れて出来たとみる可能性を記している。この 3 つの問答のうち、最も具体的な解答を記した問答 2 では、ブッダが 5 種の欲望の対象に加えて 6 つ目には「意(Skt. *manas*-)」が存在することを説いている。問答 2 の平行偈 *Samyuttanikāya* 1. 1: *Devatāsaṃyutta* 3. 10, *Enijaṅgha* を取り上げて、質問と説法内容を確認しておく。

enijaṅghaṃ kisaṃ vīraṃ || appāhāraṃ alolupaṃ ||

sīhaṃ v'ekacaraṃ nāgaṃ || kāmesu anaṭṭhinaṃ ||

upasaṅkamma pucchāma || kathaṃ dukkhā pamuccatīti ||

Samyuttanikāya (SN i, 16, 6–9) = *Suttanipāta*: *Hemavatasutta*, v. 165, v. 170

Poonacha[2013]には、碑文の写真(Pl. CXXXIII. 8)のみが掲載されているが、それに対応する下段レリーフ石板全体の画像は掲載されていない。

カモシカのような脛をもち、痩せていて、雄者であり、小食で、食ることがなく、
獅子や象のように独りで進み、諸々の欲望を顧みない人に、
私たちは、近づいて行って、お尋ねします。どのように、苦から解放されるのでしょうか、と。

pañcakāmaguṇā loke || mano chaṭṭhā paveditā ||
ettha chandaṃ virājetvā || evaṃ dukkhā pamuccatīti ||

Samyuttanikāya (SN i, 16, 10–11) = *Suttanipāta*: Hemavatasutta, v. 171

世間において 5 つの欲望の対象があり、意が第 6 のものであると説かれている。

ここで、欲を離れて、このように苦から解放される、と。

ブッダによって欲望の対象としての「意」が存在することの指摘と、それらを超えることによる苦からの解放を説くことが Hemavatasutta の主題であると言える⁹²。そして、ブッダによる解答を得た雪山夜叉が以下の詩節を唱えて本経が締めくくられる⁹³。

⁹² *Samyuttanikāya* 1. 1: Devatāsaṃyutta 3. 10, Enijaṅgha に記されるブッダの解答と同様の内容が、『別訳雑阿含経』と『雑阿含経』に見られることを荒牧典俊[1983: 9]が取り挙げている。この箇所は、魔の問いかけに対するブッダの返答であり、この詩節に対応するニカーヤ、*Samyuttanikāya* 1. 4: Mārasaṃyutta 2. 5, *Mānasam* ではブッダの返答が漢訳とは異なっている。以下に漢訳の対応箇所を提示する。

『別訳雑阿含経』(25) [T. 2, No. 100, 381c10–13]

世間有五欲 愚者爲所縛
能斷此諸欲 永盡一切苦
我已斷諸欲 意亦不染著
波旬應當知 我久壞欲網

= 『雑阿含経』(1086) [T. 2, No. 99, 285a10–13]

我說於世間 五欲意第六
於彼永已離 一切苦已斷
我已離彼欲 心意識亦滅
波旬我知汝 速於此滅去

ここに、欲望の対象が 5 種から「意 *manas-*」を加えた 6 種へと展開する新しい思想の萌芽がみられ、それが *Samyuttanikāya* 1. 5: Bhikkunīsaṃyutta で「六処」と名づけられるようになることを荒牧典俊[1983]は論じている。

⁹³ また、Hemavatasutta と同じ内容を伝承する『別訳雑阿含経』(328)と『雑阿含経』(1329)には、2 つの問答が追加されている。

ime dasasatā yakkhā iddhimanto yasassino

sabbe taṃ saraṇaṃ yanti, tvaṃ no satthā anuttaro.

Suttanipāta: Hemavatasutta, v. 179⁹⁴

神通力をもち、名声を具えるこれら千人の夜叉達は、
全員が、貴方に帰依いたします。貴方は私たちの無上の師であります。

te maṃ vicarissāma gāmaṃ gāmaṃ nagā nagā

namassamānā sambuddhaṃ dhammassa ca sudhammatan ti.

Suttanipāta: Hemavatasutta, v. 180⁹⁵

この私たちは、村から村へ、山から山へ、遍歴しよう。
正覚者と、教えがすぐれた法であることを敬いながら⁹⁶。

問答 4

『別訳雑阿含経』(328) [T. 2, No. 100, 484c10–484c16] = 『雑阿含経』(1329) [T. 2, No. 99, 366c16–366c23]

問答 5

『別訳雑阿含経』(328) [T. 2, No. 100, 485a4–485a12a] = 『雑阿含経』(1329) [T. 2, No. 99, 367a9–367a17]

問答 5 は、*Suttanipāta*: 1. Urugavagga, 10. Āḷavakasutta vv. 183–184 に平行偈が存在する。

その他の平行偈は次の通り。SN 1. 10: Yakkasaṃyutta 12, Āḷavam (SN i, 214, 25–28) = 『別訳雑阿含経』(325) 曠野夜叉 [T. 2, No. 100, 483a7–483a11] = 『雑阿含経』(1326) 阿騰鬼 [T. 2, No. 99, 365a09–365a13]

⁹⁴ Sn v. 179 (Sn, 31, 6–8)

= 『別訳雑阿含経』(328) [T. 2, No. 100, 485a21–485a23]

「法中之正法 一千諸夜叉 心各懷踊躍 皆合掌向佛 咸求爲弟子 歸依佛世尊」

= 『雑阿含経』(1329) [T. 2, No. 99, 367a25–367a26] = 『佛說義足経』「兜勒梵志経」[T. 4, No. 198, 184a28–184a29] = 『佛說立世阿毘曇論』「夜叉神品」[T. 32, No. 1644, 178b5–178b6]

⁹⁵ Sn v. 180 (Sn, 31, 9–11)

= 『別訳雑阿含経』(328) [T. 2, No. 100, 485a18–485a20]

「無上大導師 我今所至處 城邑及聚落 在在并處處 日夜常歸依 如來三佛陀」

= 『雑阿含経』(1329) [T. 2, No. 99, 367a23–367a24] = 『佛說義足経』「兜勒梵志経」[T. 4, No. 198, 184b1–184b2]

⁹⁶ 塚本啓祥[1998: 146, n. 6]を参照。

この 2 つの詩節によって雪山夜叉には神通力と名声があり、また雪山地方には千人から構成される夜叉の集団が存在していたことが分かる。この 2 つの詩節については、雲井昭善[1980]が初期仏教僧団と夜叉との関わりの中で「夜叉を村落の守護神とする地域社会が、ブッダの教化によって徐々に仏教教団の枠組みに組み込まれていった⁹⁷⁾」ことを記す一例として取り上げている⁹⁸⁾。ブッダによる夜叉の教化を記す初期経典は、*Suttanipāta* 中に 3 経 (1. 9, Hemavatasutta, 1. 10, Āḷavakasutta, 2. 5, Sūcilomasutta)、そして *Samyuttanikāya* (1. Sagāthavagga) の *Yakkhasamyutta* に所収される経典群などが挙げられる⁹⁹⁾。これらの諸経典が初期経典中に多く収録されていることは、成道後のブッダの主な教化活動の一つに夜叉の教化、すなわち夜叉を信仰の対象とする人々の教化が位置付けられていたことを示している¹⁰⁰⁾。初期経典における雪山夜叉に関する記述は、夜叉の教化話として上述した背景に基づいて語られており、具体的には、ブッダによって雪山地方の夜叉の群が教化され、雪山地方に居住する者たちが仏教に帰依したことを伝える意図が含まれていると考えることが出来る。

⁹⁷⁾ 雲井昭善[1980: 16, 8–9]を引用。

⁹⁸⁾ 雲井昭善[1980]は初期仏教僧団が育ってゆく背景として先行する研究より 5 つの要素を挙げており、新たに 6 つ目の要素として、夜叉達(異教徒の種族)に対する教化を挙げている。

⁹⁹⁾ *Samyuttanikāya* の *Yakkhasamyutta* (SN i, 206–215) には夜叉に関する 12 経のエピソードが所収されている。

¹⁰⁰⁾ そのことは、Coomaraswamy[1927]や高田修[1967]が図像資料を用いて指摘している。インドにおける神像彫刻の最古の例がマトゥラーから出土したヤクシャ像であり、仏教による造形活動の開始時期よりも早い紀元前 3 世紀に、ヤクシャを信仰の対象とする人々によって造形化されている。

ヴェーダ文化におけるヤクシャについては、Coomaraswamy[1928][1931]、Hillebrandt[1987]を参照。

Coomaraswamy[1927]、及び高田修[1967]はこのヤクシャ像と最初期の仏像との比較考察により、ヤクシャ像に倣ってマトゥラーから出土した最初期の仏像の造形が制作されたと論じている。

そして、このようなヤクシャを信仰の対象とする地域社会を仏教へ組み込もうとする実態は、現存最古の仏教遺跡であるパールフットに見ることが出来る。

多くのヤクシャ像が仏塔を円環する欄楯に仏塔の保護者として造形されており、それらのヤクシャ達は、胸元で合掌するクピラ夜叉(*kupiro yakho* (B1))、ヴィルダカ夜叉(*virudakao yakho* (B4))、ガンギタ夜叉(*gamgito yakho* (B5))、そして *Suttanipāta* の *Sūcilomasutta* (vv. 270–273) に登場するスーチローマ夜叉(*suchiloma yakho* (B9))であることが碑文の解説によって明らかにされている。

Lüders[1963: 73–79]を参照。

1. 1. 2

スリランカ史伝に記される雪山夜叉の描写

他方で、後者の系統(6)–(8)に分類した雪山夜叉の記述は、4 世紀頃に上座部大寺派の僧団によって作成されたスリランカ史伝 *Dīpavaṃsa*¹⁰¹、5 世紀後半に *Dīpavaṃsa* に基づいて編纂された *Mahāvaṃsa*¹⁰²、並びに律の注釈書 *Samantapāsādikā* に伝えられる諸方教化伝説に記されている。この伝説は *Dīpavaṃsa* によると「アショーカ王在世時に第三結集が開かれる。それを主宰したアショーカ王の息子マヒンダの師であるモッガリプッタティッサ(Pā. Moggaliputta-tissa)によって、マガダ国からインドの各辺境地へ9名の長老達¹⁰³(Pā. *thera*-) が派遣された」というものである。そして、辺境地の一つである雪山地方に派遣された長老達によって夜叉の群が教化されたことが記されている。以下に成立が早い *Dīpavaṃsa* の該当箇所を提示する。

Kassapagotto ca yo thero Majjhimo Durabhisaro Sahadevo Mūlakadevo Himavante yakkhagaṇaṃ pasādayuṃ, kathesuṃ tattha suttantaṃ dhammacakkappavattanaṃ.

Dīpavaṃsa (Dīp, 54, 9–11)

カッサパの家系に属する長老マッジマ、ドゥラビサラ、サカデーヴァ、ムーラカデーヴァは、雪山[地方]において夜叉の群を浄めた。そこにおいて、転法輪の経を[説いた]。

Dīpavaṃsa は、長老マッジマがカッサパの家系出身(Pā. *Kassapagotta*-)であると解釈しているが、*Samantapāsādikā* ではカッサパゴッタを固有名詞として理解し、雪山地方へ派遣された長老達の1人として、以下のように記している¹⁰⁴。

¹⁰¹ von Hinüber[1996: 89, §183]

¹⁰² von Hinüber[1996: 91, §185]

¹⁰³ *Dīpavaṃsa* Ch. 7, 8. (Dīp, 49, 26–54, 16) 静谷正雄[1978]、山崎元一[1979][1982]、塚本啓祥[1980][1996][1998b][2001]、南清隆[2010]は派遣された長老達のことを「伝道師」と呼んでいる。しかしながら、「伝道師」に対応する用語が文献資料中に見当たらなかったため、本研究では使用していない。

¹⁰⁴ 塚本啓祥[1980: 587–588]を参照。

*Majjhimatthero pana Kassapagottattherena Alakadevattherena Dundubhissaratherena
Sahadevattherena ca saddhiṃ himavantapadesabhāgaṃ gantvā dhammacakka-
ppavattanasuttantakathāya taṃ desaṃ pasādetvā asītipāṇakoṭiyo maggaphalaratanāni
paṭilābhesi. ... (中略) ...
gantvāna Majjhimatthero Himavantaṃ pasādayi
yakhasenaṃ pakāsento dhammacakkappavattanan ti.*

Samantapāsādikā (Sp i, 68, 1–9)

また、マジマ長老は、カッサパゴッタ長老、アラカデーヴァ長老、ドゥンドゥビサラ長老、サハデーヴァ長老と共に、雪山地方へ赴き、転法輪経を説くことによってこの地域を浄めて、8億の人々に道果という宝を獲得させた。...(中略)...

マジマ長老は雪山[地方]に赴き、転法輪を解き明かして、夜叉の軍勢を浄めた、と。

この諸方教化伝説に関しては、静谷正雄[1978]、山崎元一[1979]等による文献資料と後述する中インド、ビールサ(Bhīlsa¹⁰⁵)地方から出土した舍利容器に刻まれる碑文との分析によって、以下の結論に至っている¹⁰⁶。

- ・スリランカ史伝に記される「アショーカ王時代にマガダ国から長老達が各辺境地に派遣された」という諸方教化伝説の記述は、スリランカの仏教が仏教発祥地から直接伝えられたことを主張するため、紀元後に自国で創作されたものである¹⁰⁷。

¹⁰⁵ Cunningham[1854]は、この地域をビールサ(Bhīlsa)と呼び、この地域から出土した多数の仏塔の考古学的調査の結果を出版している。それら仏塔から出土した舍利容器に刻まれた碑文は、塚本啓祥[1980: 580–586]によって遺跡ごとにまとめてあるので参照した。

¹⁰⁶ ここでまとめた結論は、筆者の理解によるものである。正確なところは、各論考を確認されたい。その他、諸方教化伝説に記される長老名と碑文に刻まれる高僧名に関しては高橋審也[1982]、塚本啓祥[1980][1998b]、井上陽[2001a][2001b][2002]、Maythee[2006]及び南清隆[2010]の論究に取り上げられている。

¹⁰⁷ 山崎元一[1982: 162–163]を参照。山崎博士は9つの辺境地のうちにスヴァンナブーミーがあることに着目し、その位置が現在のミャンマーであること、そしてミャンマーに仏教が確立するのは紀元後以降のことであるから、アショーカ王時代の布教により、この地に多数の仏教徒が生まれたと

- その長老達を派遣したモッガリプッタティッサは、紀元前 3 世紀から紀元前 2 世紀初頭に活躍した西インドの上座部系仏教僧団(以下、西インド仏教とする¹⁰⁸)に属する高僧であった¹⁰⁹。
- 諸方教化伝説を創作する際に上座部大寺派の僧団は、西インド仏教に属する高僧達の伝道伝説を採用した。

以上の 3 点から、スリランカ史伝に記される雪山夜叉の記述は、本来は西インド仏教の高僧達に由来する伝道伝説であることがこれまでの研究成果により解き明かされている。そのこと

いう諸方教化伝説の内容は信じ難いと述べている。

¹⁰⁸ 「西インド仏教」という語は山崎元一[1979: 114]が使用している、サーンチー・ウッジェーニーを含む地域で栄えた仏教を指す。現在、この地域は、中インド、マディヤ・プラデシュ州に属している。静谷正雄[1978: 182–183]と山崎元一[1979: 120, n. 18]は、雪山部との繋がりを指摘するも、碑文に刻まれる Hemavata をヒマラヤ地方 Himavanta の意味にとりたいと記している。

西インド仏教を雪山部(Haimavata, Hemavatika, Hemavata)と見なす解釈は、高橋審也[1979][1982]によって詳細に論じられており、結論を以下に記しておく。

「ここに(本)上座部がなぜ雪山部と呼ばれたのかというその意味が明らかとなり、同時にセイロン上座部のつながりも想定し得ることとなる。雪山部は、他部派(有部)に圧倒されて、ヒマラヤ地方へ移住したからそう呼ばれるのではない。むしろ、Haimavata(雪山部)の意味は、ヒマラヤ地方に住する部派というニュアンスよりも、ヒマラヤ地方に由来する、ヒマラヤ地方をその発祥とする部派という意味の方がより強く込められていると思われる。その意味で、雪山部教団の主体は、ヒマラヤ地方にではなく、ウッジェーニー、ヴェーディサ等の西インド地方にあったと思われるのである」

高橋審也[1982: 93, 8–16]

その他、雪山部と西インド仏教との接点については、静谷正雄[1978: 39–40]、塚本啓祥[1980: 479–481]、[1996: 55]、[1998: 419]、[2001: 77–78, 162–164]が指摘している。

また、中インド、ウッタール・プラデシュ州サンキッサー(Saṅkīṣā)から雪山部の印章が出土している。塚本啓祥[1996: 895, Saṅkīṣā 1] サンキッサーは三道宝階説話の舞台であるサーンカーシャ(Skt. Sāṃkāśya, Pā. Sankassa)の地名に比定されている。アショーカ王が建立したアショーカ王柱の象が彫刻された頭部が出土している。Cunningham[1963:311–314]、Falk[2006: 206–208]を参照。

¹⁰⁹ 山崎元一[1979: 110–122] 西インドのサーンチー第 2 塔(2nd c. BCE)とアンデール(Andher)第 2 塔(3rd c. BCE)からモッガリプッタティッサの名が刻まれた舍利容器が出土している。

1 つは、サーンチー第 2 塔舍利容器 No. 4 の底辺に刻まれている。塚本啓祥[1996: 847, Sāñcī 688] = Lüders, List. 664.

アンデールからは、サーンチー第 2 塔よりも字体が古い碑文が第 2 塔舍利容器の頸状部に刻まれている。塚本啓祥[1996: 545, Andher 4] = Lüders, List. 682.

を踏まえて、雪山夜叉について記される文献資料を整理すると、初期經典の韻文資料には、雪山夜叉に神通力と名声があり、千人から構成される夜叉の集団がブッダに帰依したことが説かれている。それに対してスリランカ史伝には、初期經典に説かれるブッダによる雪山夜叉の教化になぞらえた雪山夜叉の再教化とも言うべき伝道伝説が存在し、それが西インド仏教によって語られていたと理解すべきであることが判明した。

次節以降は、その文献資料によって考察してきた伝道伝説の形跡をカナガナハリ大塔に描かれる上段レリーフ石板に認め、図像資料の考察から伝道伝説の具体的な形成過程の一端を提示したい。

1. 2

カナガナハリ大塔に描かれる伝道伝説の図像表現

紀元前 1 世紀に制作された上段レリーフ石板 (Kanaganahalli 21¹¹⁰, Kanaganahalli 22) には、4 世紀に作成された *Dīpavaṃsa* に採用される以前の、すなわち、西インド仏教の高僧達による雪山夜叉の教化伝説が図像化されていると考えられる。言い換えれば、西インド仏教所伝の伝道伝説が、紀元前 1 世紀頃までには南インドに位置するカナガナハリ大塔にまで伝えられたことを示す事例とも言える¹¹¹。隣接する 2 枚の上段レリーフ石板を順に取り上げて考察する。

¹¹⁰ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 73 (Kanaganahalli22)], Poonacha[2013: 406, Pl. 100]

¹¹¹ 上座部大寺派所伝の *Dīpavaṃsa* に記される諸方教化伝説がカナガナハリ大塔に描かれているとは考えにくい。

その理由として、上座部がインド大陸に進出した痕跡がナーガールジュナコンダの碑文(塚本啓祥[1996: 331–334, Nāgārjunakoṇḍa 41, 340–341, Nāgārjunakoṇḍa 50]) に刻まれており、その年代が 3–4 世紀であること。そして、歴史上、文献資料に「上座部 (Theravāda)」の名称が登場するのは *Dīpavaṃsa* からであり、その作成年代が 4 世紀であることから、この 2 点を踏まえてスリランカの仏教徒たちが上座部と名乗り始めたのは 3–4 世紀であることが指摘されており、カナガナハリ大塔上段レリーフ石板の制作時期よりも遅れるからである。

上座部の名称及び成立については、馬場紀寿[2008: 214–217]、[2011: 155–156]を参照。

1. 2. 1

雪山夜叉が描かれる上段レリーフ石板

カナガナハリ大塔の上段レリーフ石版(Kanaganahalli 22)は、西門の正面に位置するアショーク王の姿が描かれた上段レリーフ石版(Kanaganahalli Asoka2(36)¹¹²)の右側に設置されていたことがルクザニッツ博士の所有する写真によって確認することが出来る¹¹³。雪山夜叉の姿が描かれる上段レリーフ石版は、ハンサ鳥の装飾帯によって上・下と2つの区画に分割されている(→ 図8を参照)。その下枠部分に「雪山のヤクシャ達、ナーガ達も」(*hemavatā yakhā nāgā pi*¹¹⁴)と記された碑文が刻まれている。上段区画には、5人の半神(demi-gods¹¹⁵)が体を右に向けて、右上に向かって合掌している。前列の右端には合掌した両手を頭上に掲げた雪山夜叉が特に目立って描かれている¹¹⁶。その一方で、後方となる一番左端の半神の頭上には龍蓋が描かれており、合掌するナーガが描写されている。下段区画では、5人の半神が同じく合掌して右上に視線を向けている。中央には背中に翼のある金翅鳥(Skt. *suparṇa* Pā. *supaṇṇa*)の特徴がみられる半神が胸元で合掌している姿がよく判別できる¹¹⁷。上・下の区画に描かれる半神達全員の視線が右上に注がれていることで、次に観察する右隣のレリーフに合掌の対象者が存在することを予想させる。

¹¹² 荒牧/Dalayan/中西[2011: 92 (Kanaganahalli Asoka2(36))、Poonacha[2013: 411, Pl. 105]

¹¹³ ルクザニッツ博士の写真については、序論: 註 15 を参照。

¹¹⁴ Nakanishi and von Hinüber[2014: 83 (II. 8, 4. Pl. 29)]、Poonacha[2013: 465, no. 119]

¹¹⁵ 文献資料では非人(Pā. *amanussa-*)と記されてヤクシャ・ガンダッパ、クンバンダ・ナーガを同位置の存在として位置付けている。DN 32: *Āṭṭāṇāṭṭiyasutta* (DN iii, 203, 4–23)

¹¹⁶ 古代初期インド美術におけるヤクシャ像については、本章: 註 100 に言及している。

¹¹⁷ 背中に翼が生えた金翅鳥(Skt. *suparṇa* Pā. *supaṇṇa*)を表現した最初期の図像が、パールフットに存在する。パールフットの南門屈曲欄楯(Prasenajit Pillar (P29))の外側の三段区画から構成されるレリーフのうち、中段には、20人の神々が5グループずつ、上下2列に並んで中央の樹に向かって合掌しながら向き合っている。その下段左側のグループに配置された神々のなかに、同じく背中に翼の生えた半神が描かれている。Lüders[1963: 99]は、その姿から金翅鳥であることを指摘している。



図 8: 雪山夜叉とナーガの礼拝図
(Kanaganahalli 22)

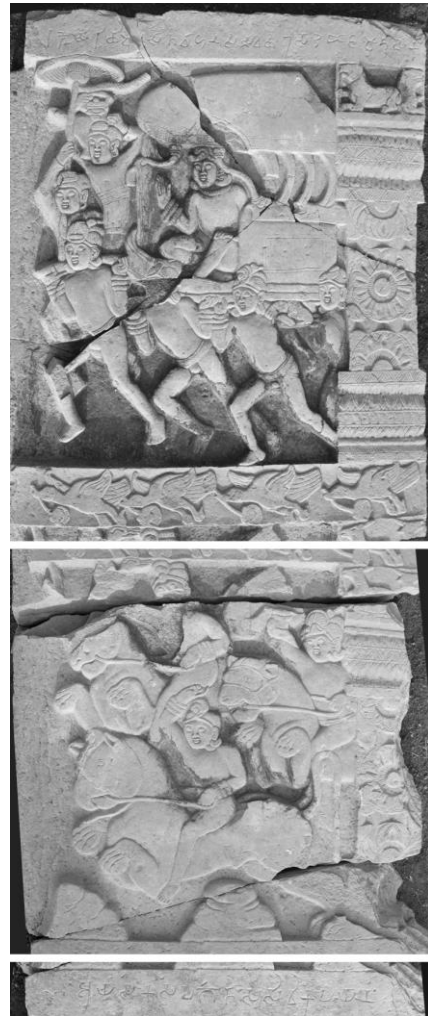


図 9: 聖者カッサパゴッタによる伝道図
(Kanaganahalli 21)

1. 2. 2

尊者カッサパゴッタが描かれる上段レリーフ石板

その右隣のレリーフ石版は、同様にルクザニッツ博士の所有する写真によって Kanaganahalli 21 が設置されていたことが確認出来る(→ 図 9 を参照)。このレリーフ石版も上・下と 2 つの区

画に分割されており、その下枠部分に主題が刻まれている¹¹⁸。

「尊者カッサパゴッタの駕籠での行進」(*ayasa kasapagotasa sivikapayāna(m)*)¹¹⁹と記されて、上段区画に屋根付きの駕籠に乗車した尊者(*aya* < Skt. *ārya*-Pā. *ariya*-)と称されるカッサパゴッタの姿が見て取れる。半神達の礼拝対象であるカッサパゴッタは頭にターバンを巻き、首飾りと腕輪を身に付けて、左手は膝の上に置き、右手を挙げ



図 10: 聖者カッサパゴッタによる伝道図
(Kanaganahalli 21 上段区画 部分拡大)

ている。その傍らには、各々水瓶と傘蓋を持った 2 人の従者が付き従い、また 4 人の従者が駕籠を担ぎ上げて、総勢 6 人がカッサパゴッタの周囲を取り囲んでいる。下段区画には従者と同じ姿をした 3 人の人物がそれぞれ左手で手綱を握り、口に轡をはめるトラのような猛獣に乗り、人差し指を立てた右手を頭上まで高く挙げている。

ここで留意すべきことは、カッサパゴッタの外見が在家信者の特徴を具えていることである(→ 図 10 を参照)¹²⁰。それに加えて、文献資料中には、駕籠(Pā. *sivikā*-)に乗車して移動する出家者の用例は管見の限り見出せない。むしろパーリ律の犍度部 *Cammakhandhaka* (皮革犍度)に記される規定では、出家者が乗り物に乗車することを戒める記述が存在する¹²¹。図像資料に示される

¹¹⁸ Kanaganahalli 21 の上枠には、サータヴァーハナ朝シムカ王在位 16 年に寄進されたことを記す碑文が 4 枚の上段レリーフ石版(21(I. 3), 19 (IV. 9), 18/10 (IV. 2), 13(II. 4, 22)) の上枠を使用して刻まれている。Nakanishi and von Hinüber[2014: 28–29 (I. 3. Pl. 1)], Poonacha[2013: 464, no. 101]

¹¹⁹ Nakanishi/von Hinüber[2014: 103 (III. 3, 3. Pl. 35)], Poonacha[2013: 466, no. 128]

¹²⁰ カナガナハリ大塔の上段レリーフ石版には、ブッダの姿に先行して出家者(比丘)の姿を描いた図像が数点存在する。荒牧/Dalayan/中西[2011: Kanaganahalli 14/19、39、44、59] 彼ら出家者は、文献資料(MN 26, Ariapariesanasutta (MN i, 163, 29–31)) に記される特徴を具えており、剃髪し、袈裟を纏っている。

¹²¹ PED s.v. *sivikā*- 文献資料における駕籠(Pā. *sivikā*-)の用例は少なく、パーリ律の犍度部(*Vinaya*:

このような実例を、文献資料に基づいてどのように理解すべきか、的確な解釈をし難い状況であるが、もう一步踏み込んで、カッサパゴッタに関する情報を知り得る舎利容器に刻まれた碑文の内容を最後に確認したい。

1. 3

カッサパゴッタの名が刻まれる舎利容器

中インド、マディヤ・プラデシュ州、ビールサ地方には、サーンチー大塔を含め 5 つの仏教遺跡から複数の仏塔が発見されており、それらの仏塔から出土した舎利容器には、その中に納められた遺骨の所有者名が刻まれている(→ 図 11 及び資料 3 を参照)。具体的には、ソーナーリ(Sonāri)第 2 塔がアショーカ治世の末期、紀元前 3 世紀の建立であり、出土した舎

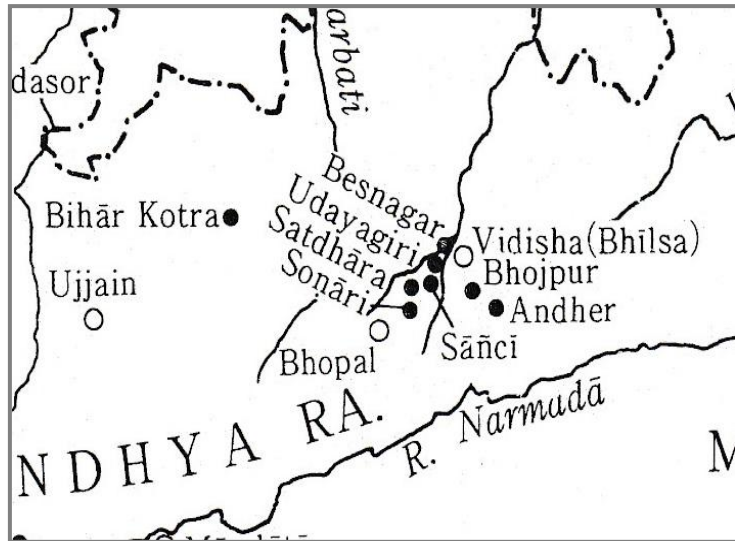


図 11: 中インド・ヴィディシャ周辺地図

利容器に納められていた複数の遺骨が、後のシュンガ(Sunga)朝、紀元前 2 世紀に他の遺骨と合わせてサーンチー第 2 塔に再度納められたという経緯が、所有者名の重複によって知られている¹²²。従って、本来の舎利の安置状況を知ることが出来るソーナーリ第 2 塔から出土した 5 つの舎利容器に刻まれた所有者名を確認すると、塚本啓祥[1980]が指摘するように伝道伝説に記される 5 名の長老達のうちカッサパゴッタ、マッジマ、ドゥラビサラの 3 名が含まれており、ソーナーリが伝道伝説の根拠地であったことが証明されてきた¹²³。遺骨の所有者である 5 名のうち、

Mahāvagga 5, Cammakhandhaka (皮革犍度))には、病気の比丘のみに乗り物への乗車が許されている。(Vin i, 191, 24-192, 4)

¹²² Cunningham[1854: 315-319]、塚本啓祥[1980: 580-587]、井上陽[2001b: 89-90]

¹²³ 諸方教化伝説に記される 5 名の長老たちの名と、ソーナーリ第 2 塔から出土した 5 つの舎利容器

カッサパゴッタのみに以下の碑文の内容が刻まれている。

sapurisasa Kotīputasa Kāsapagotasa sava-Hemavat'ācariyasa

全雪山地方の師(*ācarya*)、善人(*sapurisa*)コーティプタ・カーサパゴッタの〔遺骨〕¹²⁴

カッサパゴッタに対して「全雪山地方の師」¹²⁵(Skt. *ācārya*- Pā. *ācariya*-)」と称する銘が刻まれている¹²⁶。そのことは、同様にサーンチー第2塔から出土した第1舍利容器の蓋の外側に刻まれる、*sapurisa(sa) Kāsapagotasa sava Hemavat'ācariyasa* 「全雪山地方の師、善人カーサパゴッタの〔遺骨〕¹²⁷」にも確認されることから、カッサパゴッタこそが、伝道伝説に記される5人の長老達のなかでも「全雪山地方の師」と称される存在であったことを伝えている。

それに対してカッサパゴッタに冠される「善人 (Skt. *satpurṣa*- Pā. *sappurisa*-)」については、カナガナハリ大塔には「尊者 (Skt. *ārya*- Pā. *ariya*-)」と刻まれ、*Dīpavaṃsa* には長老(Skt. *sthavira*-, Pā. *thera*-)と記されていて、共通していない。初期經典中には「善人」、及び「尊者」も、出家者と在家信者の両方に使用されている用例を見出すことが出来る¹²⁸。また、この「善人」と冠される名前については、近年、山田明爾[2014]による再検討が行われており、文献資料の記述から在家信者の遺骨を納める仏塔の存在とその特徴を挙げ、それと照合してサーンチー第2塔

の所有者名の残り2名は一致しない。残り2名の名は、Kosikiputa (塚本啓祥[1996: 940, Sonāri 6]) と Ālābagira (塚本啓祥[1996: 940, Sonāri 7])である。

また、本研究では配置場所が不明なために取り扱わないが、カナガナハリ大塔にはマッジマとドゥラビサラの名が刻まれた碑文とそれに対応する上段レリーフ石板 Kanaganahalli 16が出土している。Nakanishi and von Hinüber[2014: 102 (III. 3, 2)], Poonacha[2013: 467, no. 139]

その Kanaganahalli 16の図像表現について、von Hinüber[2016: 12-13]の解釈では、象に乗った人物がマッジマとドゥラビサラの遺骨を納めた舍利容器を抱えて運搬している描写であるとしている。

¹²⁴ ソーナーリ第2塔出土、滑石舍利容器 No. 3の蓋の外側に刻まれており、現在は、大英博物館に所蔵されている。Cunningham[1854: 317] 塚本啓祥[1996: 939-940, Sonāri 5]

¹²⁵ 塚本啓祥[1996]は、Skt. *ācārya*- Pā. *ācariya*-を「軌範師」と解釈している。

¹²⁶ この Hemavata を雪山地方と解釈するか、部派名の雪山部と理解するか意見が分かれている。

本章: 註 108 を参照。

¹²⁷ 塚本啓祥[1996: 845, Sāncī 679]を参照。

¹²⁸ 初期經典における善人(Skt. *satpurṣa*- Pā. *sappurisa*-)の用例を精査した井上陽[2002: 56-60]によれば、在家信者には、良い布施の為す者として、出家者には、理想的出家者として説かれていると報告されている。

の配置が寺外にあることから、「善人」と冠される遺骨の所有者は、在家信者である可能性が指摘されている¹²⁹。それについては、カナガナハリ大塔に描写されるカッサパゴッタが、在家信者の特徴を具えた描写であった図像資料の考察結果を考慮すると、より可能性が高くなると言えるだろう。この問題については、在家信者に関する先行研究と文献資料の精査が必要となるため、今後の研究課題としたい¹³⁰。

小結 1

カナガナハリ大塔に描かれる伝道伝説について、関連する文献資料に基づいて図像表現を考察した結果、隣り合う 2 枚の上段レリーフ石板は、次のような段階を経て成立し、展開したと考えられる。

- 伝道伝説のモチーフは、初期經典の韻文資料 *Suttanipāta* の古層に位置する *Hemavatasutta* にあり、そこでは 5 種の欲望の対象に加えて第 6 番目に「意(Skt. *manas*-)」が存在することを説くブッダの説法によって、神通力と名声のある雪山夜叉が仏教に帰依したことを伝えている。
- Aśoka 治世の末期、紀元前 3 世紀頃にヴィデーシャ周辺を活動拠点としていた西インド仏教に属するカッサパゴッタ、マッジマ、ドゥラビサラは、雪山地方で夜叉を再教化した者達として知られており、彼らの死後には遺骨を納めた仏塔がソーナーリに建立された。舍利容器に刻まれる碑文の内容から、彼らが雪山地方に所縁のある者たちであり、カッサパゴッタはその中でも「全雪山地方の師」として活躍していたことが確認される。
- その西インド仏教の伝える伝道伝説が、サータヴァーハナ朝シムカ王の在位期にあたる紀元前 1 世紀頃にはカナガナハリ大塔に伝播し、図像化が行われた。この段階における伝道伝説は、「尊者カッサパゴッタが、従者と共に駕籠に乗って雪山地方へ赴き、そこで雪山

¹²⁹ 山田明爾[2014: 3-6]『根本説一切有部毘奈耶雜事』に凡夫善人の舍利塔は、平頭で輪蓋が無く、寺外に在ることを規定している箇所が記されている。

¹³⁰ 初期經典には在家信者が活躍する經典の記述が残されている。福田琢[2006]がそれを精査しており、すぐれた在家信者が中心人物となって同じ在家信者を教導したり、外道たちに仏教教義を説いていた用例を挙げている。

を住処とするヤクシャ達、そしてナーガ達をも教化した」という内容であることが判明した。

- その後、4 世紀のスリランカでは上座部大寺派の僧団が、スリランカ史を作成する際に、すでに南インドカナガナハリ大塔にまで知られていた西インド仏教所伝の伝道伝説を諸方教化伝説中に採用した。その中でカッサパゴッタは、5 人の長老達の 1 人として記された。

従って、本章において第 2 期サータヴァーハナ時代の第 1 段階(Phase I)のカナガナハリ大塔が西インド仏教から伝道伝説を受容し、次いで、スリランカの上座部に受け継がれていく変遷が明らかになった。そのことは、仏教がインド本土からスリランカへ伝播する、南伝の伝承経路の一端にカナガナハリ大塔が位置していることを証明している¹³¹。そして、カナガナハリ大塔を活動拠点としていた仏教僧団が西インド仏教の系統に属する僧団であったと考えられる。それはすなわち、他の上段レリーフ石板にも西インド仏教の伝持していた内容が反映されている可能性が高いことを意味している。この見通しを確かなものにするために、次章以降からは、上段レリーフ石板に描かれた仏伝図の図像表現に、どのような要素が含まれているかどうかを注意深く考察していくことにしたい。

¹³¹ スリランカへの仏教伝来の経緯を *Dīpavaṃsa* に基づいて理解すれば、アショーカ王の息子マヒンダによって、仏教発祥地マガダ国から直接伝えられたことになるが、*Dīpavaṃsa* は、自国の仏教の正統性を主張するための脚色が多く、ブッダが虚空に飛翔して、スリランカに來訪したことも記している(Dīp, 16, 31-17, 3)。

このために現在は、マヒンダが西インド仏教より仏教を学んだこと、パーリ語が西インドの方言と深い関係にあることから、西インドを経由してスリランカへ伝来したと考えられている。静谷正雄[1978: 237] 山崎元一[1979: 155-162] 前田恵学[1964: 15-53]

上座部の名称、及び成立については、本章: 註 111 を参照。

資料4: 雪山夜叉經典群對照表

	Suttanipāta vv. 153–180	『別訳雑阿含経』 (328) T. 2, No. 100.	『雑阿含経』 (1329) T. 2, No. 99.	『佛説義足経』 第13経 「兜勒梵志経」 T. 4, No. 198.	『立世阿毘曇論』 「夜叉神品第四」 T. 32, No. 1644.	SN 1. 1: 3. 10, Enijaṅgha	『別訳雑阿含経』 (177)	『雑阿含経』 (602)	SN 1. 1: 7. 10, Loka	『別訳雑阿含経』 (235)	『雑阿含経』 (1008)	『雑阿含経』 (1326) 阿闍鬼	SN 1. 2: 2. 5, Candana	『別訳雑阿含経』 (178)	『別訳雑阿含経』 (315)	『雑阿含経』 (1269)	『雑阿含経』 (1316)	『別訳雑阿含経』 (325) 曠野夜叉
1. プロローグ		483c17–484a1	365c6–19	183b17–28	176c4–177b4													
2. 七岳夜叉の誘い	v. 153	484a1–4 (484a5–10)	365c19–22 (365c23–29)	183b29–184c1 (183c2–7)	177b5–6 (177b7–13)													
3. 雪山夜叉の問い	v. 154	484a11–13	366a1–3	183c8–10	(177b14–19) 177b20–21													
4. 七岳夜叉の答え	v. 155	484a14–17	366a4–6		177b22–24													
5. 雪山夜叉の問い	v. 156	484a18–21	366a19–21	183c11–12	177c2–4													
6. 七岳夜叉の答え	v. 157	484a22–24	366a22–24	183c13c–14	177c5–7													
7. 雪山夜叉の問い	v. 158	484b4–b6	366b2–4	183c15–16	177b25–27													
8. 七岳夜叉の答え	v. 159	484b7–9	366b5–7	183c17–18	177b28–c1													
9. 雪山夜叉の問い	v. 160	484a25–28	366a25–27	183c19–20	177c8–10													
10. 七岳夜叉の答え	v. 161	484a29–b3	366a28–b1	×	177c11–13													
11. 雪山夜叉の問い	v. 162	484b10–12	366a7–9	183c21–22	177c14–16													
12. 七岳夜叉の答え	v. 163	484b13–15	366a10–12	183c23–24	177c17–19													
13. 雪山夜叉の問い	v. 163A	484b16–18	366b20–22	×	177c20–22													
14. 雪山夜叉の問い	v. 163B	×	366a13–15															
15. 七岳夜叉の答え	v. 164	484b19–21	366b16–18	183c25–26	177c26–27													
16. 雪山夜叉の問い	v. 165	484b22–25	366b26–29	183c27–28	×	SN i, 16, 7–10	438a19–25	161a3–9										
17. 雪山夜叉の問い	v. 166	×	366c7–8	183c29–184a1	178a5–7													
18. 雪山と七岳夜叉	v. 167	(484b26–27) 484b28–29	(366c1–3) 366c4–6	×	×													
① 雪山夜叉の問い		484c10–12	366c16–18															
② 世尊の答え		484c13–16	366c19–c23															
19. 雪山夜叉の問い	v. 168	484c17–19	366c24–c26	184a11–12	178a8–9				SN i, 41, 2–3	(459a23–26) 459a27–28	264a9–10	364c24–25						
20. 世尊の答え	v. 169	484c20–22	366c27–c29	184a13–14	178a11–12				SN i, 41, 4–5	459b1–2	264a12–13 (264a14–18)	364c27–28						
21. 雪山夜叉の問い	v. 170	484c3–4	366c9–c10	184a7–8	178a14–15	SN i, 16, 7–10	438a26–27	161a10–11										
22. 世尊の答え	v. 171	484c5–7	366c11–c13	184a9–10	178a17–18	SN i, 16, 11–12	483a29–b1	161a13–14										
23. 世尊の答え	v. 172	484c8–9	366c14–15	×	178a19–20		483b2–3	161a15–16										
24. 雪山夜叉の問い	v. 173	484c23–26	367a1–3	184a15–16	178a22–23						365a1–2	SN i, 53, 14–17	438b12–14	479c20–23	348c13–14	361b23–28		
25. 世尊の答え	v. 174	484c27–485a1	367a4–6	184a17–18	178a25–26						365a4–5	SN i, 53, 18–19	438b16–17	479c25–26	348c16–17	361c1–2		
26. 世尊の答え	v. 175	485a1–3	367a7–8	184a19–20	178a27–28						365a3–7 365a11–15	SN i, 53, 20–21	438b18–20	479c27–28	348c18–19	361c3–4		
③ 雪山夜叉の問い		485a4–6	367a9–11								365a9–10							483a7–8
④ 世尊の答え		485b7–12	367a12–17								365a12–13							483a10–11
⑤ 雪山夜叉の讃嘆		485b13–18	367a18–22															
27. 雪山夜叉の讃嘆	v. 176	×	×	×	178b1–2													
28. 雪山夜叉の讃嘆	v. 177	×	367a27–b1	×	178b3–4													
29. 雪山夜叉の讃嘆	v. 178	×	×	×	×													
30. 雪山夜叉の讃嘆	v. 179	485a21–23	367a25–26	184a28–29	178b5–6													
31. 雪山夜叉の讃嘆	v. 180	485a18–21	367a23–24	184b1–2	×													
32. エピローグ		×	367b2–4	184b3–b11	178b7–10													

第 2 章

上段レリーフ石版 No. 15 – 誕生・灌水・七歩図 –

第 2 章からは、個々の仏伝場面の検討に移る。文献の発達史と図像の展開過程を踏まえて、カナガナハリ大塔から出土した上段レリーフ石版 Kanaganahalli 15 の図像表現とその特徴を観察する。Kanaganahalli 15 は碑文の解読から誕生図が描かれていると比定されている。そこで、文献資料と比較考察を行うために、ブッダの一生涯を物語る仏伝文学として語られる以前のブッダの誕生に関する諸伝承を、初期經典中から拾い出して整理するところからはじめる。そして、それに対応する誕生図が極めて早い段階から成立した可能性も指摘しておきたい。

2. 1

誕生伝説と誕生図

我々の知る誕生図については、仏像の出現とともにガンダーラ地域で初めて図像化が行われたと考えられてきた。同主題に関しては肥塚隆[1976]、上枝いづみ[2007]等によって文献整理が行われ、その特徴と成立の背景も明らかにされている。その研究成果をまとめると、ほぼ全てのガンダーラ地域から出土した誕生図には以下のような特徴があると指摘されている(→ 図 12 参照)。

- ① 仏母マーヤーが右手で樹を掴み、
- ② ブッダが仏母マーヤーの右脇から誕生する。
- ③ インドラ神(及びブラフマー神)がそのブッダを受け取る。
- ④ 天の太鼓が鳴り、神々が指笛を吹き、天衣の裾を振り上げてブッダの誕生を歓喜する。



図 12: ガンダーラ地域 シクリ出土 2-3 世紀 h. 35cm, w. 47cm.
ラホール博物館蔵

以上のような従来の定説に対して、次のような事実を指摘することが出来るであろう。古代初期インド美術¹³²の代表例であるパールフット (Śunga, 150 BCE : 南門屈曲欄楯 Prasenajit Pillar 中・下段区画(P29))の碑文と図像の解明を行った Lüders [1941][1963]、及び同様にアジャンター前期石窟(Sātavāhana, the 1th century BCE : 第 10 窟 左側壁面)の碑文と図像の解明を行った Schlingloff [1981]はすでにこれらの古代初期インド美術において誕生伝説が図像化されていることを指摘している¹³³。彼らの指摘は、次のような誕生伝説を伝える諸文献によっても確認される¹³⁴。

¹³² 古代初期インド美術の期間は、肥塚隆 [1979: 120]が記す「インド美術史でいう古代初期とは、インドが歴史時代に入った前 6-5 世紀ころからクシャーン族の侵入する 1 世紀後半までを指し、前 2 世紀後半ころ初めて仏伝図が作られるようになった」に従って理解している。

¹³³ Lüders[1941: 52-62][1963: 94-104]、Schlingloff[1981: 181-198]

¹³⁴ 誕生伝説を伝える文献資料を収集整理し、5 グループ(I~V)に大別し以下に列挙する。
仏伝文学という区分は、山田龍城[1959: 66-69]に従っている。仏伝文学として挙げられている文献

ブッダの誕生伝説を伝える諸文献のうち最も古い伝承は *Suttanipāṭa* (*Nālakasutta*, 第 679–683 詩節) に記される誕生伝説である。古層に位置する Sn: *Nālakasutta* の冒頭部分には、アシタ仙によって、ブッダが誕生したことを知り、歡喜する神々の姿が天界で目撃され、誕生場所がルン

は、*Buddhacarita*、*Mahāvastu*、*Lalitavistara* の 3 資料であり、それに対応する漢訳、*Nidānakathā*、インド側の資料を欠く漢訳の仏伝を加えて以下に整理している。但し、*Mahāvastu* は本来、大衆部系の説出世部の律に属するものであることは留意しておく。文献資料の収集には中村元[1969][1992]、増谷文雄[1981]、森章司ほか(編)[2000]を参照した。

I. 初期經典

1. *Suttanipāṭa*: *Nālakasutta*, vv. 679–683 [Sn, 131, 19–133, 2]
2. *Majjhimanikāya* 123: *Acchariyabbhutadhammasutta* (MN iii, 122, 16–17) = 『中阿含經』「未曾有法經」〔(根本)説一切有部〕[T. 1, No. 26, 470a26–28 / b22–23]
3. *Dīghanikāya* 14: *Mahāpadānasuttanta* (DN ii, 14, 6–15, 2) = *Mahāvādānasūtra* (MAV, 62–63) 〔東トルキスタン有部〕= 『長阿含經』「大本經」〔法藏部〕[T. 1, No. 1, 4b6–7]

II. 仏伝文学(1) Skt.

1. *Buddhacarita*, Aśvaghōṣa 著, ch. 1, vv. 8–11 (Bc, 1, 3–10) = 『佛説佛所行讚』[T. 4, No. 192, 1a28–29] = 『佛本行經』[T. 4, No. 193, 58b20–21] ≅ *Divyāvadāna* No. 27 (Divy, 390, 2) = 『阿育王傳』[T. 50, No. 2042, 104a] = 『雜阿含經』[T. 2, No. 99, 166c6–18] = 『阿育王經』[T. 50, No. 2043, 136c12–17]
2. *Mahāvastu* 〔大衆部説出世部〕(Mvu ii, 20, 9–17) ≅ 『佛本行集經』[T. 3, No. 190, 686a25–c2]
3. *Lalitavistara*, ch. 7 (Lv, 83–84) = 『佛説普曜經』[T. 3, No. 186, 494a26] = 『方廣大莊嚴經』[T. 3, No. 187, 553a3–7]
4. *Śākyasiṃhajātaka*, v. 4 (Śsj, 152)

III. 仏伝文学(2) Jātaka 註釈文献

1. *Jātaka-atthavaṇṇanā*, *Nidānakathā* (Jā. i, 52, 20–30)

IV. 仏伝文学(3) 漢訳 (インド側の資料を欠く)

1. 『修行本起經』[T. 3, No. 184, 463c11–13]
2. 『佛説太子瑞應本起經』[T. 3, No. 185, 473c1–2]
3. 『異出菩薩本起經』[T. 3, No. 188, 618a17–18]
4. 『僧伽羅刹所集經』[T. 4, No. 194, 122b16–17]
5. 『過去現在因果經』[T. 3, No. 189, 625a22–24]

V. (根本)説一切有部律 (破僧事)

1. *Saṅghabhedavastu* (Sbhv i, 44, 12–46, 17) = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』[T. 24, No. 1450, 108a3–7] ≅ 『佛説衆許摩訶帝經』[T. 3, No. 191, 939b5–11]

ビニーであったことを語っている。以下に該当箇所を提示する。

so bodhisatto ratanavaro atulyo manussaloke hitasukhatāya jāto
sakyānaṃ gāme janapade lumbineyye, ten 'amha tuṭṭhā atiriva kalyarūpā.

Suttanipāta: Nālakasutta, v. 683¹³⁵

比類なき最高の宝であるかの菩薩が、人間界のうちに利益と安楽のために生まれました。

シャカ族の村に、ルンビニーの里に、だから私達は満足し、大層喜んでいるのです。

また同じく韻文資料である *Theragāthā* 第 534 詩節では、ブッダの母の名がマーヤーであると伝えている¹³⁶。

suddhodano nāma pitā mahesino, buddhassa mātā pana māyanāmā
yā bodhisattaṃ parihariya kucchinā kāyassa bhedā tidivasmi modati.

Theragāthā: Kāḷuḍāyī Thera, v. 534¹³⁷

偉大な聖仙である父の名はスッドーダナであり、そして、ブッダの母はマーヤーという名である。

その彼女は菩薩を母胎によって守り、身体の破壊のゆえに(死後に)、三十三天において楽しむ。

しかし、両伝承ともに「菩薩」(Skt. *bodhisattva*, Pā. *bodhisatta*)という語がすでに現れているのでバールフットよりも古い文献伝承であるとは言い難い。干潟龍祥[1969]は「菩薩」の語がバールフットの碑文には見られないことを指摘して、バールフットの彫刻が完成した時にはまだ

¹³⁵ Sn, 132, 13–16.

¹³⁶ もともと *māyā* は、中期インド語で「お母さん」という意味であり、パーリ語においてもそのように使用される用例が見られる。ところが、この詩節では、*māyā nāma* 「～という名前である」と記して *māyā* が固有名詞として明確に語られているので取り挙げている。辛嶋静志[2012: 5]を参照。

¹³⁷ Th, 57, 5–8.



図 13: バールフット 南門屈曲欄楯 Prasenajit Pillar (P29)

「菩薩」という語は知られておらず、従って「菩薩」の語はバールフットより後の紀元前 1 世紀初頭以後、紀元後 1 世紀後半までの間に出来上がったと述べている¹³⁸。上述した状況を踏まえるならば、現存最古の仏教美術を有するバールフット段階の誕生図は、少なくとも Sn: Nālakasutta の冒頭部分に伝承されるような天界での神々の歓喜と讃嘆だけによって間接的に表現された誕生図であったはずであろう。上述した初期經典に語られるブッダの誕生伝説の記述に従えば、バールフットのレリーフを神々が天界でブッダの誕生を喜ぶ姿を表現していると解釈したリュエダースの指摘にも理解が出来る(→ 図 13 を参照)¹³⁹。

なお現在では、リュエダースが解明したバールフットの誕生図を、降魔成道図に修正する論考が発表されており、それが定説となっている¹⁴⁰。降魔成道図であると指摘する根拠として、中段の区画中に描かれた人物の表現が挙げられている。左下隅に描かれている人物は、左手を頬にあて、右手で木の枝を持って地面に書く仕草をしている。この表現は、アマラーヴァティー大塔のレリーフやカナガナハリ大塔の上段レリーフ石板

¹³⁸ 干潟龍祥[1969: 57–61]

平川彰[1989: 235–239]も干潟龍祥[1969: 57–61]を取り上げて、「菩薩」という語の使用は、バールフットの段階では、一般に通用しておらず、あまり古くないことを指摘している。

¹³⁹ バールフット南門屈曲欄楯は上・中・下の区画に分かれて図像が描かれている。Lüders[1963: 95–96]は其中・下の区画を誕生図に同定し、上区画は碑文の解説に基づいて「菩提樹か、もしくはそれを取り囲んで建てられた建物」と解釈している。しかしブロックやクマーラスワミーは「成道」と解釈している。Bloch[1912: 139, n. 1]、Coomaraswamy[1956: 43]を参照。

Sn: Nālakasutta の第 683 詩節に続く第 684 詩節には、第 3 章で取り上げる初転法輪伝説があわせて語られている。

¹⁴⁰ Coomaraswamy[1956: 45]、Schlingloff[1982][1988: 6–8]、中川原育子[1988: 52–54]、宮治昭[1994: 189–194]

Lüders[1963: 102]もバールフットに描かれたこの人物を魔であるとしているが、Aśvaghōṣa が Bc における誕生場面中(Bc, ch. 1, v. 27)に語った、「人々を救う師が生まれたとき、ひとり愛の神カーマ(Kāmadeva)のみが喜ばなかった(以下略) 梶山雄一ほか(編)[1985: 6]」を引用して、バールフットに描かれたこの人物は誕生場面中に登場する魔の表現であると指摘している。

Kanaganahalli 11/08 の下区画にも降魔成道図中の魔として描かれており、後のサータヴァーハナ時代では降魔成道図における魔の姿として定着している¹⁴¹。但し、文献資料に記されるこのような魔の表現は、古代初期インド美術よりも後代に制作された南方上座部所伝の *Jātaka* 註釈文献 *Nidānakathā* (紀元後 5 世紀頃) の記述¹⁴²に合致する表現であるため、*Nidānakathā* をバールフットのレリーフを解明する拠所とすることは、難しいようにも思われる¹⁴³。

もしくは、初期經典の *Samyuttanikāyā* 1. 4: *Mārasamyutta* 3. 4, *Sattavassāni* 「七年の間」に記される魔に同様の表現をみることもできるが、SN 1. 4: *Mārasamyutta* 3. 4, *Sattavassāni* 「七年の間」と 3. 5, *Dhitaro* 「魔の三女」の 2 経は、後の付加であることを Windisch[1895]、荒牧典俊[1983] が指摘している¹⁴⁴。

従って、現在確認することの出来る文献および美術資料から言えることは、少なくとも降魔成道説話の魔の表現が固定するのはサータヴァーハナ王朝の時代であることであり、それ以前の魔の表現については確定し得ないことである。それを検討するためには、初期經典中の魔に関する文献資料の精査に基づいた図像資料の解明が必要となるため本章では控えることにしたい。

続くアジャンター第 10 窟に描写された誕生図は、剥落等の損傷により肉眼で確認し難く、描き起こし図に基づいて解釈されているので明確には判断し難いが、バールフットでは未だ描かれていなかった仏母マーヤーを描き、具体的な誕生図が描かれている。ところが、ガンダーラ地域から出土した誕生図の特徴とは明らかに異なっていることが観察される(→ 図 14 を参照)。

¹⁴¹ Sivaramamurti[1942: Pl. 19b]、Knox[1992: 29, Fig. 8]、荒牧/Dalayan/中西[2011: 68]、Poonacha[2013: 397, Pl. XCIA]

¹⁴² *Jā i*, 78, 13–29.

¹⁴³ *Jātaka* 註釈文献の *Nidānakathā* は 3 章の構成となっており、第 1 章 *Dūrenidhāna* は、*Buddhavaṃsa*、*Cariyāpīṭaka* を骨子にして註釈を施している。

紀元後 5 世紀初頭に活躍したブッダゴーサ(Buddhaghosa)の作としては認められず作者不明であるが、年代的には同時代のものと言われている。

前田恵学[1964: 770]、干潟龍祥[1978: 104–105]、ヴィンテルニッツ[1978: 144]、von Hinüber[1996: 55–56, §111]を参照。思想内容からは、菩薩思想や授記思想を知っていることが指摘されている。

¹⁴⁴ 荒牧典俊[1983: 14–15] を参照。『別訳雑阿含経』と『雑阿含経』は、SN 1. 4: *Mārasamyutta* 3. 4, *Sattavassāni* 「七年の間」と 3. 5, *Dhitaro* 「魔の三女」の 2 経を 1 経にして所収している。荒牧典俊[1983: 21, 註 11]は、これら 2 経の中心となる問答に限り、他の 8 経と同時に成立したと考える。

- ① 仏母マーヤーが左手で樹を掴み、
- ② ブッダが仏母マーヤーの(右もしくは左)脇から誕生する。
- ③ 神々が誕生するブッダに対して指をさしたり、誕生するブッダを受け取る
うとして手を差し伸べている。
- ④ 天の太鼓が鳴り、神々が天衣の裾を振り上げてブッダの誕生を歓喜する。



図 14: アジャンター第 10 窟 左側壁面 (描き起し図)

アジャンター第 10 窟の壁画を解明した Schlingloff[1981][1988]は、誕生図の上方に位置する壁画と同じ時代に刻まれた碑文の解読を同時に試みている。文字の上半分は剥落してしまって母音の符号が失われた状態であるものの、彼はこの碑文が誕生図に関連した内容であると解釈し、次のように解釈している¹⁴⁵。

Der zukünftige Buddha wird nach seiner Geburt nicht von menschlichen Wesen , sondern von Göttern in Empfang genommen.

将来のブッダは誕生した後に人間によってではなく、神々によって受け取られた。

¹⁴⁵ Schlingloff[1981: 187-188, fig. 2]を参照。

また、碑文の冒頭には *bhagavat* という語が確認されるので、パールフットと同様にアジャンター前期石窟でも「菩薩」の語が使用されていなかったということを留意しておきたい。アジャンター第 10 窟に描かれた誕生図は、仏母マーヤーが樹を左手で掴む姿を描き、ブッダが誕生する姿を表現していることから場面の背景を天界では無く、Sn: *Nālakasutta* に記述されたルンビニーに設定している。その仏母マーヤーが左手で枝を掴むということは、左の腕を挙げて脇腹が露出するので、その部位からブッダが誕生したと考えられるが、アジャンター第 10 窟の誕生図の仏母マーヤーの姿勢では、どちら側の脇から誕生したのか判断し難い。なお 2 世紀頃から誕生図を制作し始めるアマラーヴァティー大塔 (*Sātavāhana*, the 2nd century CE: 大塔基壇の石板) やナーガールジュナコンダ (*Ikṣvāku*, the 3rd century CE: アーヤカパネル) では、仏母マーヤーは左手で樹を掴み、左脇を露わにしているので左脇からブッダが誕生した姿を描いている(→ 表 3 を参照)。

表 3. 誕生図: インド内陸部の主な作例

出土地	所在(現所在地)	年代	出典
※ Bhārhut → 図 13	南門屈曲欄楯 (P29)	Śuṅga: the 150 BCE	Coom1956. Pl. 8, Fig. 23. Pl. 9, Fig. 26.
Bodhgayā → 図 15	北西角柱 No. 64.	Śuṅga: the 1th century BCE	Coom1935. Pl. 33.
Ajanṭā → 図 14	第 10 窟左側壁面	Sātavāhana: the 1th century BCE	Schlingloff 2000. vol. III, X, 12.
Kanaganahalli → 図 16	上段レリーフ石版 No. 15 下段区画	Sātavāhana: the early 2nd century CE	ADN 科研. p. 70. MASI106. Pl. LXXXV. B.
Amarāvātī	ロンドン、大英博物館: OA 1880.7-9.44.	Sātavāhana: the 2nd century CE	Knox. Fig. 61. cf. Schlingloff 2000. 48.
Nāgārjunakoṇḍa → 図 17	ナーガールジュナコンダ 博物館	Ikṣvāku: the 3rd century CE	Rosen Stone. Fig. 162, Fig. 188, Fig. 210, Fig. 228.

※パールフットのレリーフが誕生図であるかどうかは、上述した通り検討を要する。

ブッダの誕生伝説を伝える諸文献のうち、*Mahāvastu* (Mvu ii, 20, 9–17)、*Lalitavistara* (Lv. 83–84)、そしてほとんどの漢訳の仏伝經典が「右脇より生まれる」(従右脅生『修行本起經』[T.

3, No. 184, 463c11])と記述するのに対して¹⁴⁶、*Suttanipāta* 以外の南方上座部所伝のニカーヤ及び *Nidānakathā* は「菩薩の母は立ったまま菩薩を出産する *ṭhitā va Bodhisattaṃ Bodhisattamātā vijāyati*. (MN iii, 122, 16–17 ≡ DN ii, 14, 13–14)」とほぼ同一の記述を伝承する。反対に「左脇より生まれる」という記述は一切見られない。ブッダの誕生について、右脇からの誕生を具体的に指定した漢訳の仏伝文学と、仏母マーヤーが立ったまま出産したことを強調するニカーヤの伝承と大きく2つに大別される。*Majjhimanikāya* 123: *Acchariyabbhutaḍḍhammasutta* では仏母マーヤーを他の女性と差別するために立ったまま出産すると語っている。

yathā kho pan', Ānanda, aññā itthikā nisinnā vā nipannā vā vijāyanti, na h' evaṃ Bodhisattaṃ Bodhisattamātā vijāyati. ṭhitā va Bodhisattaṃ Bodhisattamātā vijāyati.

Majjhimanikāya 123: *Acchariyabbhutaḍḍhammasutta*

(MN iii, 122, 14–17 ≡ DN ii, 14, 11–14)

アーナンダよ。他の女性達は座って、あるいは臥して出産するようであるが、けっしてそのように菩薩の母は、菩薩を出産しません。菩薩の母は菩薩を立ったまま出産します。

MN 123: *Acchariyabbhutaḍḍhammasutta* は、アーナンダがブッダからかつて聞いた希有であり未曾有である法の話としてブッダの誕生に関する 19 種の事象を語る文献である¹⁴⁷。ニカーヤに収められたこの文献はブッダの誕生伝説を伝える諸文献のうち、その源泉となる文献資料であると Windisch[1908: 93–106]によってはじめに指摘され、その後の研究者等によって支持されてきた¹⁴⁸。しかしながら、この文献内には Sn: *Nālakasutta* 及び *Theragāthā* に言及されるルンビニーや菩薩の母の名であるマーヤーという語句は見い出せない。出産時もしくは出産前後の具体的な状況のみを語っており、それらの記述に関しては、最初に語られたものであると言えよう。この文献に記されたような具体的なブッダの誕生場面に基づいて、アジャンター前期石窟における誕生図の図像表現が出来上がったと考えられる。そして「菩薩の母は立ったまま菩薩を出産する」というニカーヤの伝承を反映するように、古代初期インド美術に位置付けられるボードガヤー(Śunga, the 1st century BCE: 北西角柱 No. 64)の誕生図に描かれた仏母マーヤーは、両

¹⁴⁶ 『僧伽羅刹所集經』[T. 4, No. 194, 122b16–17]は誕生時の具体的な記述を欠いている。

¹⁴⁷ 片山一良[2001: 30–31]を参照。

¹⁴⁸ 水野弘元[1957]、中村元[1969: 53–62]

手を挙げて樹木を掴んでいる姿で表現されている(→ 図 15 を参照)¹⁴⁹。

また、誕生したブッダを受け取る役目を果たす人物も二分される。四天王が誕生したブッダを受け取ったと記す文献は、MN 123: *Acchariyabbhutaḍḍhammasutta*、DN 14: *Mahāpadānasuttanta*、*Nidānakathā*、*Mahāvastu*、『佛説太子瑞応本起經』、『異出菩薩本起經』、『過去現在因果經』の 7 経であり、それ以外の文献では主に帝釈が受け取り役として登場する¹⁵⁰。

以上、ブッダの誕生伝説を伝承する諸文献の発達過程に基づき、古代初期インド美術に位置づけられる誕生図について観察すると、以下のような状況にあると理解出来る。

ブッダの誕生伝説は、ブッダの一生涯を物語る仏伝文学として創作される以前に段階的な変遷を経て成立している。最も古い伝承である Sn: *Nālakasutta* 及び

Theragāthā に記される記述に続いて、ブッダの出産時もしくは出産前後の具体的な状況のみを記した MN 123: *Acchariyabbhutaḍḍhammasutta* の断片的な記述によってそれが確認出来る。そして仏伝文学として伝承される段階では、この 3 経によって知られるブッダの誕生伝説に基づいて改作・増広された誕生伝説が仏伝文学の内部で種々に創作される。上枝いづみ[2007]の分析によると、それらの諸文献は創作された地域の文化背景を反映し、特にガンダーラ地域から出土した誕生図の特色に表れていることが指摘されている¹⁵¹。

そのようなブッダの誕生伝説の発達に対して、古代初期インド美術に位置づけられるパールフット、ボードガヤー、アジャンター前期石窟の誕生図は、誕生伝説の源泉となる 3 経(Sn:



図 15: ボードガヤー
北西角柱 No.64 (部分拡大)

¹⁴⁹ 他の女性と差別するために立ったまま出産すると伝えられた仏母マーヤーの出産場面が図像化される場合、その図像表現は樹下女神ヤクシーの図像を借用したと考えられている。林良一[1974: 103]、宮治昭[1996: 135]を参照。

さらに、*Śālabhañjikā* モティーフの例としても挙げられている。Roth[1986]、Sander[2006]を参照。

¹⁵⁰ 右脇出胎の記述については、上枝いづみ[2007: 67–69]により詳細に論じられている。

¹⁵¹ ガンダーラ地域から出土した誕生図の特徴であるブッダの右脇からの誕生や、インドラ及びブラフマー神の登場については、そのガンダーラ特有の誕生図の制作背景を明らかにした研究が上枝いづみ[2007]によって行われた。

Nālakasutta、*Theragāthā*、MN 123: *Acchariyabbhutadhammasutta*)と深い関係にあると言えよう。続く段階では、ガンダーラ地域と南インドとの誕生図を比較し、その地域的な表現方法の差異について Schlingloff[1981: 185, l. 22–187, l. 6]が指摘するように、ガンダーラの誕生図の特徴は北方の文献伝承(北伝)に従い、南インドは南方の文献伝承(南伝)と関係していると考えられる。

このような誕生図に関する研究状況を把握したうえで、カナガナハリ大塔から出土した誕生図がどのような内容を保持し、伝承していたのかを次に考察する。

2. 2

カナガナハリ大塔を飾る上段レリーフ石版 No. 15

筆者による現地調査(2009 年)の段階では、本章で取り挙げる Kanaganahalli 15 も散在していた断片を集めて復元するために地面に移されていた。移動して置かれている位置から推測すれば、本来の設置場所はストウパの南側基壇部分であったと考えられる(→資料 1 を参照)。ルクザニッツ博士の写真でも、南門正面の仏塔基壇部分に Kanaganahalli 15 の欄楯文様が施された下部分が設置されているのを確認することが出来る。誕生図は Kanaganahalli 15 の下段区画に位置する。以下にその特徴を挙げる(→ 図 16 を参照)。

- ① 仏母マーヤーが左手で樹を掴み、
- ② ブッダが仏母マーヤーの左脇から誕生する。
- ③ 四人の天人(四天王)がそのブッダを受け取る。
- ④ 産湯係の従者がブッダの存在する方向を向いて両手を合わせて合掌する。

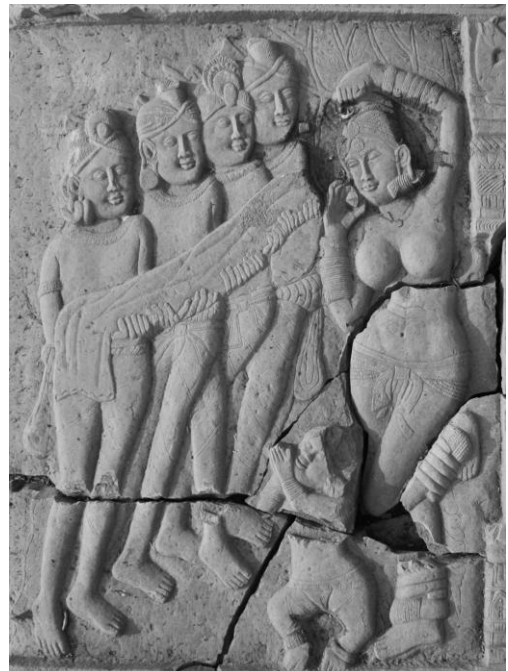


図 16: 誕生図
(Kanaganahalli15 下段区画)

Kanaganahalli 15 に描かれた誕生図は誕生するブッダを表現せずに、周囲の人物の表現によってそこに存在しているかのように描き、ブッダを直接表現しないという古代初期インド美術の特徴を踏襲している。仏母マーヤーは左手を大きく上に挙げて樹を掴み、左脇を露出することでその箇所からブッダが誕生したことを象徴的に表現している。右手は右耳のイヤリングを掴んでいるが、類似した表現を伝承するアマラーヴァティー大塔、ナーガールジュナコンダでは見られない表現である¹⁵²。誕生したブッダを受け取るために長い布を両手で持っている 4 人の男性は皆同じポーズをとって、視線は仏母マーヤーに向けられている。彼らは頭部にターバンを冠り、それぞれのターバンの装飾を描き分けることで区別される。カナガナハリ大塔の誕生図は四天王を誕生したブッダの受け取り役として描いていると判断することが出来る。続いて、④に指摘した産湯係の従者とは仏母マーヤーの前にとりわけ小さく描かれる人物のことを指し、合掌した両手と視線は長い布を一緒に持つ四天王に向けられている。

この小さい人物はボードガヤー(→ 図 15 を参照)、アマラーヴァティー大塔¹⁵³、ナーガールジュナコンダ(→ 図 17 を参照)の誕生図にも登場する。それらの図像には小さい人物とともに椅子や水差しが置かれていて、ブッダが誕生した後に産湯を行うための用意が整っていることが分かるので、誕生したブッダのために産湯を行う人物であると以前から指摘されてきた¹⁵⁴。さらに従者の役割はそれのみに留まらず、登場人物が仏母マーヤー、四天王、従者と最小限の人数によって構成されながらも、四天王と従者の視線に変化をつけることで、時間が異なった場面を同じ図の中に表現する、一図二景の表現形式をとっているのが分かる。彼らの視線の先には表現されていないブッダが存在しているのであり、四天王が見ているのは、仏母マーヤーの左脇腹から誕生しようとするブッダである。続いて従者は、四天王が持つ布の上に存在する仏母マーヤーから誕生したばかりのブッダを見上げて合掌している。以上が Kanaganahalli 15 の下区画に描かれた誕生図の表現であるが、誕生図の下枠の部分には、それに関連した彫刻付きの碑文が刻まれているので、続けて次節に検討する。

¹⁵² Kanganhalli 14/19 の下区画に描かれた 5 人の女性と 2 人の童子のうち、一番右にいる女性が同じく右手で右耳のイヤリングを掴んでいる動作をして描かれている。荒牧/Dalayan/中西[2011: 70]

¹⁵³ Knox[1992: Fig. 61]

¹⁵⁴ Schlingloff[2000: 51, 15-37]



図 17: ナーガールジュナコンダ フリーズ石板 (部分拡大)

2. 3

上段レリーフ石板 No. 15 に刻まれた彫刻付き碑文

59 枚の上段レリーフ石版にはその図像に対応した内容が記された碑文が刻まれている。バー
ルフットのように寄進者名と主題の両方が刻まれている上段レリーフ石版は数点確認でき
るのみで、殆どが主題のみを刻んだものであった¹⁵⁵。本章で取り上げる誕生図が描かれた
Kanaganahalli 15 の下枠部分には、6 文字のブラーフミー文字の配列によって *bhakavato j(ā)[ti]*
「世尊の誕生」と記されている(→ 図 18 を参照)¹⁵⁶。

碑文は残念ながら最後の文字部分に破損を被っているが、ここでも *bhagavat* という語が使用

¹⁵⁵ 第 1 章: 註 118 を参照。

¹⁵⁶ Zin[2011: 16–17]、Nakanishi and von Hinüber[2014: 92 (III, 2. 3. Pl. 32)]

されていることが確認出来る¹⁵⁷。ところが、Kanaganahalli 38/23 と Asoka 2 の碑文からは、*bodhisato kusarāyā*「菩薩クシャ王¹⁵⁸」と *[dh]isato somarāt[o]*「菩薩ソーマラータ¹⁵⁹」と記された「菩薩」の語が見られるので、カナガナハリ大塔の上段レリーフ石板を制作する段階では、「菩薩」の語が知られていたと言える。そして、「菩薩」が未だブッダに対してではなく、ジャータカの主人公を指していることには、注意を払うべきであろう¹⁶⁰。



図 18: 灌水図 七歩図 (Kanaganahalli15 部分拡大)

Kanaganahalli 15 の碑文にはさらに注目すべき箇所がある。文字の上には浅い浮彫りによって誕生図に続く 2 場面が象徴的に表現されているのである。左側から順に解釈すると、2 本の線が円形の器にめがけて弧を描き注がれているような表現が描かれており、その表現は誕生伝説直後のエピソードとして知られている産湯を入れる容器に注がれる天界からの冷水と温水を表現しているように見える。しかしこのような作例は他に例を見ないので、文献資料の記述に従って解釈を試みよう。初期經典に説かれる＜灌水＞は、MN 123: *Acchariyabbhutadhammasutta* に以下のように記されている。

¹⁵⁷ ブッダの誕生地であるルンビニーの地とされる地域のルンミンデーイ寺院近郊に建っているアショーカ王碑文が刻まれた小石柱法勅には、*hida bhagavaṃ jāte ti* と記されており、アショーカ王時代においても、ブッダに対して *bhagavat* を使用していたことが確認出来る。Hultzsch[1925: 164]、塚本啓祥[1976: 139]、Falk[2006: 177-180]を参照。

¹⁵⁸ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 80, 98]、Nakanishi and von Hinüber[2014: 82 (II. 7, 12. Pl. 28)]、Poonacha[2013: 425, Pl. CXIX, B]

¹⁵⁹ 荒牧/Dalayan/中西[2011: 92, 102]、Nakanishi and von Hinüber[2014: 81-82 (II. 7, 11. Pl. 28)]、Poonacha[2013: 410, Pl. CIV]

¹⁶⁰ 本章: 註 138 を参照。

yadā Ānanda, bodhisatto mātu kucchismā nikkhamati, dve udakassa dhārā antalikkhā pātubhavanti, ekā sītassa ekā uṇhassa, yena bodhisattassa udakakiccaṃ karonti mātu cāti.

Majjhimanikāya 123: *Acchariyabbhutadhammasutta* (MN iii, 123, 11–14 ≅ DN ii, 15, 3–6)

アーナンダよ。菩薩が母胎から出てきた時、2 つの水のシャワーが空中から現れた。1 つは冷たく、1 つは熱いものであり、それによって菩薩と母のために水仕事(産湯)が行われた。

MN 123: *Acchariyabbhutadhammasutta* に説かれる最初期の〈灌水〉は、空中から冷水と温水が同時に注がれるという描写であり、図像表現と合致している。この〈灌水〉を表現した円形の器に続けて、左から右方向に向かって7つの足跡が一直線に描かれ、それぞれに法輪が記されている。つまり7つの足跡を順に描くことによってブッダが7歩進んだことを示し、そして7歩目の足跡の傍に扠子と傘蓋を彫出すことによって、7歩目に立っているブッダの存在を暗示している。

それに対してナーガールジュナコンダの灌水図と七歩図は、四天王の持つ布の上に7歩の仏足を描き、七歩伝説を表現している(→ 図 17 を参照)¹⁶¹。ブッダが存在している場所の頭上には扠子と傘蓋が宙に浮かび、その方角へ向けて合掌する小さな女性が〈灌水〉を表す水瓶と共に描かれている。カナガナハリ大塔の図像に比べて、四天王が持つ布の上に仏足を描いたり、腰掛や水瓶を描くなど、誕生後のエピソード〈灌水〉〈七歩〉を一図にまとめて描く傾向が見られる。

〈灌水〉と〈七歩〉というブッダ誕生後のエピソードを両方伝承する諸文献¹⁶²を精査する

¹⁶¹ Rosen Stone[1994: Fig. 188, 210]

¹⁶² 灌水伝説と七歩伝説を伝える文献資料を収集整理し、5 グループ(I~V)に大別し以下に列挙する。

I. 初期經典

1. *Majjhimanikāya* 123: *Acchariyabbhutadhammasutta* [MN iii, 123, 10–25] = 『中阿含經』「未曾有法經」

〔(根本)説一切有部〕 [T. 1, No. 26, 470b28–c10]

2. *Dīghanikāya* 14: *Mahāpadānasuttanta* [DN ii, 15, 3–13] = *Mahāvadānasūtra* [MAV, 64–65]〔東トルキスタン有部〕 = 『長阿含經』「大本經」〔法藏部〕 [T. 1, No. 1, 4b28–c19]

II. 仏伝文学(1) Skt.

と、＜灌水＞→＜七歩＞の順序で語られる文献と、或いはその逆の順序で語られる文献と大きく2種に大別される。南方上座部所伝のニカーヤ MN 123: *Acchariyabbhutadhammasutta*、DN 14: *Mahāpadānasuttanta* と *Nidānakathā* に伝えられるエピソードのみが＜灌水＞→＜七歩＞の順序で語られるのに対して、それに対応する漢訳經典『中阿含經』『未曾有法經』と『長阿含經』『大本經』をも含めた全ての漢訳經典が＜七歩＞→＜灌水＞の順序で語られるのである¹⁶³。
Kanaganaḥalli 15の碑文と一緒に描かれた＜誕生＞後のエピソードは、ブッダの歩行を7つの足跡によって左から右方向に一直線に描いているので、左から右方向へと場面が展開していると判断出来る。つまり、2つのエピソードは＜灌水＞→＜七歩＞の順序で描かれており、それは指摘した南方上座部所伝のニカーヤに伝承される誕生後のエピソードと深い関係にあると言

-
1. *Buddhacarita* Aśvaghōṣa 著, ch. 1, vv. 14–16 [Bc, 2] = 『佛說佛所行讚』 [T. 4, No. 192, 1b9–16] = 『仏本行經』 [T. 4, No. 193, 59a7–15/a23–25]
 2. *Mahāvastu* [大衆部説出世部] [Mvu ii, 20, 18–21, 3] ≡ 『佛本行集經』 [T. 3, No. 190, 687a7–c1]
 3. *Lalitavistara* ch. 7 (Lv, 83, 20–85, 7) = 『佛說普曜經』 [T. 3, No. 186, 494a27–b2] = 『方廣大莊嚴經』 [T. 3, No. 187, 553a17–b4/554c16–22]
 4. *Śākyasiṃhajātaka* vv. 5–6 [Śsj, 152]

III. 仏伝文学(2) Jātaka 註釈文献

1. *Jātaka-atthavaṇṇanā*, *Nidānakathā* (Jā. i, 53, 10–19)

IV. 仏伝文学(3) 漢訳（インド側の資料を欠く）

1. 『修行本起經』 [T. 3, No. 184, 463c13–18]
2. 『佛說太子瑞應本起經』 [T. 3, No. 185, 473c2–6]
3. 『異出菩薩本起經』 [T. 3, No. 188, 618a18–21]
4. 『僧伽羅刹所集經』 [T. 4, No. 194, 122b17–18]
5. 『過去現在因果經』 [T. 3, No. 189, 625a24–b4]

V. (根本)説一切有部律 (破僧事)

1. *Saṅghabhedavastu* [Sbhv i, 45, 9–17] = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 [T. 24, No. 1450, 108a15–23] ≡ 『佛說衆許摩訶帝經』 [T. 3, No. 191, 939b18–25]

¹⁶³ サンスクリット語で現存する東トルキスタン有部所伝の *Mahāvādānasūtra* [MAV, 64–65] も＜七歩＞→＜灌水＞の順で語られる。

また *Lalitavistara* と『佛說普曜經』は＜灌水＞→＜七歩＞の順序で語られているが、七歩が一方向のみならず全方角であったり、神々の賛嘆など装飾的な表現が多く付加されているので、本稿では該当文献として扱わない。

えよう。

小結 2

– カナガナハリ大塔から出土した誕生図における文献と図像の伝承関係 –

カナガナハリ大塔から出土した誕生図の特徴を、以下のように整理することが出来る。
 Kanaganahalli 15 の下段区画には、図像の特徴からブッダの誕生伝説を図像化した誕生図が描かれている。続く碑文箇所は、灌水図と七歩図が描かれている。類似した表現を伝承するアマラーヴァティー大塔とナーガールジュナコンダでは四天王が持つ布の上に仏足を描いたり、腰掛や水瓶を描くなど、誕生後のエピソード〈灌水〉と〈七歩〉を一図にまとめて描く傾向が見られるのに対して、カナガナハリ大塔は、区画内の図像表現と碑文箇所の彫刻とを合わせると、〈誕生〉→〈ブッダを四天王が受け取る〉→〈灌水〉→〈七歩〉と、場面展開を順序立てて追うことが出来る。図像の様式からは、布の上に仏足を描かないことや、丸い容器に注がれる天界からの冷水と温水を象徴的に表現する図像によって、カナガナハリ大塔の誕生図はそれらより古い様式を保持していると考えられる¹⁶⁴。

文献伝承との比較からは、上記した場面展開を伝承する文献が、南方上座部所伝のニカーヤ MN 123: Acchariyabbhutammasutta、DN 14: Mahāpadānasuttanta と Nidānakathā の3つの文献のみであることが分かった。従ってカナガナハリ大塔の誕生図が南方上座部所伝のニカーヤに依拠した図像表現であると言える。

カナガナハリ大塔上段レリーフ石版は「菩薩」の語が使用し始められていた直後の図像表現を保存しているものの、この段階では Sn: Nālakasutta 第 683 詩節のようなブッダ自身が「菩薩」であるとは理解していない。その事実を考慮すれば、誕生図は「菩薩」の語が未だ現れていないパールフット及びアジャンター第 10 窟に描かれた誕生図よりも遅れた制作であつたであろう。そして、上述したブッダ誕生伝説の発達史や図像表現の解明を通して観察すると、カナガナハリ大塔の誕生図はアマラーヴァティー大塔やナーガールジュナコンダに描かれた

¹⁶⁴ カナガナハリ大塔では仏伝の場面を連続して描いた横石が数点出土している。横石の一場面には描かれた誕生図は、四天王の持つ布の上に仏足を表現したり、ナーガールジュナコンダの作例のように空中に傘蓋と仏子を描きレリーフ石版よりも発達した表現が見られる。

南インドで定着する誕生図より以前の図像表現であり、むしろ古代初期インド美術の最終段階における誕生図の作例として新たに位置付けることが出来よう。

第3章

上段レリーフ石版 No.08 と No.09/05 - 出城図と頭髮礼拝図 - *

第3章では、Kanaganahalli 08 と 09/05 に描かれたシッダールタ(便宜上、シッダールタと呼ぶ¹⁶⁵)の出家(以下、出家と略す)に関する図像表現を考察する。そのために、ブッダの一生涯を物語る仏伝文学として語られる以前の出家に関する記述を初期経典(阿含・ニカーヤ)中から拾い出して、出家について伝承する諸文献を精査することからはじめる¹⁶⁶。具体的な手続きとしては、初期

* 第3章は、密教図像学会で研究発表を行った後に『密教図像』第34号に掲載させて頂いた拙稿を修正し、加筆したものである。研究発表レジュメには榎本文雄先生より、拙稿には本庄良文先生より、有益なご指摘を頂戴したおかげで多くの箇所を改善することが出来た。ここに明記して篤く御礼申し上げます。

¹⁶⁵ 太子時代の名前は、以下の通り諸文献によって様々であるが、本稿では「シッダールタ」と便宜的に記すことにする。

- *Buddhacarita* 第2章 第17詩節では、*sarvārthasiddha* = 『佛所行讃』[T. 4, No. 192, 4b4]「悉達羅他」
- *Mahāvastu* [大衆部説出世部](Mvu ii, 26, 15) *sarvārthasiddha* ≡ 『佛本行集經』[T. 3, No. 190, 700a2-5]「今我童子、作何名也。我更思惟。其生之日、我一切利、自然而成。我時知己、便作名字、號悉達多太子」
- *Lalitavistara* ch. 7 (Lv, 96, 1) *sarvārthasiddha* = 『方廣大莊嚴經』[T. 3, No. 187, 555a29]「我當與子名薩婆悉達多」
- 『過去現在因果經』[T. 3, No. 189, 626b7-9]「太子生時、一切寶藏皆悉發出。所有諸瑞莫非吉祥。以此義故、當名太子爲薩婆悉達」
- 『修行本起經』[T. 3, No. 184, 463c25]「悉達」
- 『佛說太子瑞應本起經』[T. 3, No. 185, 474a3]「字名悉達」
- 『異出菩薩本起經』[T. 3, No. 188, 618a25]「名爲悉達」
- 『佛說衆許摩訶帝經』[T. 3, No. 191, 941b26-27]「今有淨飯王子名悉達多」

このような文献資料の状況に対して、パールフット(150 BCE)の碑文には、太子時代の名前が刻まれていない。ブッダ自身に対しては、*bhagavat* (B19, B22, B23 等) 及び *Sakamuni* < *śākyamuni* (B23) が使用されている。

¹⁶⁶ 初期経典を除く仏伝文学と諸部派の律におけるブッダの出家伝説(出家の決意～衣服交換・頭髮礼拝)は次の通り。5グループ(I～V)に大別し以下に挙げる。

経典中の韻文・散文資料から出家に関する表現を抽出してその背景を探り、それら初期経典の表現が仏伝文学中の出家場面へと組み込まれていく過程を分析する。出家の記述が、出家場面へと形成される過程に基づき、古代初期インド美術の仏伝図において出家を描いた場面がどのように表現され始めたのかを追究することで、必然的にカナガナハハリ大塔の上段レリーフ石版に描かれる出家場面の位置付けが見えてくると考えられよう。

I. 仏伝文学(1) Skt.

1. *Buddhacarita*, Aśvaghoṣa 著, ch. 5, v. 1–ch. 6, v. 68 (Bc, 45, 1–67, 11) = 『佛所行讃』 [T. 4, No. 192, 8b18–12b22] = 『佛本行経』 [T. 4, No. 193, 67b24–70b5] ≡ *Dīvyāvadāna*, No. 27 (Dīvy, 391, 20–27) = 『阿育王傳』 [T. 50, No. 2042, 103c13–18] = 『雜阿含経』 [T. 2, No. 99, 167a6–13] = 『阿育王経』 [T. 50, No. 2043, 137b7–14]
2. *Mahāvastu*〔大衆部説出世部〕(Mvu ii, 117, 15–118, 1/157, 19–166, 18) ≡ 『佛本行集経』 [T. 3, No. 190, 728b11–745a11]
3. *Lalitavistara* ch. 15 (Lv, 198, 1–237, 17) = 『佛説普曜経』 [T. 3, No. 186, 504c12–510a22] = 『方廣大莊嚴経』 [T. 3, No. 187, 572a29–578c1]
4. *Śākyasiṃhajātaka*, vv. 26–29 (Ed. Hahn. 156, 16–157, 24)

II. 仏伝文学(2) Jātaka 註釈文献

1. *Jātaka-atthavaṇṇanā*, Nidānakathā (Jā i, 61, 13–65, 29)

III. 仏伝文学(3) 漢訳（インド側の資料を欠く）

1. 『修行本起経』 [T. 3, No. 184, 467c5–469b4]
2. 『佛説太子瑞応本起経』 [T. 3, No. 185, 475b2–476b2]
3. 『異出菩薩本起経』 [T. 3, No. 188, 619a28–c25]
4. 『僧伽羅刹所集経』 [T. 4, No. 194, 122c18–29]
5. 『過去現在因果経』 [T. 3, No. 89, 632b21–634b12]
6. 『佛説衆許摩訶帝経』 [T. 3, No. 191, 946a16–947c8]

IV. 諸部派の律（受戒犍度部）

1. 『四分律』(法蔵部) [T. 22, No. 1428, 779c14–17]
2. 『彌沙塞部和醯五分律』(化地部) [T. 22, No. 1421, 102a10–b13]

V. (根本)説一切有部律（破僧事）

1. *Saṅghabhedavastu* (Sbhv. i, 84, 1–93, 16) = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 [T. 24, No. 1450, 115c22–118b6]

3. 1

初期經典における出家に関する 2 つの表現: (abhi-)niṣ-√kram と pra-√vraj

古ウパニシャッド文献(*Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad*: 紀元前 6 世紀頃)では、家を出て無所有の状態となって遊行生活に入る際、すなわち「[世俗生活から] 出て行く」行為が、動詞 pra-vraja-^{ti} < pra-√vraj を用いて表現されている¹⁶⁷。同様にブッダ自身も古代インドの慣習に従って遊行生活に入り、沙門(Skt. *śramaṇa*-, Pā. *samana*-)となったことは、同じ表現を引き継ぐ初期經典中の韻文資料に記された出家に関する記述によって知ることが出来る。*Suttanipāta* の古層に位置する Pabbajāsutta では、出家したシッダールタとビンビサーラ王との対話によって出家と在家の違いが語られており、冒頭部分の第 406 詩節において、ブッダがどのようにして出家に至ったのかが告白されている¹⁶⁸。以下に該当箇所を提示する。

sambādho 'yaṃ gharāvāso rajassāyatanam iti
abbhokāso ca pabbajjā iti disvāna pabbaji.

Suttanipāta: Pabbajāsutta, v. 406¹⁶⁹

¹⁶⁷

maitreyīti hovāca yājñavalkyaḥ | pravrajīṣyan vā are 'ham asmāt sthānād asmi |
hanta te 'nayā katyāyanyāntaṃ karavāṇīti ||

Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad (BĀU IV. 5, 2 (~*Śatapatha-Brāhmaṇa* [Mādhyandina] XIV. 7, 3, 2))

「マイトレーイーよ」とヤージュニヤヴァルキヤはいった。「ああ、私は出家者となって、この住まいから出て行きたいと思っている。そこで、おまえのために、ここにいるカートヤーヤニーとの〔財産〕分配を行いたい」と。

バラモン学者であるヤージュニヤヴァルキヤが 2 人の妻に財産を渡して家を出ていく様子が記されている。阪本(後藤)純子[2014: 348, 註 5]参照。

¹⁶⁸ このような古ウパニシャッド文献を踏襲する出家の表現は、*Suttanipāta* の古層に記されるブッダのもとで出家する人々にも用いられる。Sn: *Āmagandhasutta*, v. 252, Sn: *Selasutta* v. 564 (= Th v. 834), v. 565 (= Th v. 835)。

Paramatthajotikā II では、アーナンダがブッダの出家について語ったとする (Pj II, 381, 1–7)。

¹⁶⁹ Sn, 72, 5–6。

この詩節は *Saṅghabhedavastu* に Skt. の対応箇所が見出せる (Sbhv i, 94, 16–17)。
Saṅghabhedavastu 中に挿入された Sn: Pabbajāsutta の箇所 (Sbhv i, 94–96)は、シッダールタの出家場

この在家の生活は妨げであり、塵の積もる場所である。

しかし、出家は広々とした空間である、と気がついて〔ブッダは〕出家された。

しかしながらこの詩節は、ブッダが出家するに至った心境の告白であって、出家時の具体的な情景を伝えたものではない。より踏み込んだ出家に関する記述は *Suttanipāta* 第 5 章 *Pārāyanavagga* の序文に見ることが出来る。この序文では、苦悩しているバーヴァリに、ある神がブッダの許へ行って教えを乞うように勧める¹⁷⁰。

purā kapilavatthumhā nikkhanto lokanāyako

apacco okkākarājassa sakyaputto pabhaṃkaro.

Suttanipāta: *Pārāyanavagga*, v. 991¹⁷¹

むかし、カピラヴァツツから出て行った¹⁷²世間の指導者(ブッダ)が、

オッカーカ(甘蔗)王の末裔であって、シャカ族の子であり、光を放っておられます。

面では無く、シッダータが出家者となった後にラージャグリハ(Rājagṛha)でビンビサーラ王と出会う場面に挿入される。*Saṅghabhedavastu* は本来仏伝を意図して説いていない Sn: *Pabbajāsutta* を仏伝として再解釈して取り込んでいたことが分かる。漢訳の相当箇所は次の通り。

『根本説一切有部毘奈耶破僧事』[T. 24, No. 1450, 118b25–26]

「在家諸苦逼 糞穢來煎迫 出家味禪悅 智者樂出家」

¹⁷⁰ Sn: *Pārāyanavagga* の序文に語られるバーヴァリの弟子達がブッダを訪問する話は、Sn: *Pārāyanavagga* の序文のみに留まらず、*Buddhacarita* の初転法輪から涅槃までの間の教化活動に関するエピソードの一つとして *Buddhacarita* 第 21 章第 7 詩節に取り上げられている。

それに対応する図像も十六人のバラモンを訪門図としてガンダーラから出土している。

栗田功[2003: Fig. 438, 441, 442, 443, 446, 447] 参照。

¹⁷¹ Sn, 192, 1–2.

¹⁷² *Paramatthajotikā* II では「むかし、とは 29 歳の若さの時に〔である〕」と、ブッダの出家時の年齢を挙げている。

purā ti ekūnatimsavassavayakāle

Paramatthajotikā II (Pj II, 582, 26)

続けて、ある神の勧めを受けたバーヴァリがブッダの許へ遣わせる弟子達に、そのブッダの特徴を語る。

*sace ca so **pabbajati agārā anagāriyam**,*

vivattacchaddo sambuddho arahā bhavati anuttaro.

Suttanipāta: Pārāyanavagga, v. 1003¹⁷³

またもしも、その方(ブッダ)が家から家無き〔生活〕へと出家するなら、

〔煩悩の〕覆いを取り除き、完全に覚った者、尊敬に値する人(阿羅漢)、無上の人となります。

Suttanipāta 第 5 章 Pārāyanavagga の序文から、出家に関係する 2 つの詩節を取り上げた。第 991 詩節では出家前の具体的な行動が、動詞 *ni-kkhama-ti* (Skt. *niṣ-krāma-ti* < *niṣ-√kram*) 「(abl. : ～から) 出て行く¹⁷⁴」に由来する過去分詞 *nikkhanto* で表わされている。この表現は、「初期仏教徒が托鉢を終えて都市から出て行く」際の表現として、Sn: Pabbajāsutta 第 416 詩節にも使用されている¹⁷⁵。そのことは、Sn: Pārāyanavagga の記述が「[自分の住む場所から] 出て行く」ことを出家の前段階の行動として表現していたことを明示している。仏弟子マーナヴァが唱えたとされる *Theragāthā* 第 73 詩節では、この 2 つの表現を合わせて出家時の情景が伝えられている¹⁷⁶。

¹⁷³ Sn, 193, 15–17.

¹⁷⁴ PW s.v. *niṣ-√kram hinausschreiten, ausgehen* (abl. : *ausnahmsweise gen.*), *von Hause gehen* 参照。

¹⁷⁵ Sn, Th, Thī の *niṣ-√kram + abl.* による用例は次の通り。

- Sn v. 337, v. 359 (abl. : *gharā*), Sn v. 416 (abl. : *nagarā*), Sn v. 991 (abl. : *purā Kapilavatthumhā*)
- Th v. 223, v. 313 (abl. : *vihārato*), Th v. 543 (abl. : *tato*), Th v. 691 (abl. : *kāmehi*), Th v. 1241 = Thī v. 48, v. 108 (abl. : *divāvihārā*)
- Thī v. 146 (abl. : *gehato*), Thī v. 335 (abl. : *Bārāṇasito*)

¹⁷⁶ 同じく仏弟子ウパーリの出家について語る vv. 249–251 (Th, 31, 14–21) にも、*abhi-niṣ-√kram* と *pra-√vraj* の両方を用いて出家の際の行動を二段階で表現している箇所が見られる。

*jiṇṇaṇ ca disvā dukkhitaṇ ca byādhitaṇ,
mataṇ ca disvā gatam āyusaṃkhayaṇ.
tato ahaṇ nikkhamitūna pabbajim,
pahāya kāmāni manoramānīti.*

Theragāthā: Māṇava Thera, v. 73¹⁷⁷

老いた者を見て、病み苦しんだ者を見て、死者であり寿命の滅尽に至った者を見て、
それ故、私は〔家から〕出て行って、意が楽しむ諸欲を捨て去って、出家した、と。

このような韻文資料に散見される *niṣ-√kram* を用いた出家前の行動と、*pra-√vraj* を用いた出家の表現は、第4節(3.4)に論じる最初期の出家の図像表現を考察する際に重要な要点となる。

それでは *pra-√vraj* によって表現された出家とは具体的にどのような行為であったのだろうか、散文資料の段階になると上記した Sn: Pārāyanavagga 第1003詩節の「家から家無き〔生活〕へと出家する (*pabbajati agārā anagāriyaṇ*)」ことをより詳細に語った、次のような定型表現によって説明されている

¹⁷⁸。

*akāmakānaṇ mātāpitunnaṇ assumukhānaṇ rudantānaṇ, kesamassum ohāretvā kāsāyāni
vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṇ pabbajim.*

Majjhimanikāya 26: Ariyapariyesanasutta (MN i, 163, 29–31)¹⁷⁹

両親が望まず、涙に顔を濡らし、泣いているにもかかわらず、私は髪と鬚を取り除いて¹⁸⁰、赤褐色の衣を纏い、家から家無き〔生活〕へと出家しました。

¹⁷⁷ Th, 11, 17–20.

¹⁷⁸ 「家から家無き〔生活〕へと出家する *pabbajati agārā anagāriyaṇ*」という表現は Sn: dhammacaryasutta, v. 274に見られる。

¹⁷⁹ 漢訳の相当箇所は次の通り。

『中阿含経』(204)「羅摩経」[T. 1, No. 26, 776b3–5]

「我於爾時父母啼哭諸親不樂、我剃除鬚髮著袈裟衣、至信捨家無家學道」

¹⁸⁰ 阪本(後藤)純子[2014: 348, n. 7]を参照。

阪本(後藤)純子[1993][2014]は、髪と鬚の除去について古代インド語文献から順に精査し、初期仏教における出家に伴う行為、すなわち仏教徒として生活する為の外見の変化を詳細に分析したうえでこの定型表現を提示している¹⁸¹。そして、出家に際して上記した行為を行う背景には、世俗生活者として死に、聖なる宗教者として生まれ変わるという古来の観念に基づいていることが指摘されている¹⁸²。また、この定型表現は、シッダールタのみならず過去仏や仏弟子が出家する際にも使用されており、出家に対する理解が初期仏教徒の間で共通していたことが分かる¹⁸³。

以上のことから初期經典中に説かれる出家に関する表現は、大きく二つに特徴付けられる。一つは「シッダールタが世俗生活を営んでいた場所(カピラヴァツツの都)から出て行くこと」を出家直前の行動として表現されること。そしてもう一つは「髪と鬚を取り除き、赤褐色の衣を纏うこと」が出家者となるために「出家すること」の具体的な内容としてすでに記されていることである。仏伝制作の最初の試みであったと考えられる DN 14: Mahāpadānasuttanta の第 4 章では、浄居天の神々がブッダに対して過去仏ヴィパッシンの事績を項目に分けて語る箇所があり、そこでは「出て行くこと *abhinikkhamana-*」と「出家 *pabbajjā-*」とは別の項目として順に挙げられていることも、そのことを裏付けている¹⁸⁴。

¹⁸¹ MN 95: Caṅkīśutta (MN ii, 166, 29–32) = SHT I. 165, 177, III. 883, IV.165, V. 1025 = Schøyen Collection [大衆部説出世部: 紀元後 4 世紀頃] MS 2376 = 対応漢訳無し。
DN 4: Soṇadaṇḍasutta (DN i, 115, 18–20) = SHT VI. 1251, 1352 ≡ 『長阿含經』『種徳經』[法蔵部][T. 1, No. 1, 95b18–25]

出家後、アーラーラ・カーラーマ仙人を訪問する場面と直結する文献資料

- MN 26: Ariyapariyesanasutta (MN i, 163, 29–31) (Sn 406 との融合型) = 『中阿含經』(204)「羅摩經」[T. 1, No. 26, 776b3–5]
- MN 36: Mahāsaccakasutta (MN i, 246, 20–247, 5) (Sn 406 との融合型) = SHT III. 931 = 対応漢訳無し。
- MN 85: Bodhirājakumārasutta (MN ii, 93, 19–21) = SHT I. 33, 165, 180, III. 997, IV. 33, 165, 180, VI. 1361, 1373a = 『彌沙塞部和醯五分律』(化地部) [T. 22, No. 1421, 104a11–105a25]
- MN 100: Saṅgāravasutta (MN ii, 211, 28–212, 4) (Sn 406 との融合型) = 対応漢訳無し。

¹⁸² 阪本(後藤)純子[2014: 337, 28–30]参照。

¹⁸³ 仏弟子(*ariyasāvaka-*)の出家 Itivuttaka 82 (It, 73, 6–8)、優婆塞ソーナ・コーティカンナの出家 Udāna 5, 6 (Ud, 57, 11–12)、過去仏ヴィパッシンの出家 DN 14: Mahāpadānasuttanta (DN ii, 29, 23–25)等が挙げられる。

¹⁸⁴ 中村元[1969: 80]参照。

また、*Buddhacarita* には、出家するためにまずシッダールタに自分の家から出て行きたい気持ちが起こることを、*niṣ-√kram* を用いて表現されている。

iti tasya tadantaram viditvā niśi niścikramiṣā samudbabhūva |

Vipassissa mārīsa bhagavato arahato sammā-sambuddhassa evaṃ abhinikkhamanaṃ ahoṣi, evaṃ pabbajjā, evaṃ padhānaṃ, evaṃ abhisambodhi, evaṃ dhammacakka-pavattanaṃ.

Dīghanikāya 14: Mahāpadānasuttanta (DN ii, 51, 14–17)

尊い方よ、阿羅漢であり、完全に覚った人であるヴィパッシン世尊の出発(出ていくこと)は、このようでありました。出家はこのようで〔ありました〕。精勤はこのようで〔ありました〕。覚りはこのようで〔ありました〕。転法輪はこのようで〔ありました〕。

上記した DN 14: Mahāpadānasuttanta の該当箇所でも「出て行くこと *abhinikkhamana*-」は「出家 *pabbajjā*-」の直前に置かれていることが確認出来る。

3. 2

仏伝文学に物語られる出城伝説と出家伝説

第 1 節(3. 1)で扱った出家に関する初期經典の様々な記述は、ブッダの生涯を説くことを本来の目的としていない。ところが、仏伝文学中の出家場面では、初期經典の出家に関する個々の記述を拾い出して、出家場面として再構成するという興味深い現象をみることが出来る¹⁸⁵。*Mahāvastu* では出家場面を 2 話収録している。1 話目(Mvu ii, 115, 6–133, 13)は、舍衛城を舞台にしてブッダが弟子達に自らの人生を語る形式で物語られる。

その内容は、①贅沢な宮廷生活→ ②出家→ ③2 人の師を訪問→ ④3 つの比喻→ ⑤苦行(断食)→ ⑥スジャーターの乳粥供養→ ⑦成道、の順に説かれている。

該当エピソードは②にあたり、*Suttanipāta* 第 406 詩節と先に述べた定型表現とを巧みにつなぎ合わ

avagamyā manas tato 'sya devair bhavanadvāram apāvṛtaṃ babhūva ||

Buddhacarita, ch. 5, v. 66 (Bc, 54, 9–10)

このように、彼は、その隔たりを知って、夜のうちに出去行きたいという願いが沸き起こった。そこで、神々は彼の意思を察して、宮殿の門が開かれたのです。

= 『佛所行讚』 [T. 4, No. 192, 10a19–21]

「我今已覺了 決定出無疑 爾時淨居天 來下爲開門」

¹⁸⁵ *Saṅghabhedavastu* に挿入された Sn: Pabbajāsutta の該当箇所については本章: 註 169 を参照。

せて以下のように語られている。

*sambādho punar ayaṃ gṛhavāso abhyavakāśaṃ pravrajyā tu | na śakyaṃ agāraṃ
adhyāvasatā ekāntasaṃlikhitaṃ ekāntānavadyaṃ paṇḍitaṃ paryavadātāṃ
brahmacāryaṃ caritaṃ | yaṃ nūnāhaṃ agārasmānagāriyaṃ pravrajeyaṃ || sa khalv ahaṃ
bhikṣavaḥ akāmakānāṃ mātāpitrīṇāṃ aśrukaṇṭhānāṃ rudanmukhāṇāṃ alūhaṃ
gṛhavāsaṃ hastoktaṃ cakravartirājyaṃ apahāya agārasmānagāriyaṃ pravrajito punas
samāno yena vaiśālī nagarī tad avasāri tad anuprāpto ||*

Mahāvastu (Mvu ii, 117, 15–118, 1)

この在家の生活は妨げがあるが、出家は広々とした空間である。家に住みながら、完全に制御され¹⁸⁶、全く申し分無く、完全に清められ、完璧に純白な梵行を実践することは、不可能である。さあ、私は家から家無き〔生活〕へと出家しよう。実に比丘達よ。両親が望まず、涙で喉を詰まらせて泣き顔をしているにもかかわらず、潤いのある在家の生活[と]、手中に[収める]と言われた転輪王の位を放棄して、家から家無き〔生活〕へと出家した私は、次に、ヴァイシャリー市があるところに下り、そこに到着した¹⁸⁷。

1 話目に対して 2 話目(Mvu ii, 140, 2–166, 10)は、上記したエピソードの一節が語られた後に、シッダールタがシュッドーダナ王に出家することを告げるところから始まり、シッダールタの出家に関わる個々の場面が 1 話目よりも詳細に語られている。

その順番は、①贅沢な宮廷生活→ ②四門出遊→ ③女性の醜態による出家の決意→ ④神々による出家の勧告→ ⑤出城→ ⑥帝釈による頭髮礼拝(以下、頭髮礼拝と略す)→ ⑦御者と愛馬の帰城、を語って締め括られる。

⑥の箇所は、出家の際に頭髮の鬘があることに疑問を持つシッダールタが、出家するために自ら刀で自身の鬘を切ったという出家に因んだエピソードである。該当箇所を示すと次のとおりである¹⁸⁸。

¹⁸⁶ 平岡聡[2010: 518, 註 324]を参照。BHSD s.v. *samlikhita*-

¹⁸⁷ 平岡聡[2010: 350]を参照。

¹⁸⁸ <帝釈による頭髮礼拝>のエピソードを伝承する文献資料(仏伝文学・諸部派の律)は次の通り。<帝釈による頭髮礼拝>を記す文献資料については、小野玄妙[1916: 116–117]に挙げられた対応経が詳

*bodhisatvasya etad abhūsi | kathaṃ pravrajyā ca cūḍā ca || bodhisatvena asipaṭṭena cūḍā
chinnā sā ca cūḍā śakreṇa devānām indreṇa praticchitā trāyastriṃśadbhavane pūjyati
cūḍāmahaṃ ca vartati ||*

Mahāvastu (Mvu ii, 165, 18–166, 1)

菩薩は次のように思った。どうして出家と〔頭髮の〕髻とが両立しえよう。菩薩によって刀で〔頭髮の〕髻が切り落とされた。そしてその〔頭髮の〕髻は神々の首長であるシャクラによって受け取られ、三十三天の住居で祀られている。そして〔頭髮の〕髻の祭りが行われている

189。

このように、第1節(3. 1)で考察した初期經典中の出家に関する2つの特徴は、⑤出城と、出家場面に相当する⑥頭髮礼拝として、*Mahāvastu* に物語られていることが分かる。

しく、参照して以下に整理している。

- *Buddhacarita*, ch. 6, vv. 57–58 / ch. 8, v. 48 (Bc, 65, 15–66, 2 / 85, 13–16) = 『佛所行讃』 [T. 4, No. 192, 12b18–23] = 『佛本行經』 [T. 4, No. 193, 69a12–13] ≡ 『阿育王傳』 [T. 50, No. 2042, 103c16–17] = 『雜阿含經』 [T. 2, No. 99, 167a9–10]
- *Lalitavistara*, ch. 15 (Lv, 224, 15–19) = 『佛說普曜經』 [T. 3, No. 186, 509b25–28] = 『方廣大莊嚴經』 [T. 3, No. 187, 576c3–8]
- *Mahāvastu* (Mvu ii, 165, 18–166, 2) ≡ 『佛本行集經』 [T. 3, No. 190, 737c3–23]
- *Śākyasiṃhajātaka*, v. 27 (Śsj, 157, 6–9)
- *Saṅghabhedavastu* (Sbhv i, 91, 2–7) = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 [T. 24, No. 1450, 117b28–118b5]
- 『修行本起經』 [T. 3, No. 184, 468b4–b5]
- 『僧伽羅刹所集經』 [T. 4, No. 194, 122c26–27]
- 『過去現在因果經』 [T. 3, No. 189, 634a14–17]
- 『佛説衆許摩訶帝經』 [T. 3, No. 191, 947a24–28]
- 『彌沙塞部和醯五分律』 (化地部) [T. 22, No. 1421, 102b9–b13]

¹⁸⁹ 阪本(後藤)純子[2014: 341]を参照。阪本(後藤)純子氏は、出家者になるための行為を指す髪と鬚の除去が、仏伝文学に語られるようになるとブツダ観の変遷に伴って、髪そのものの除去ではなく髻であったり、除去する頭髮の長さが 2aṅgula に指定されることをすでに指摘している。特に頭髮礼拝伝説に注目し、文献を比較検討したうえで、ガンダーラやマトゥラーの仏像の髪表現に対する解釈も合わせて検討している。

それに対して *Buddhacarita* (Kuşāṇa: the 1th–2nd century CE) では、その第 5 章を「以上、ブッダチャリタという偉大な詩における Abhiniṣkramaṇa と名付けられる第 5 章であった *iti buddhacarite mahākāvyē 'bhinīṣkramaṇo nāma pañcamah sargaḥ* (Bc, 58, 7)」という一文で締め括って、シッダールタがカピラヴァツツの都から出て行ったところまでが一つの章として区切られている¹⁹⁰。それはつまり、初期經典に記される出家直前の「[自分の住む場所から] 出て行く」行動に基づいて発達した＜出城伝説＞が Abhiniṣkramaṇa という章題のもとに創作されたことを示している¹⁹¹。他方、*Mahāvastu* 二話目の⑥頭髮礼拝に対応する出家場面は、続く *Buddhacarita* 第 6 章第 57–58 詩節に記されている¹⁹²。そして第 8 章には、＜出城＞ (Bc, ch. 8, vv. 45–47) と、＜頭髮礼拝＞及び＜衣服交換＞ (Bc, ch. 8, v. 48) が神々の仕業であったことを御者から聞き、シッダールタが出家したことを知って悲しむ宮中の女性達が描写されている¹⁹³。従って、第 1 節(3. 1)で考察した初期經典に説かれる出家に関する 2 つの表現は、いずれも神々を登場させてより文学的に発展させた、＜出城伝説＞と＜出家伝説＞として仏伝文学中に収められたと言えよう。

次節では、＜頭髮礼拝＞によって物語られる出家伝説に対応する古代初期インド美術の作例を通

¹⁹⁰ 『佛所行讃』では「出城品第五」に対応する。

¹⁹¹ *Lalitavistara* でも第 15 章の章題名として Abhiniṣkramaṇa が用いられている。*Lalitavistara*, ch. 15 (Lv, 237, 17): *iti śrīlālitavistare 'bhinīṣkramaṇaparivarto nāma pañcadaśamo 'dhyāyāḥ* 『佛説普曜經』では「出家品第十二」、『方廣大莊嚴經』では「出家品第十五」に対応する。但し、個々の仏伝文学によって Abhiniṣkramaṇa 章としてまとめられる仏伝場面の範囲は一律でない。

また、藏訳 *Abhiniṣkramaṇasūtra* の内容は、出城伝説のみに留まらず、兜率天上の菩薩から初転法輪を経てヤサ(Yāsa)の出家などの仏弟子の出家までが記されている。このように、Abhiniṣkramaṇa が 1 つの章題名から經典名へと拡大解釈されている。松田祐子[1990: 15–25]を参照。

¹⁹² 第 6 章の章題は Candakanivartana である。

iti buddhacarite mahākāvyē chandakanivartano nāma ṣaṣṭhaḥ sargaḥ
Buddhacarita, ch. 6 (Bc, 67, 11)

以上、ブッダチャリタという偉大な詩における Chandakanivartana(チャンダカの帰還)と名付けられる第 5 章であった。

『佛所行讃』では「車匿還品第六」に対応する。

¹⁹³ *Buddhacarita*, ch. 8, vv. 45–50 [Bc, 85, 1–86, 2]

= 『佛所行讃』 [T. 4, No. 192, 14b20–25]

「車匿抑悲心 而答衆人言 我眷戀追逐 不捨於王子 王子捐棄我 并捨俗威儀 剃頭被法服 遂入苦行林 衆人聞出家 驚起奇特想 嗚咽而啼泣 涕淚交流下」

して、最初期の出家に関する図像表現を考察する。

3.3

古代初期インド美術における頭髮礼拝図

周知のように古代初期インド美術の段階では、直接ブッダ自身を描写することが無いので、初期経典にみられるようなシッダールタの出家した姿を見出すことは出来ない¹⁹⁴。その点を踏まえて古代初期インド美術を見直すと、パールフット、サーンチー第 1 塔、カナガナハハリ大塔、アマラーヴァティー大塔、ナーガールジュナコンダを含むほぼ全てのインド内陸部の仏教遺跡には、シッダールタの出家に関わる図像として出城図のみならず頭髮礼拝図が例外なく描かれている。この図像は、前節で確認した「シッダールタが出家の際に取り除いた〔頭髮の〕髻(Skt. *cūḍā*-, Pā. *cūḷā*-)¹⁹⁵を帝釈が受け取り、三十三天に持ち帰った〔後に祭りを行った〕」という伝説を描写した図像で、これまで詳細な論究も無くあまり注目されてこなかった¹⁹⁶。近年では、古代初期インド美術からガンダーラ地域に現存する天界の聖遺物としてのターバン(髻を含む)と仏鉢の作例を、美術史学の視点から考察した Zin[2011b]による論究が挙げられる。Zin[2011b]が取り上げた天界におけるターバンを描いた図像と合わせて「頭髮礼拝」図を整理すると、以下の図表が示すように、紀元前 2 世紀頃から紀元後 2-3 世紀にかけてのインド内陸部では、非常によく知られていた伝説であったことが窺える(→ 表 4 を参照)¹⁹⁷。

¹⁹⁴ シッダールタが出城した後に自らの刀で髻を切る姿は、剃髮図としてガンダーラ地域に確認される。栗田功[2003: Fig. 616, 617]を参照。

サールナート出土(Gupta: the 5th century CE) の仏伝の諸場面をまとめた作例にも存在する。肥塚隆[1979: 188, fig. 80]を参照。

ガンダーラ地域の剃髮図に関しては、宮治昭先生、小谷仲男先生にご教示を賜わった。感謝申し上げます。

¹⁹⁵ EWA s.v. *cūḍā*- f. *Scheitelhaare*. 頭髮の頭頂部(髻)を指す。

¹⁹⁶ 古代初期インド美術にみられる舞楽図としての側面から頭髮礼拝図について言及した石黒淳[1984]の論究が挙げられる。この論考の存在については、筆者が研究発表させて頂いた 2014 年度中央アジア科学研究会(2014 年 11 月 20 日(木)、会場: 龍谷大学大宮学舎西翼 2F 大会議室)の際に、入澤崇先生からご教示を賜わった。ここに明記して、感謝申し上げます。

¹⁹⁷ アマラーヴァティー大塔から出土した頭髮礼拝図の図像整理には、島田明[2012]を参照した。

表 4. 頭髮礼拝図: インド内陸部の主な作例

出土地	所在(現所在地)	年代	出典
Bhārhut → 図 19	西入口 屈曲欄楯 (P 3: Ajātaśatru pillar)	Śuṅga: 150 BCE	Coom1956. Fig. 32. Cunn. Pl. 16.
Sāñcī → 図 21	第 1 塔: 南門西柱側面第 3 区画	Sātavāhana: the early 1th century CE	MF. Pl.18b.
Kanaganahalli → 図 23	上段レリーフ石版 No. 09/05	Sātavāhana: the early 2nd century CE	ADN 科研. p. 67. MASI106. Pl. LXXXIX. B.
Kanaganahalli → 図 25	上段レリーフ石版 No. 32	Sātavāhana: the early 2nd century CE	ADN 科研. p. 78. MASI106. Pl. CXIV. A.
Amarāvati	ロンドン、大英博物館: BM. 46.	Sātavāhana: the 2nd century CE	Knox. Fig. 5.
Mathurā	マトゥラー博物館: 56. 4238.	Kuṣāṇa: the 1th century CE	マトゥラー博物館 現地 確認
Mathurā ¹⁹⁸ → 図 26	マトゥラー博物館: 39. 2868.	Kuṣāṇa: the 1th century CE	肥塚 1975. 図 17.
Mathurā ¹⁹⁹	マトゥラー博物館: 77. 26.	Kuṣāṇa: the 1th century CE	Sharma. Fig. 53.
Mathurā	ニューデリー国立博物館: Acc. No. I. 1.	Kuṣāṇa: the 2nd century CE	Quintanilla. Fig. 287.
Kanaganahalli → 図 24	北門アーヤカ基壇 仏伝フリーズ	Sātavāhana: the 3rd century CE	MASI106. Pl. CXXII. G.
Kanaganahalli	東門アーヤカ基壇 仏伝フリーズ	Sātavāhana: the 3rd century CE	MASI106. Pl. CXXIII. E.
Amarāvati	ロンドン、大英博物館: BM. 7.	Sātavāhana: the 3rd century CE	Knox. Fig. 11, 49, 51, 55, 63, 69, 71, 73–76.
Phanigiri	ハイデラバード考古博物館	Sātavāhana: the 3rd century CE	Zin[2011b] fig. 10.
Nāgārjunakoṇḍa	ナーガールジュナコンダ考 古博物館	Ikṣvāku: the late 3rd century CE	Rosen Stone. Fig. 225.

¹⁹⁸ 従三十三天降下説話を描いた無仏像の作例。¹⁹⁹ 本章: 註 198 に同じ。



図 19: パールフット 西門屈曲欄楯
Ajatasatru Pillar (P3)



図 20: パールフット 西門屈曲欄楯
Ajatasatru Pillar (P3) (部分拡大)

最も古い伝承が保存されるパールフットの頭髮礼拝図は、Lüders[1963: 93-94]によって碑文の解読と図像の解明が行われている(→ 図 19 を参照)。この図像は碑文の解読から三十三天にあるスダルマー堂 (Skt. *Sudharmā*-, Pā. *Sudhamma-sabhā*-)での出来事を表していることが確認出来る²⁰⁰。

このドーム型の宮殿の内部には台座が置かれており、その上の器にターバンによって結われた〔頭髮の〕髻が載せられている。ドームに刻まれた 2 行目の碑文に「世尊の髻の祭り *Bhagavato chūḍāmaha* (B21)」と記されていることで、神々が〔頭髮の〕髻を三十三天に持ち帰った後に、*Cūḍāmaha* (髻の祭り Skt. *cūḍāmaha*-)を開催したという

伝説が描かれていることが分かる。

この安置されている〔頭髮の〕髻を拡大すると生え際の髪の毛も描き込まれており、シッダールタのターバンのみならず、頭髮がそのまま切り取られた状態で表わされているのが認められる(→ 図 20 を参照)。

サーンチー第 1 塔の南門西柱側面第 3 場面に描かれた頭髮礼拝図も同様に髻の部分のみならず、生え際の髪の毛も合わせて描かれている(→ 図 21 を参照)。右側には数人の男性が合掌しながら立っている。左側には、大太鼓、小太鼓を持って演奏している人物や、踊っている人物も看取される。パールフットとの類似点から、この図

²⁰⁰ Lüders[1963: 93]を参照。ドームに刻まれた碑文の 1 行目には「スダンマー天の集会所」(*Sudhammā devasabhā* (B21))と記されている。Nidānakathā では〔頭髮の〕髻が三十三天に「〔頭髮の〕髻と宝珠のチャイティヤ」と名付けられて安置されたと記される。



図 21: サーンチー第1塔 南門西柱側面第3区画

像には、三十三天での「髻の祭り Cūḍāmaha」が描かれていると解釈出来る。

なお、この生え際の髪の毛はカナガナハツリ大塔から出土した頭髮礼拝図にも描かれているので、次節に検討する。そして下の段では4人の女性が踊り、右側には大太鼓、小太鼓、ハープを持って演奏をしている神々が描かれている。

杉本卓洲[1984][1977]による「祭り Maha」についての考察によると、Maha (Skt. *maha-* < *makha-*) は、もともと大勢の民衆が集まり、歌舞をなして饗宴を楽しむ祭典であったとされる。三十三天における「髻の祭り Cūḍāmaha」には、このような Maha を行う神々の姿が描写されていることが分かる。この伝説に関する文献資料は、初期經典中には記述

が無く、サンスクリット語で伝承される *Buddhacarita*、*Mahāvastu*、*Lalitavistara* 等の仏伝文学中に見出される²⁰¹。他方、ジャイナ經典の古層に位置する *Āyāraṅga* に記されるマハーヴィーラ (Mahāvīra) 伝にも同様の伝説が語られていることから、仏教・ジャイナ教に遡る共通の伝承として頭髮礼拝伝説が極めて早い段階から語られていたとも考えられる²⁰²。従ってパールフット

²⁰¹ 本章: 註 188 を参照。

Therīgāthā v. 514 では Sumedhā 尼が出家する際に自分の髪を地上に投げ捨てた (*kese 'va chaṃaṃ chupi sumedhā*: Thī, 173, 18) という記述がある。

²⁰² *Āyāraṅga* に記される頭髮礼拝伝説については、阪本(後藤)純子[1993: 88, n. 26] [2014: 341–342]を参照。

また、パールフットに刻まれる *chūḍāmaho* に関しては、杉本卓洲[1977]によって同じ表現が根本説一切有部律に記されていることが指摘されている。

『根本説一切有部毘奈耶』[T. 23, No. 1442, 715a19–20]

「若五年會 若六年會 若頂髻會 若盛年會」

頂髻會に対応する Skt. が Cūḍāmaha であることも、*Māhāvīryupatti* (Nos. 5672–5680) に記される9種類の Maha の名から特定されている。von Hinüber [2014: 30, n. 34, 35] もあわせて参照。

杉本卓洲[1984][1977]によると Maha は特にジャイナ教にその具体的な19種の名が列挙されている。Maha が仏教信仰の中に取り入れられて以後の様子は、諸部派の律に記録があり、どのような種類の Maha

に頭髮礼拝図が描かれる背景には、シッダールタが剃髪し、出家したことを表現する意図が強く含まれていると言える。そして、ここに描かれる神々は、シッダールタが転輪聖王の位を放棄して、ブッダとなるために出家者となったことを喜び、その取り除かれた〔頭髮の〕髻に対する Maha、すなわち「髻の祭り Cūḍāmaha」を行う姿であると理解出来よう²⁰³。

次節では、カナガナハリ大塔から出土した出城図と頭髮礼拝図を碑文の解説と合わせて観察し、これら出家に関係する 2 つの場面の図像表現について考察する。

3. 4

カナガナハリ大塔から出土した出城図と頭髮礼拝図

カナガナハリ大塔の南門の近くから発見された Kanaganahalli 08 は「出発 *abhinikhama*」と記されている(→ 図 22 を参照)²⁰⁴。レリーフ石版の上段区画には、夜半に愛馬に乗ってカピラヴァツツの城から出て行くシッダールタが存在することを、神々が持つ傘蓋と扠子によって暗示し、未だ成道していないシッダールタも直接表現しないという古代初期インド美術の特徴を踏襲している。そして、シッダールタが乗っている愛馬の足音によって周囲の人々が起きないように、4 人の神々がその馬の足を両手で支えている様子が描かれている²⁰⁵。このような出城図

があつて、どのように対応したかが杉本卓洲[1977]によって整理されている。

²⁰³ Sn: *Selasutta* には、三十二相を具えた偉人が歩む 2 通りの道として、出家の生活を選択してブッダになること、あるいは、在家の生活に留まって転輪王(Skt. *rājan- cakravartin*-)になることが語られており、ブッダは Sn 第 554 詩節で自らの立場を明言している。その際、自らが説法する様を「ダンマによって輪を回転させる *dammena cakkam vattemi* (Sn, 109, 6)」と転輪王が理想の政治を遂行する姿に準えて表現している。それに対応する図像もパールフットに看取される。

詳しくは、第 4 章 第 1 節 第 2 項 (4. 1. 2): 法輪を回転させるという記述を参照。

²⁰⁴ Nakanishi and von Hinüber[2014: 93 (III. 2, 5)]

²⁰⁵ 例えば *Jātaka* 註釈文献 *Nidānakathā* では以下のように語られている。

so sace haseyya vā pādasaddaṃ kareyya vā saddo sakalanagaraṃ avatthareyya, tasmā devatā attano ānubhāvena tassa yathā na koci suṇāti evaṃ hasitaṃ saddaṃ sannirumbhitvā akkamaṇaakkhamaṇapadavāre hatthatalāni upanāmesuṃ.

Nidānakathā (Jā i, 62, 28–32)

もしも彼〔馬〕が鳴いたり、あるいは足音をたてたりすると、音が町全体に広がってしまう。それ故に、神々は自らの威力によって、この〔音を〕如何なる者も聞かないように、鳴き声を抑止して、毎回〔地面に〕足が近づく度に、両手のひらを差し出した。

に対応する仏伝文学中の〈出城伝説〉が、第 1 節(3. 1)で提示した *niṣ-√kram* を用いた出家直前の行動、すなわち「(自分の住む場所から)出て行く」という表現に基づいて発展した伝説であることは第 2 節(3. 2)に取り上げた。カナガナハリ大塔の出城図でもその主題として *abhinikhama* < *abhi-niṣ-√kram* が使用されていたことが分かる²⁰⁶。

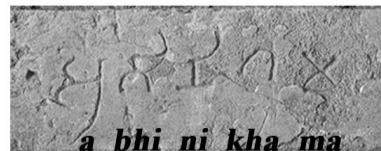


図 22: 出城図
(Kanaganahalli 08 上段区画)

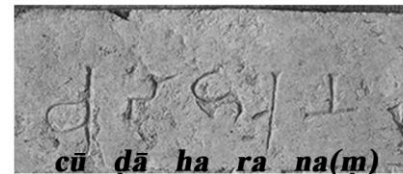
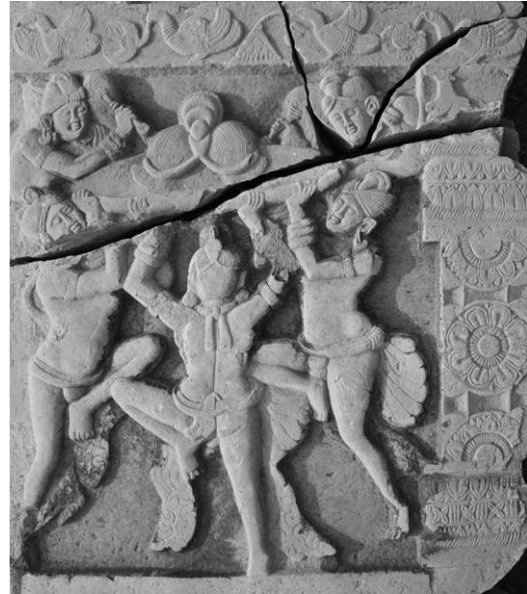


図 23: 頭髮礼拝図
(Kanaganahalli 09/05 下段区画)

Buddhacarita 第 5 章 第 81 詩節では、神々ではなくヤクシャが愛馬の足を支える役目を果たしている。それに対してパールプットの出城図は、このような馬の足を支える神々の姿は描写されておらず、出城伝説成立以前の出城図を保存している。碑文も刻まれており、Lüders[1963: 87-88] によれば「アラハグタ天子」*Arahaguto devaputo* (B20) と記されている。この天子は B18 の碑文にも記されているが、文献には見出されない。リューダースはこの天子をシッダールタが出城する際に導いた神々のリーダーであると理解している。

²⁰⁶ 同様の表現を用いた図像とそれに対応する碑文がキジル 110 窟に存在する。トカラ語によって刻まれた Bild 24 の碑文を Schmidt[2010: 850]は *Hier verlässt der Bodhisattva die Stadt*. 「ここで菩薩が街を出て行く」と解説している。

従って、この図像表現はインド初期からガンダーラ地域を通してキジル石窟に至るまで「シッダールタが世俗生活を営んでいた場所(カピラヴァツツ)から出て行く」場面として描写されていたことが明らかとなる。

次に、頭髮礼拝図が描かれている Kanaganahalli 09/05 を観察する(→ 図 23 を参照)。「[頭髮の] 髻の運搬 *cūḍāharana(m)*」と記された碑文が、同じく外枠の部分に主題として刻まれている²⁰⁷。その下段区画には 3 人の神々が、大皿に載せたターバンで結われた[頭髮の]髻を高く持ち上げている。中央の人物を後ろ姿で描き、今まさに三十三天に運び上げようとしている場面を表現している。パールフットと同様に、ターバンで結われた[頭髮の]髻の両端には、生え際の髪の毛も描き込まれており、仏伝の一場面としてシッダールタが出家したことを伝えるために描かれていると考えられる。

上段レリーフ石版に描かれた出城図と頭髮礼拝図の位置関係については、上段レリーフ石版より制作時期が遅れる北門アーヤカ基壇のコーニスに描かれた仏伝フリーズ(the early 3rd century CE)が手掛りとなる。託胎霊夢図から初転法輪図までの 9 場面が右から左へと一列に並び、その配列の中で出城図と頭髮礼拝図はヤクシャ塔廟への参拝図と降魔成道図との間に両隣で並んでいる²⁰⁸(→ 図 24 を参照)。従って、この 2 つの上段レリーフ石版は、発見場所と説話の内容とを考慮すると、南門付近に両隣で配列されていた可能性が非常に高い。それはつまり、カナガナハリ大塔においても出城図と頭髮礼拝図の 2 つの場面が、仏伝文学における〈出城伝説〉と〈出家伝説〉に対応する図像表現であったと結論付けられよう。



図 24: 頭髮礼拝図 出城図 北門アーヤカ基壇上コーニス

²⁰⁷ Nakanishi and von Hinüber [2014: 93 (III. 2, 6)]

²⁰⁸ Poonacha[2013: 428, Pl. CXXIIF, G]

3.5

カナガナハリ大塔から出土したもう一つの頭髮礼拝図

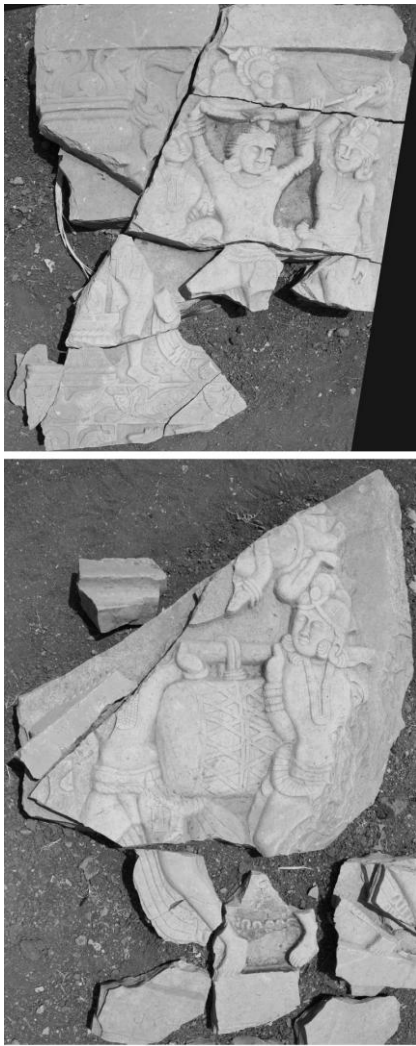


図 25: 頭髮礼拝図
(Kanaganahalli 32)

カナガナハリ大塔には同じ内容の碑文 (*cūḍāha(r)[ana]*²⁰⁹) を刻んだ上段レリーフ石版 (Kanaganahalli 32 上段区画) が別に出土している(→ 図 25 を参照)。配置場所は分からないが、筆者による 2009 年の現地調査では、主にジャータカなどが配列していたと考えられる北門付近で発見されており、仏伝の一場面として描かれていたとは考え難い(→ 資料 1 を参照)。破断しているものの、上段には正面を向いた人物が大皿に載せたターバンを一人で高く持ち上げている。右側の人物は払子を持ち、左側の人物は衣の裾を振り上げて喜びを表現している。細部を比較すると Kanaganahalli 32 の頭髮礼拝図には、生え際の髪の毛は描かれていない。下段には、大太鼓を 2 人で担ぐ人物と、その上に飛行している人物の下半身が確認される。このような楽器の演奏を合わせて描いた表現は、パールフット、サーンチー大塔に表現される三十三天において神々が「髻の祭り Cūḍāmaha」を行う姿と類似している。従って、Kanaganahalli 32 の頭髮礼拝図はすでに三十三天に運び上げられた〔頭髮の〕髻に対する神々の讃嘆と礼拝が表現されていると見做すことが出来る。

このような三十三天上のターバンがモチーフとなった類似表現を、マトゥラーから出土した従三十三天降下図の中に見ることが出来る(→ 図 26 を参照)。このマト

²⁰⁹ Nakanishi and von Hinüber[2014: 94 (III. 2, 7)]

ウラー出土の図像(具体的な出土地不詳: the 1st century CE)は、ブッダが三十三天から地上のサンカーシャに降下する場面を描いた無仏像時代の作例である。天界から地上へと降る3つの放射状に伸びた階段の上部中央には、ターバンで結われたシッダールタの〔頭髮の〕髻が描かれている。このターバンが三十三天であることを暗示する役割を果たしていることは瞭然であり、マトウラーの従三十三天降下図が頭髮礼拝伝説を前提としていることが分かる。



図 26: マトウラー出土

同様の表現は、ガンダーラ地域出土の図像にも存在する。ところが、ガンダーラ地域から出土したターバンを描いた図像を観察すると、筆者には頭髮礼拝図であると判断し難いことが判明した。ガンダーラ地域から出土した頭髮礼

拝図には、玉座に置かれたターバンが配されている(→ 図 27 を参照)。その両側には合掌礼拝し、太鼓やハープの伴奏とダンスによってそのターバンを讃嘆している三十三天の神々が彫り出されていると見做される²¹⁰。しかし、このようなターバンに対する礼拝図を文献資料に即して解釈する場合、頭髮礼拝伝説とは別の文脈で語られる聖遺物としての頭髮礼拝図と理解することも可能であろう。つまり、二商人奉食伝説を伝承する 15 本の文献資料のうち、二商人がブッダから頭髮を授かり起塔する場面が記される文献資料は限られているものの、*Mahāvastu*、『仏本行経』、『四分律』、『大唐西域記』、*Nidānakathā* の 5 本がそれに該当する²¹¹。二商人奉食伝説の文献整理を行った定方晟[2001: 119]が指摘するように、二商人奉食伝説は種々のヴァリ

²¹⁰ 栗田功[2003: Pl. 169, 170, 172]参照。

²¹¹ 定方晟[2001]によって二商人奉食伝説の文献資料が収集整理されているので参照した。「内容の比較表」では、ブッダから授かった頭髮を二商人が供養する場面を〈髪塔〉と記して該当する 5 本の文献資料を挙げている。

- *Mahāvastu* (Mvu iii, 310) ≡ 『佛本行集経』 [T. 3, No. 190, 803a2–10]
- 『四分律』 (法蔵部) [T. 22, No. 1428, 782a13–785c27]
- 『大唐西域記』 巻第 1 [T. 51, No. 2087, 873a2–13]
- *Jātaka-aṭṭhavaṇṇanā*, *Nidānakathā* (Jā i, 81, 1–4)

ーションに富み、各文献の動機によってエピソードが加えられているさまが窺われる。二商人による頭髮供養の記述は、5つの文献資料のみに記されていることを考慮すれば、あとから挿入されたエピソードである可能性が極めて高い。それに加えて『大唐西域記』では、ガンダーラ地域のエピソードとして記されていることから²¹²、ガンダーラ地域出土の頭髮供養図を、二商人による地上での頭髮供養図として解釈することも出来る。その場合、ターバンを礼拝し、讃嘆する人物の描写は、三十三天の神々ではなく在家信者達の姿となる。いずれにせよ頭髮供養図に描かれるブッダの頭髮は、古代初期インド美術段階から仏像出現後のガンダーラ地域に至っても礼拝の対象物として図像化されたことが知られる。



図 27: ガンダーラ地域

小結 3

Suttanipāta の古層に説かれるシッダールタの出家は、動詞 *pabbaja*-^{ti} (Skt. *pravraja*-^{ti} <pra√vraj) を用いて「[世俗生活から]出て行く」と表現されている。続く散文資料中には、初期仏教の出家 (Skt. *pravrajyā*-, Pā. *pabbajā*-) としてこの表現を用いた具体的な出家に関する定型表現が見られる。しかしながら、カナガナハリ大塔から出土した碑文を伴う仏伝図を見渡すと、初期経典以来の出家を指す Skt. *pravrajyā*-, Pā. *pabbajā*- が碑文に記された、シッダールタが出家するその瞬間を描いたレリーフ

²¹² 『大唐西域記』では、縛喝国にあったとされる提謂城と波利城内に建立された仏塔に由来する話として二商人奉食伝説が記されている。水谷真成[1971: 39, 註 1]によれば、縛喝国は古代のバクトリア、現在のバルク(Balkh)に位置する。

は確認されない²¹³。従って、カナガナハリ大塔の碑文によって示される最初期の出家に関する図像表現は、出家者となるために剃髪したことを暗示する「[頭髮の]髻の運搬 *cūḍāharana(m)*」と記された Kanaganahalli 09/05 の頭髮礼拝図がその役割を果たしていたと言える。

それと併存して、バールフット、サーンチー大塔の「髻の祭り *Cūḍāmaha*」を継承するもう一つの頭髮礼拝図がカナガナハリ大塔には保存されている。「[頭髮の]髻の運搬 *cūḍāha(r)[ana]*」と同じ内容が碑文に刻まれているものの、図像表現が前者と大きく異なっている。この図像では、三十三天に運ばれたターバンに対して神々が楽器の演奏とともに礼拝している姿が描かれている。

このような仏伝の一場面としての頭髮礼拝図と、聖遺物への礼拝に繋がる頭髮礼拝図の2系統の図像学的特徴をカナガナハリ大塔は伝承している。

²¹³ Nakanishi and von Hinüber [2014: 91–101]、荒牧/Dalayan/中西[2011: 63–92]

第4章

上段レリーフ石版 No. 01 – 初転法輪図 –

第4章では、Kanaganahalli 01 に描かれた初転法輪伝説の図像表現を考察する。ブッダが悟りを開いた後、最初に説法を行ったことを物語る仏伝の一場面は〈初転法輪〉と呼ばれ、初期經典の韻文資料から単独の散文資料に至るまで多数の文献資料が存在する²¹⁴。他方、初転法輪伝

²¹⁴ ブッダの初転法輪伝説を伝える文献資料を収集整理し、6 グループ(I~VI)に大別し以下に挙げる。

I. 初期經典

1. *Suttanipāṭa*: Nālakasutta, v. 684 (Sn, 132, 17–133, 2)
2. *Samyuttanikāya* 22: Kandhasamyutta 59, Pañca (SN iii, 66, 24–68, 29) = 『雜阿含經』(34)「五比丘」[T. 2, No. 99, 7c13–8a4]
3. *Samyuttanikāya* 56: Saccasamyutta 11–12, Tathāgatenavutta (1–2) (SN v, 420, 24–425, 12) = 『雜阿含經』(379)「転法輪」[T. 2, No. 99, 103c13–104a29] ≅ 『転法輪經』[T. 2, No. 109, 503b3–503c23] = 『佛說三転法輪經』[T. 2, No. 110, 504a5–b22] = *Dharmacakrapravartana-Sūtra*
4. *Majjhimanikāya* 26: Ariyapariyesanasutta (MN i, 171, 18–175, 11) = 『中阿含經』「羅摩經」(204) [T. 1, No. 26, 777b7–778c7]
5. *Dīghanikāya* 14: Mahāpadānasuttanta 3, 8–13 (DN ii, 40, 3–42, 15) = Mahāvādānasūtra (MAV, 146–148) [東トルキスタン有部] = 『長阿含經』「大本經」[法藏部] [T. 1, No. 1, 8c26–9c6]
6. *Dīrghāgama*: Catuspariṣatsūtra 11. 1–15. 19 (CPS Teil 1, 132–170, 444–449) ≅ 『佛說衆許摩訶帝經』[T. 3, No. 191, 953–c3–954b26]

II. 仏伝文学(1) Skt.

1. *Buddhacarita*, Aśvaghoṣa 著, ch. 15, vv. 15–58 (Bc, 30–35) = 『佛所行讚』[T. 4, No. 192, 28c19–30c5] = 『佛本行經』[T. 4, No. 193, 87a5–88b3] ≅ *Divyāvadāna* No. 27 (Divy, 393, 21–26) = 『阿育王傳』[T. 50, No. 2042, 104a17–19] = 『雜阿含經』[T. 2, No. 99, 167b20–25] = 『阿育王經』[T. 50, No. 2043, 137c28–138a4]
2. *Mahāvastu* [大衆部説出世部] (Mvu iii, 328, 20–340, 15) ≅ 『佛本行集經』[T. 3, No. 190, 809a27–810b6]
3. *Lalitavistara*, ch. 26 (Lv, 407, 12–418, 21) = 『佛說普曜經』[T. 3, No. 186, 528c13, 530c14] = 『方廣大莊嚴經』[T. 3, No. 187, 605a15–606a6]
4. *Śākyasiṃhajātaka*, vv.100–114 (Śsj, 167, 18–169, 12)

III. 仏伝文学(2) Jātaka 註釈文献

説が図像によって表現されるのは、アジャンター前期石窟 (Sātavāhana, the 1th century BCE: 第10窟 左側壁面²¹⁵) やサーンチー第1塔 (Sātavāhana, the early 1th century CE: 西門第二横梁裏面²¹⁶) を初めとする古代初期インド美術の段階からである。しかしながら、初転法輪図(あるいは初説法図)についての研究は、それぞれの作例に対する解説や言及はみられるが、初転法輪図そのものを主題とした論考はみられない²¹⁷。そこで初めに、どのような表現によって初転法輪図と同定されるのかをガンダーラ地域ローリヤーン・タンガイ (Kuşāṇa, the 2nd–3rd century CE) から出土した初転法輪図の一例に従って確認したい。その初転法輪図には以下の特徴が挙げられる(→ 図28を参照)。

1. *Jātaka-atthavaṇṇanā*, Nidānakathā (Jā i, 81, 17–82, 19)

IV. 仏伝文学(3) 漢訳(インド側の資料を欠く)

1. 『中本起経』 [T. 4, No. 196, 147c5–149c12]
2. 『佛説十二遊経』 [T. 4, No. 195, 147a2–a3]
3. 『佛説太子瑞応本起経』 [T. 3, No. 185, 480c14–c19]
4. 『異出菩薩本起経』 [T. 3, No. 188, 617b12–620c8]
5. 『僧伽羅刹所集経』 [T. 4, No. 194, 137c19–c27]
6. 『過去現在因果経』 [T. 3, No. 189, 644a13–645a14]

V. 諸部派の律(受戒犍度部)

1. *Vinaya: Mahāvagga* 6, 5–47 (Vin i, 7, 35–14, 38) = 『増一阿含経』「高幢品 24–1」(5) [T. 2, No. 125, 618a27–619b18]
2. 『四分律』(法蔵部) [T. 22, No. 1428, 787c13–789b4]
3. 『彌沙塞部和醯五分律』(化地部) [T. 22, No. 1421, 104a11–105a25]

VI. (根本)説一切有部律(破僧事)

1. *Saṅghabhedavastu* (Sbhv i, 133, 1–139, 17) = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 [T. 24, No. 1450, 127a19–128c11]

²¹⁵ Schlingloff[1988: 8, 13–30]

²¹⁶ サーンチー第1塔西門の第二横梁(中段)と第三横梁(下段)は、1881年から1882年に行われた修復作業の際に、裏と表を逆にして再現されている。現在見られる第二横梁正面の初転法輪図の本来の配置は、裏面であったことに留意しておきたい。Marshall and Foucher[1940: Pl. 54, 55]を参照。

²¹⁷ グプタ朝以降の初説法図については、宮治昭[1993]にその図像学的特徴と展開が論じられている。

- ① ブッダが法輪と鹿野苑を暗示する 2 頭の鹿を表した台座の上に座す。
- ② ブッダは左手に衣端を握り、右手を挙げて説法を行う姿をしている。
- ③ 5 人の比丘(最初の仏弟子)がブッダの周囲に座し、視線をブッダの方に向けている。
- ④ 神々もブッダの周囲に現れ、合掌したり、花を掲げて祝福している。



図 28: ガンダーラ地域 ローリヤーン・タンガイ出土
カルカッタ、インド博物館蔵

この 4 つの特徴は、ブッダや仏弟子の姿を表現し始めた 1 世紀後半以降の表現であり、初転法輪伝説の場面として必要な要素(鹿・法輪・五比丘)が全て描き込まれている。この表現は、我々の知る初転法輪伝説を正確に図像化していると言えよう。第 2 節(4. 2)では古代初期インド美術にみられる初転法輪図の成立過程を整理し、このガンダーラ地域から出土した初転法輪図より以前の初転法輪図の図像学的特徴を考察する。そして、その成立過程に基づき、カナガナハリ大塔から出土した上段レリーフ石版 Kanaganahalli 01 に描かれた初転法輪図の図像表現を提示する。そこで次節(4. 1)では、初転法輪図の考察に進む前に、初転法輪伝説に関連する文献資料を整理しておこう。

4. 1

初転法輪伝説の伝える情景とその図像表現

初転法輪伝説については、水野弘元[1996]が初転法輪伝説を伝承する諸經典を収集し、ブッダが初めて説法した際に何を説いたのかを比較考察した論究がある。しかし、初転法輪図の図像表現を解明するためには、説法の内容ではなく、その前後に物語られる情景描写を文献資料中に探ることがより重要になるであろう。個々の図像によって表現の差異はあるが、基本的にガンダーラ地域から出土した初転法輪図は、先に挙げた初転法輪図のように、ブッダの周囲に鹿・法輪・五比丘を配置して初転法輪伝説を表現している。すなわち鹿・法輪・五比丘が初転法輪図の情景であると言える。他方、文献資料においては、これら初転法輪図を表すために必要な要素が一度にまとめて語られ始めるのは、ブッダの一生涯を物語る仏伝の一場面として意識的に初転法輪伝説が語られる段階まで待たねばならない²¹⁸。従って、初転法輪図にみられる個々の情景描写が文献資料と図像資料にどのように表現され始めるのかを順に整理しておく必要がある。まず、初期經典に保存される初転法輪伝説の情景描写を確認することから始めたい。

仏伝の一場面として初転法輪伝説が語られる以前のブッダの初説法について触れる記述は、初期經典中の韻文資料に散見される。その中でも古い伝承を保存しているのは、*Suttanipāta* の古層に所収される *Nālakasutta* 第 684 詩節が伝える初転法輪伝説である。その直前に説かれる *Nālakasutta* 第 683 詩節には、＜誕生＞についての古い伝承も見られる。そのことは第 2 章に取り上げているので合わせて参照されたい²¹⁹。つまり、この *Sn: Nālakasutta* の冒頭部分には、＜誕生＞と＜初転法輪＞が連続して間接的に説かれているということになる。冒頭部分のあらず

²¹⁸ 本章: 註 214 に挙げた初転法輪伝説を伝承する文献資料のうち、初転法輪図を表すために必要な要素である鹿・法輪・五比丘を合わせて物語る最も古い文献として MN 26: *Ariyapariyesanasutta* が挙げられる。パーリ所伝のニカーヤに収められたこの經典は、仏伝の出家から初転法輪までを語り、ブッダの生涯を時系列にまとめて編集した最初の試みと言える。

この經典の本来の目的は、ブッダがどのような方法で「邪求」と「聖求」を識別したのかを説くことにある。増谷文雄[1981: 143–145]はそれぞれの物語がどのような原資料によって編集されたものかを表示している。

²¹⁹ 第 2 章 第 1 節(2.1): 誕生伝説と誕生図を参照。

じは、日中にアシタ仙によって、歡喜する神々の姿が天界で目撃される。神々は、ブッダが誕生したことをその理由に挙げ、後に成道したブッダが説法を行うことを予期しているというものである。以下の詩節は天界の神々が語った言葉として説かれている。以下に該当箇所を提示する。

*so sabbasattuttamo aggapuggalo narāsabho sabbapajānam uttamo,
vattessati cakkam isivhaye vane nadaṃ va siho balavā migābhibhū.*

Suttanipāta: Nālakasutta, v. 684²²⁰

あらゆる存在の中で最上であり、第一人者である人、牡牛のような人であり、全ての人々の中で最上である彼は、仙人という名の林で、〔法〕輪を回転させるでしょう。あたかも、力を具え、鹿達を征服する獅子が吼えるように。

古層に位置する Sn: Nālakasutta の冒頭部分に記されたこの詩節から初転法輪図の情景として指摘出来ることは、(1) ブッダが初めて説法した場所 と、(2) 初めての説法が(法)輪を回転させると表現されることの2点である。説法の対象者や説法内容については触れていない。従ってこの記述を手掛かりに、これら2点の記述が初転法輪伝説を離れた文献資料と図像にどのように描写されているのかを確認する。

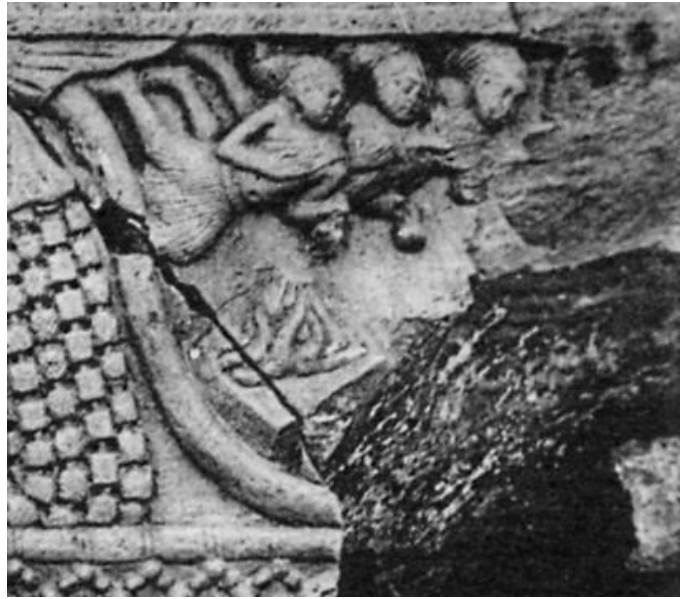
4. 1. 1

ブッダが初めて説法した場所

Suttanipāta 第 684 詩節が伝える仙人という名の林(Pā. *isivhaya- vana-*)というのは、古代にはリシパタナ(Skt. *Rṣipatana*, Pā. *Isipatana*, Chn. 仙人墮処)または、鹿野苑(Skt. *Mṛgadāya*, Pā. *Migadāya*)と呼ばれた現在のサールナートのことを指している。リシパタナという場所はパールフット(Śunga, 150 BCE: 笠石)の図像に表現されており、Lüders[1941]がそれを詳細に解説している(→ 図 29 を参照)。

²²⁰ Sn, 132, 17–133, 2.

図像の左上に、三人の辟支仏達が左手に水瓶を持ち、上空を飛行している姿が確認出来る。図像の右半分は欠けているが、4人目の辟支仏の肩部分が僅かに残っていることから全員で5人描かれていたとされる²²¹。飛行する辟支仏の真下には、炎が石台の上で燃え上っている。リユーダースは、*Mahāvastu* や *Lalitavistara* に説かれるリシパタナという地名の由来についての記述



を引用し、辟支仏が般涅槃する時、天空に高く飛び上がり、自らの火界

図 29: パールフット 笠石浮彫
カルカッタ、インド博物館蔵

(定)で肉と血とを焼きつくし、骨が地上に落ちた。ここで聖仙(Skt. ṛṣi)たち(=辟支仏)が落ちたのでリシパタナという名前となった²²²。という地名の由来に関する話が図像として描かれていると解釈している²²³。このような地名の由来についての話は、*Mahāvastu* の制作者が自ら考案したとは考え難く、むしろ以前に伝聞した話を挿入したと考えるのが妥当であろう。なお、*Mahāvastu* ではリシパタナという名前の由来が語られた直後に、ニグロード鹿王(Nigrodhamiga

²²¹ Lüders[1941: 44]によれば、*Mahāvastu* は500人の辟支仏について述べているが、図像では500人を5人に略して表現している。

²²²

ālabdhavīryā satatānuṣṭhāgī udagracittā akuśīdavaritī / dṛḍhāvikramā vīryabalopapetā ekacarā khaḍgaviṣṇānakalpā // vaihāyasam abhyudgamyā tejodhātum samāpadyitvā anupādāya parinirvṛtā // svakāye tejodhātūye mānsaśṇitam dhyāpitam / śarīrāṇi patitāni // (中略)
ṛṣayo 'tra patitā ṛṣipatanam.

Mahāvastu (Mvu i, 375–359)

彼らは精進し、絶えずヨーガに従い、気高い心を持ち、怠惰なく実践し、堅固な勇気を持ち、精進力を具え、犀の角のように、独り行じる者である。彼らは空中に向かって上昇し、火界〔定〕に入り、執着せずに般涅槃した。自らの火界〔定〕で肉と血を焼かれた。諸々の骨が落ちた。(中略) ここに聖仙(ṛṣi)たちが落ちた〔ので〕リシパタナ〔という名で呼ばれるのである〕。阿賀谷友宏[2011: 26–27]を参照。

²²³ シュリングロフはこの図像を樹下観耕図と解釈している。Schlingloff[2000: 52–54]

Jākata, No. 12)の説話が続き、鹿野苑と呼ばれる地名の由来を説明している²²⁴。パールフットの図像表現がリシパタナの由来を描写した図像ならば、紀元前 150 年頃の段階でリシパタナという場所は、地名の由来と共に知られていた場所であったことが分かる。

4. 1. 2

法輪を回転させるという記述

次に *Suttanipāta* 第 684 詩節に伝承される「彼は〔法〕輪を回転させるでしょう (*vattessati cakkam*)」というフレーズによって示された情景描写について考察する。このフレーズは *Suttanipāta* の *Nālakasutta* 以外にも散見され、図像においても初転法輪伝説とは関連の無い法輪の図像が存在する²²⁵。パールフットから出土した南門屈曲欄楯の内面上段区画に描かれた図像 (*Prasenajit Pillar* (P 29)) は、「世尊の法輪 (*bhagavato dhamachakam*)」と刻まれた碑文を伴い、ブッダとプラセナジット王に関連のある説話が描かれている²²⁶。それはつまり、「法輪を回転させる」というフレーズとその図像表現が初転法輪伝説の成立より以前、もしくは同時代に平行して存在していたことを証明している。従って、このフレーズを理解するために、Sn: *Nālakasutta* と同じ *Suttanipāta* に収められた *Selasutta* 第 554 詩節前後の記述を辿り、より具体的な法輪に関する内容と図像表現を確認しておこう。Sn: *Selasutta* では、三十二相を具えた偉人が歩む 2 通り

²²⁴

mṛgāṇāṃ dāyo dinno mṛgadāyo ti ṛṣipattano //

Mahāvastu (Mvu i, 366)

鹿達に「安全という」施物が与えられたのでリシパッタナはミガダーヤと「も言う」

Mahāvastu では鹿野苑という地名の由来として語られており、ブッダの過去世の話としては語られていない。また、ニグロータ鹿王前世物語もパールフットに描かれている。

Lüders[1963 : 127–128]参照。

²²⁵ Bhārhut: Coomaraswamy[1956: fig. 28, 62, 66], Bodhgayā: Coomaraswamy[1935: Pl. 27. 2, 49. 3]

²²⁶ Lüders[1963: 113–118]は建物の屋根に刻まれた碑文を「世尊の法輪」*Bhagavato dhamachakam* (B38)、続けて右下の碑文を「コーサラ国 プラセナジット王」*rājā Pasenaji Kosalo* (B39) と解説している。従って、この図像はブッダとプラセナジット王に関連した内容の図像であることを指摘する。

リューダースはフーシェがこの図像を舍衛城の神変図と同定したことを否定し、この柱の隣り合う 3 面それぞれに *sambodhi* 「成道」、*parinirvāṇa* 「涅槃」、*dharmacakrapravartana* 「初転法輪」を描くことでブッダの人生における 3 つの出来事を暗示していたのではないかと提案している。

の道として、出家の生活を選択してブッダになること、あるいは、在家の生活を選択して転輪王(Skt. *rājan- cakravartin-*, Pā. *rājan- cakkavatti-*)になることが語られており、両者の立場を読み取ることが出来る。ブッダは婆羅門セーラに対して、以下の詩節によって自らの立場を明言している。

rājāham asmi, selā 'ti bhagavā, dhammarājā anuttaro,

dhammena cakkaṃ vattemi, cakkaṃ appaṭivattiyaṃ.

Suttanipāta: Selaṣutta, v. 554²²⁷ = *Theragāthā*: Sela Thera, v. 824²²⁸

「セーラよ。私は王である」と世尊は〔答えた〕

「最高の、ダンマ(道理)の王であり²²⁹、

ダンマ(道理)によって輪を回転させます、反転することの無い輪を」

初期経典中の転輪王について詳細に考察した藤田宏達[1954]によると、転輪王は全世界に正義(Pā. *dhamma-*)を以って君臨する理想的王者に与えられる呼称であり、仏教とほぼ同時代のジャイナ教、バラモン教の文献資料にも記されていることから、この頃から一般的に流用されていたものであるとされる。それらの文献資料を精査した Gonda[1966]は、転輪王の本来の意味を「輪によって及ぶ支配の中央に存在する者」と理解している²³⁰。韻文資料中に説かれた「法輪を回転させる」というフレーズは、ブッダの初説法について触れる箇所で使用されると同時に、転輪王に関係する箇所でも使用されていたことが分かる。この転輪王の姿は、古代初期インド美術に位置付けられる南インドのジャグガヤペータ出土の転輪王図(*Sātavāhana, the 1th*

²²⁷ Sn, 109, 3–7.

²²⁸ Th, 79, 1–2.

²²⁹ 梶山雄一ほか(編)[1986: 220]参照。

²³⁰ 名前の語源的意味については種々の説が存在する。藤田宏達[1954: n. 9]を参照。転輪王という名が持つ輪の意味は、定方晟[2002]によって考察されており、彼は戦車の車輪を意味するのが妥当としている。

近年では、手嶋英貴[2017]によってこれまでの先行研究が詳細に紹介されており、転輪聖王に関する記述をヴェーダ・ウパニシャッド文献、仏教・ジャイナ文献、叙事詩より抽出して、転輪王の人物像に迫った論究が存在する。

century BCE–the 1st century CE: レリーフ石板²³¹)やアマラーヴァティ大塔近郊から出土した転輪王図(Sātavāhana, the late 1st century BCE: レリーフ石板)によって知られており、転輪王の周囲には王が具えるべき七宝が並んでいる(→ 図 30 を参照)²³²。ここで注目すべきことは、両者共に七宝の一つである輪宝(Pā. *cakkaratana*-)が法輪柱の造形によって描かれていることである。



図 30: アマラーヴァティ近郊 レリーフ石板
パリ、国立ギメ東洋美術館蔵



図 31: パールフット 欄楯装飾
カルカッタ、インド博物館蔵

²³¹ 肥塚/宮治(編)[2000: Fig. 106] マドラス州立博物館蔵

²³² 宮治昭[2005]はマーンダータ王説話図の一例としてジャッガヤペータ出土の図像を詳細に解明している。その図像に関して宮治昭[2005: 280, 17–18]は「マーンダータ転輪聖王の説話を背景にしながらも、説話の要素は稀薄で、(中略) 転輪聖王自身を強調した表現となっている」と指摘している。

その転輪王図と全く同じ構図で描かれた図像がカナガナハリ大塔から出土した。

Kanaganahalli 48 の図像に伴う碑文には、マーンダータ本生とは記されずに、「転輪王〔と〕七宝」*rāyā cakavāṭī sataradaṇo* と記されている。

Zin [2010]、荒牧/Dalayan/中西[2011: 85, 100]、Nakanishi and von Hinüber [2014: 101 (III. 3. 1. Pl. 35)]参照。

ナーガールジュナコンダからも転輪聖王図(3 世紀: ニューデリー国立博物館蔵)が出土しており、その背景に輪宝が法輪柱によって表現されているのを確認することが出来る。

肥塚/宮治(編)[2000: Fig. 127] を参照。

それに対して、クシャーナ朝期のガンダーラ地域では、ザールデリー出土の従三十三天降下図(アーチ型浮彫群像)に描かれる転輪聖王の背景に輪宝の造形を見ることが出来る。ガンダーラ地域の作例は、この一例のみであるが、ガンダーラ地域で表現された輪宝は、法輪柱の造形ではなく法輪のみで表現されている。

小泉恵英[2005: 26, 図 22]、東京国立博物館パキスタン調査隊[2011: 61–62, 図 182]

転輪王の所有する輪宝が本来何を意味するのかは種々の説が存在する²³³。しかし少なくとも、紀元前 1 世紀頃に図像化された転輪王の輪宝が、日輪(discus of the sun)、武器としての輪(wheel)や戦車を意識して表現していないことは明らかであり、むしろ Sn: Selasutta の序文に「彼(転輪王)はこの大地を海岸に至るまで、棍棒によらず、刀剣によらずに、法によって征服して、占拠する」(*so imaṃ paṭhavim sāgarapariyantam adaṇḍena asatthena dhammena abhivijīya ajjhāvasati*. Sn, 106, 17–19) と表現される転輪王による理想の統治を、法輪柱によって描写していると言える²³⁴。なぜならば、輪宝を法輪柱によって描く背景には、宮治昭[2000: 167–169]が指摘するように、初転法輪の地であるサールナートに建立されたアショーク王柱 (Maurya, ca. 250 BCE: 小石柱法勅、下部は現地・柱頭はサールナート考古博物館蔵²³⁵)の造形が大きく関与していると考えられるからである。柱頭に背合わせで立つ四頭の獅子の上には法輪が載せられており、本来の姿は法輪柱と酷似している。つまり紀元前 1 世紀頃の段階で、もともと日輪や輪、戦車の意味を含んでいた転輪王の輪宝が法輪柱によって描写されたことには、各地に法勅を記した記念石柱を建立して領土を固持したアショーク王(268–233 BCE)の統治を想起させる目的



図 32: サーンチー第 2 塔
欄楯装飾

²³³ 藤田宏達[1954]は、DN 26: Cakkavattisīhanādasuttanta の記述に基づき、「[天の] 輪宝」[dibbaṃ] cakkaratanam が、転輪王が全大地を運行する状態を太陽の運行を喩えて描いていることから、太陽の威光が輪宝として象徴されているとする。しかし定方晟[2002]が指摘するように、七宝の一つである輪宝は cakkaratanam と呼ばれ、出沒する輪の方は dibbaṃ cakkaratanam と呼ばれており、両者を区別していることから、全く同じものかは疑問の余地があるとする。

²³⁴ DN 26: Cakkavattisīhanādasuttanta (DN iii, 61–62)では、聖なる転輪王の務め(*ariyaṃ cakkavatti-vatta-*)についての具体的な記述がある。そこにおいても法による統治が語られている。

²³⁵ サールナートのアショーク王柱については、塚本啓祥[1976: 24 / 69–72]、肥塚/宮治(編)[2000: figs. 4–8]、Falk[2006: 209–214]を参照。

が含まれていたと考えられよう²³⁶。サーンチー第2塔に設置された欄楯に彫刻されるレリーフには、サールナートのアショーカ王柱を想起させる獅子柱頭の上に法輪を載せたアショーカ王柱の作例を見ることが出来る(→ 図 32 を参照)²³⁷。

一方、転輪王図と同時代に描かれていた仏教における法輪柱の図像は、パールフット、ボードガヤー(Sunga, the 1th century BCE: 角柱 No. 10, 40)等に作例が残る²³⁸。「法輪を回転させる」というフレーズで喩えられるブッダが教えを説く姿が法輪柱によって象徴的に描かれている(→ 図 31 を参照)。つまり、両者に同じ法輪柱を描くことで図像においても、Sn: Nālakasutta、Selasutta 等の韻文資料に語られるような、ブッダが自らの教えを宣布する姿を、転輪王が理想の政治を遂行する姿になぞらえて表現していると言えよう。

以上、Sn: Nālakasutta 第 684 詩節における初転法輪図の情景として指摘した 2 点が、初転法輪伝説を離れた最初期の文献資料と図像資料中にどのように表現されるのかを確認した。初転法輪図の成立以前、もしくは同時代に、これら 2 点の初転法輪図の情景は、初転法輪伝説とは別の背景に基づいて表現されている。では初転法輪図の情景の一つとして挙げられるが、Sn: Nālakasutta 第 684 詩節には言及されなかった説法の対象者は如何にして表現され始めたのだろうか、それについては、次に精査することにした。

4. 1. 3

説法の対象者としての五比丘

ガンダーラ地域から出土した初転法輪図によって確認される初転法輪図の情景は、鹿、法輪、五比丘であったが、先に引用した Sn: Nālakasutta 第 684 詩節のブッダの初説法について触れる記述には、説法の対象者に言及した箇所は見られない。初転法輪伝説を伝える諸文献のうち、

²³⁶ 塚本啓祥[1997]参照。サールナートのアショーカ王柱に記された碑文の内容は、仏教の教団分裂を誡めたものであり、初転法輪に関する内容では無い。塚本啓祥[1976: 137–138]

²³⁷ サーンチー第2塔の欄楯装飾にアショーカ王柱の造形が4例確認される。Marshall and Foucher [1940: Pl. 74, 3a (北東区分: 北面), 5a (北東区分: 西面), Pl. 82, 44b (東南区分: 北面), Pl. 86, 66b (南西区分: 東面)]

さらに、第3塔の塔門東柱南面第1区画に1例確認される。Marshall and Foucher [1940: Pl. 103, b (東柱: 南面)].

²³⁸ Coomaraswamy[1935: 角柱 No. 40: Pl. 27, Pl. 46, 2. 角柱 No. 10: Pl. 13, Pl. 46, 3, Pl. 49, 3]

初期經典中の散文資料に伝承される説法の対象者に関する記述は、「五群の比丘」(Pā. pañcavaggiyā bhikkhū)とだけ記述する SN: Khandhavagga の Khandhasaṃyutta に属する SN 22: 59, Pañca²³⁹と MN 26: Ariyapariyesanasutta²⁴⁰の伝承がある。そして、SN: Mahāvagga の Saccasaṃyutta に属する SN 56: 11–12, Tathāgatena vutta (1–2)²⁴¹では、「五群の比丘」のみならず、散文の最後に、最初に悟りを開いた者としてコンダンニヤ(Pā. Koṇḍañña, Chn. 僑陳如)の名前を挙げる伝承があり、大きく 2 つに大別される²⁴²。諸部派の律(受戒犍度部)とブッダの一生涯を物語る仏伝文学として初転法輪伝説が創作される次の段階では、ほぼ全ての文献資料中に五比丘それぞれの具体的な名前が挙げられている。北畠利親[1998]は諸部派の律と漢訳の仏伝文学中に記述される五比丘の名前を対照表記して整理し、五比丘の実像を検討している²⁴³。五比丘のうち、具体的な特徴が他の文献資料によっても確認出来るのは長老コンダンニヤのみであり、他の四人は僅かな記述があるものの、それ以上は探り難い²⁴⁴。また *Theragāthā* 第 673–688 詩節に収められた長老コンダンニヤが唱えたと言われる詩には、初転法輪伝説を踏まえて創作されたと推測される詩節が存在する²⁴⁵。

*buddhānubuddho yo thero Koṇḍañño tibbanikkamo,
pahīnajātīmaraṇo brahmacariyassa kevalī.*

²³⁹ = 『雑阿含経』(34)「五比丘」

²⁴⁰ = 『中阿含経』「羅摩経」

²⁴¹ = 『雑阿含経』(379)「転法輪」

²⁴² *Catuspariṣatsūtra* もコンダンニヤ(Skt. Kauṇḍinya)の名前を挙げている。(CPS, 152, 447)

²⁴³ 北畠利親[1998: 98–99] 表 2, 表 3 を参照。

²⁴⁴ 他 4 人についての僅かな記述に関しては北畠利親[1998: 94–46]を参照。

²⁴⁵ 並川孝儀[1987][2012]を参照。

また長老ヴァンギーサが唱えた詩にも長老コンダンニヤと初転法輪伝説に関連する詩節が収められている。

*pajjotakaro ativijjha sabbaṭṭhitīnam atikkamam addā,
ñātvā ca sacchikatvā ca, aggaṃ so desayī dasaaddhānaṃ.*

Theragāthā: Vaṅgīsa Thera, v. 1244 (Th, 111, 27–28)

としびを作る人は、洞察して、あらゆる立場の超越を見た。

そして、理解し、明らかにして、彼は 5 人に最初に説き示した。

Theragāthā: Aññakoṇḍañña Thera, v. 679²⁴⁶

強い出離の思いを持つ長老コンダンニャは、ブッダに従ってブッダとなった。

生死を捨てて、清浄なる行いを完成した者である。

このように初転法輪伝説を伝える諸文献中の記述を整理すると、具体的な五比丘の記述が付け加されていった過程を眺めることが出来る。但し、説法の対象者である五比丘は、すでに考察した初転法輪図の情景として指摘出来る 2 点とは異なり、初転法輪伝説を離れた文献と図像資料中に見つけ出せない。従って、初期經典の散文資料においてブッダの説法内容が具体的に語られ始めると同時に、その説法内容を聴聞する者として五比丘を登場させた經典が創作されたと解すべきであろう²⁴⁷。

他方、図像資料においては、説法の対象者である比丘が描き込まれている最初期の図像表現に、マトゥラーのアーチ形浮彫石板(Kuṣāṇa, the mid 1th century CE: 入口飾り板背面)が挙げられる。三日月形の枠内に法輪柱を礼拝する 2 頭の鹿と 2 人の大衣を纏って合掌する比丘の姿を見出せる(→ 図 33 を参照)。

高田修[1967: 373]は、この図像を法輪柱で表された初転法輪のブッダを礼拝供養する図であると解釈し、この図像中に大衣を纏った比丘の姿が描かれていることに注目している。古代初期インド美術では、ブッダの姿みならず仏弟子(比丘)の姿を表現することも避けられていた。その比丘の姿を描いた早期の作例が現存することに対して、高田修[1967]は、そこに一発展があったことを認め、仏像に先行して仏弟子の姿が先に造形され始めていたこと指摘している²⁴⁸。次節に論じる古代初期インド美術における初転法輪図はその前段階の作例であり、最も古い初転法輪図を保存している。その最初期の初転法輪図は、説法の対象者を四天王や多数の神々だ

²⁴⁶ Th, 69, 12–13.

²⁴⁷ 諸部派の律やブッダの一生を物語る仏伝文学では、初転法輪伝説の情景描写の一つとして重要な五比丘に具体的な名前を付加したり、ブッダと五比丘に関するエピソードを新たに挿入している。それに対応する作例として、ブッダの説法する場所に座具を運ぶ五比丘の姿を描いた図像がガンダーラ地域から多数出土している。栗田功[2003: Pl. 267, 271, 272, 273, 277, 278, 279]

²⁴⁸ アマラーヴァティー大塔においてブッダの姿に先行して仏弟子像が表されたことについては、島田明[2000]に詳しく論じられている。

高田修[1967]の指摘以降、カウシャーンビー(Śunga, the 1th century BCE: 欄楯柱)やカナガナハリ大塔 Kanaganahalli 14/19, 39, 44, 59 (Sātavāhana, the early 2nd century CE: 上段レリーフ石版)からもブッダの姿に先行して仏弟子を描いた極めて早期の図像が出土している。

Tripathi[2003: fig. 28] 荒牧/Dalayan/中西[2011: 70, 81, 83, 91]

けで表現している。その理由として考えられるのは、ブッダや仏弟子の姿を表すことを避けるために他ならない。従って、文献資料に即して五比丘を描写する図像は、ブッダや仏弟子の姿を積極的に造形化したガンダーラ地域から出土した初転法輪図の作例まで下ることになる。

以上、初転法輪図にみられる鹿・法輪・五比丘の情景描写が文献資料と図像資料にどのように表現され始めるのかを順に整理して考察した。パールフット、ボードガヤーの段階では、リシパタナと(法)輪は個別の図像によって確認出来るが、初転法輪図と特定出来る図像は確認されない。初転法輪伝説が図像によって表現され始めるのは、サーンチー第1塔の初転法輪図以降である。従って次に、古代初期インド美術にみられる初転法輪図の特徴を観察する。



図 33: マトゥラー 入口飾り板（部分拡大）ボストン美術館蔵

表 5. 初転法輪図: インド内陸部の主な作例

出土地	所在(現所在地)	年代	出典
Ajañtā → 図 35	第 10 窟左側壁面	Sātavāhana: the 1th century BCE	Schlingloff 2000. vol. III, X, 12.
Sāñcī → 図 34	第 1 塔西門第二横梁正面	Sātavāhana: the early 1th century CE	全集 13. 挿図 61.
Kanaganahalli → 図 37	上段レリーフ石版 No. 01	Sātavāhana: the early 2nd century CE	ADN 科研. p. 63. MASII06. Pl. LXXXI. A.
Amarāvātī	マドラス州立博物館	Sātavāhana: the 2nd century CE	Sivaramamurti. Pl. 20, fig. 2, Pl. 37, fig. 3.
Amarāvātī	描き起し図	Sātavāhana: the 2nd century CE	Fergusson. Pl. 71, fig. 2.
Amarāvātī	ロンドン、大英博物館	Sātavāhana: the 2nd century CE	Nnox. Pl. 11, 63, 82, 88, 89, 101.
Kanaganahalli → 図 38	東門アーヤカ基壇 仏伝フリーズ	Sātavāhana: the 3rd century CE	筆者撮影
Nāgārjunakoṇḍa	ナーガールジュナコンダ 博物館	Ikṣvāku: the late 3rd century CE	Longhurst. Pl. 22(a), 29(b).

4. 2

古代初期インド美術における初転法輪図の図像学的特徴

Sn: Nālakasutta から初転法輪図の情景として指摘出来ることは、(1) ブッダが初めて説法した場所と、(2) 初めての説法が(法)輪を回転させると表現されることの2点であった。サーンチー第1塔の西門第二横梁正面に描かれた図像中に、この2つの情景を合わせた表現を見ることが出来る。以下にその特徴を挙げる(→ 図 34 を参照)。

- ① 法輪を載せた台座を中央に置き、法輪の上に傘蓋を表すことで法輪そのものがブッダを表現している。
- ② 台座の両端に一对の鹿を配し、鹿野苑を暗示している。

- ③ 4人の男性(四天王)が合掌したポーズで立ち、姿勢を法輪の方へ向けている。
- ④ その上方には翼を広げた天人が花綱を掲げている。



図 34: サンチー第 1 塔 西門第二横梁正面

そして中央の主要な図像表現(法輪・鹿・四天王)の両側に、それぞれ 6 人の合掌した神々を描き、背景に樹木を配すことで、この場面が林の中での出来事であることを示している。そしてその中に鹿の群を情景の一つとして加え、この出来事が鹿野苑での出来事であることに限定している。

また、類似した特徴を表す図像がアジャンター第 10 窟の左側壁面にも現存し、Schlingloff [1988]によって初転法輪図と同定されている(→ 図 35 を参照)。傘蓋を載せた法輪によってブツダを暗示し、両脇には多数の神々が全員で合掌しながら姿勢を中央の法輪へ向けている。上方には花綱を掲げた天人が空中に浮いている。背景に樹木を配すことで、場面設定が林の中であったことが分かる。残念なことに下部は剥落し、鹿の姿は確認出来ない。しかしながら、アジャンター第 10 窟の左側壁面には仏伝の場面が時間軸に沿って描かれおり、その前後の場面が<降魔成道>と<舍利分配>であることから、この図像が初転法輪図であると見做すことが出来る²⁴⁹。

²⁴⁹ Schlingloff [1988: 1-13, 64-72]を参照。アジャンター第 10 窟の壁画は、左側壁面に一連の仏伝が並ぶ。順序は<兜率天の菩薩> → <誕生> → <七歩> → <樹下観耕> → <降魔成道> → <初転法輪> → <舍利分配> → <帰城>と時間軸に沿って並んでいる。向かいあう右壁には、シュヤーマ本生図と六牙象本生図が並ぶ。



図 35: アジャンター第 10 窟 左側壁面

最初期の初転法輪図は、仏弟子(比丘)の姿を表すことを避け、法輪に向かって合掌する四天王や大勢の神々だけで表現している。この点については、説法の対象者である仏弟子の代役として神々が描かれたと解釈することも可能であるが、文献資料の記述と合致しない。最初期の初転法輪図に描かれた四天王や大勢の神々の合掌する姿はどのような情景を表現しているのでしょうか、その手がかりを SN 56: 11-12, Tathāgatena vutta (1-2) に辿ることが出来るので、該当箇所を挙げて検討したい。上述したように、この経典には五比丘と、ブッダの説法を聴聞して、一番初めに悟ったコンダンニャの名前が挙げられている。神々はコンダンニャに法眼が生じた後に登場する。

*evam pavattite ca pana bhagavatā dhammacakke bhumā devā saddam anussāvesuṃ//
etaṃ bhagavatā bārāṇasiyaṃ isipatane migadāye anuttaraṃ dhammacakkaṃ
pavattitaṃ appativattiyaṃ samaṇena vā brāhmaṇena vā devena vā mārena vā brahmunā vā
kenaci vā lokasmin ti //*²⁵⁰

Samyuttanikāya 56: 11-12, Tathāgatena vutta (1-2) (SN v, 423, 17-22)

²⁵⁰ 漢訳の平行文は次の通り。

= 『雑阿含経』 (379) 「転法輪」 [T. 2, No. 99, 104a14-a18]

地神舉聲唱言。諸仁者。世尊於波羅捺國仙人住處鹿野苑中、三轉十二行法輪。諸沙門婆羅門、諸天魔梵、所未曾轉、多所饒益、多所安樂。哀愍世間、以義饒益。利安天人。增益諸天衆、減損阿修羅衆。

またこのように、世尊によって法輪が転ぜられた時、地上の神々(=地居天)は声に出して宣言した。バーラーナシーのイシパタナ、鹿野苑で、世尊によってこの最高の、法輪が転ぜられた。沙門、バラモン、神々、マール、梵天、あるいは誰によっても、反転することの無い〔法輪が転せられた〕、と。

続いて四天王、三十三天の神々等が次々と、地上神々と同じフレーズを復唱している²⁵¹。神々は経典の最終場面に登場し、ブッダが初めて説法を行ったことを声に出して承認している。五比丘と神々の役割を区別して説く SN 56: 11-12, Tathāgatena vutta (1-2) に登場する神々の姿を考慮するならば、法輪に向かって合掌する大勢の神々は、五比丘のような説法の対象者として表現されているのではなく、ブッダが初めて説法を行ったことを認めて、合掌している姿を表現していると解釈されよう。

なお、この記述には、先に提示した Sn: Selaṣutta 第 554 詩節の語句が引用されており、本来は初転法輪伝説とは無関係であった Sn: Selaṣutta 第 554 詩節と初転法輪伝説の接点が見受けられる²⁵²。

他方、パールフット、ボードガヤーに描かれていた法輪柱は、サーンチー第 1 塔でも初転法輪図と並行して描かれている(→ 図 36 を参照)。南門西柱正面に描かれたレリーフ鹿野苑での法輪柱の供養図と名付



図 36: サーンチー第 1 塔 南門西柱正面第 1 区画

²⁵¹ *bhummaṇaṃ devānaṃ saddaṃ sutvā cātummahārājikā devā saddaṃ anussāvesuṃ // etaṃ bhagavatā bārāṇasiyaṃ isipatane migadāye anuttaraṃ dhammacakkaṃ pavattitaṃ appativattiyaṃ samaṇeṇa vā brāhmaṇeṇa vā devena vā māreṇa vā brahmuṇā vā kenaci vā lokasmin ti //*
Saṃyuttanikāya 56: 11-12, Tathāgatena vutta (1-2) (SN v, 423, 23-27)
 「地上の神々の声を聞いて、四天王は声を発して宣言した。(以下略)」

²⁵² *Vinaya: Mahāvagga* 6, 30 (Vin i, 11, 37-12, 11)にも、神々が声に出して宣言する場面が記されている。

けられた図像は、中央に傘蓋を載せた法輪柱が大きく描かれており、その両端には合掌したり、供物も持った男女が描かれ、その上方には翼を広げた天人が花綱を掲げている。そして法輪柱の一番底辺に鹿を配置することによって、この出来事が鹿野苑での出来事であったことを示している。初転法輪図の情景である法輪と鹿が描かれているにもかかわらず、これまで積極的に初転法輪図として理解されてこなかったのは、合掌する男性の他に供物を携えた女性が描かれていることにある。もし神々を描くならば、必ず王侯貴族の姿をした男性のみで描かれていたであろう。実際に建立されたアショーカ王柱では無く傘蓋を載せた法輪柱を描くことで、初転法輪中のブッダを象徴的に表現し、在家信者が初転法輪の地であるサールナートを訪れて、礼拝供養する姿を図像化したと考えられる²⁵³。高田修[1967]は、特に古代インド仏教徒がブッダの事蹟に關係する遺物・記念物を崇拜し、それらを通してブッダとその事蹟を想見していたことを指摘している²⁵⁴。またインドの仏伝を三類型にまとめた宮治昭[1995]は、このような慣習に基づいてまとめた仏蹟・聖蹟を軸に展開する仏伝表現をその一つに挙げている。その表現はサーンチー大塔に萌芽がみられ、やがてマトゥラーやサールナートではブッダの主要な事蹟を四相図、八相図等にまとめて描く傾向が顕著になる。このような仏教徒がブッダの事蹟を図像によって想見する慣習について、仏教学からは岡野潔[1990][1999]が、古代インド仏教徒における永遠なる場所への信仰が前提としてあることを論じている。

以上のことから、パールフット、ボードガヤーではブッダが教えを説く姿として表現されていた法輪柱の図像が、サーンチー大塔の段階になると、底辺に鹿を合わせて描き、鹿野苑という具体的な場所を設定するようになった。すなわち、法輪柱は「ブッダが鹿野苑で説法を行ったこと」を礼拝者に想見させるシンボルとしての役割を果たしていると言える。このような法輪柱と鹿を描写したレリーフはカナガナハリ大塔の下段レリーフ石版にも見ることが出来る。次節では、カナガナハリ大塔における初転法輪図と法輪柱の図像表現について観察する。

²⁵³ このような聖地を巡礼する習慣はインドで古くから行われており、*Divyāvadāna* の第 26 章から第 29 章を形成する一連のアショーカ王の伝記(*Aśokāvadāna*)の第 27 章には、アショーカ王が巡礼した仏の誕生から涅槃までに縁のある 32 の事蹟が挙げられている。

²⁵⁴ 高田修[1967: 53–55]参照。

4.3

カナガナハッリ大塔の初転法輪図と法輪柱

これまで考察してきた初転法輪図の成立とその背景を踏まえて、カナガナハッリ大塔から出土した初転法輪図がどのような図像表現を保存し、伝承していたのかを最後に考察する。初転法輪図が描かれる Kanaganahalli 01 は、2009 年の研究調査段階では、南門正面付近に復元した状態で置かれていた(→資料 1 を参照)。Kanaganahalli 01 は、本来の場所が特定不能なレリーフの一つで、59 枚のレリーフ石版のうち 2 枚しか発見されていない①のタイプにあたる(→図 6 を参照)。①のタイプは、③と④のレリーフ石版を切り替える、いわばスイッチの役割を果たし、東門から南門までの四分円部分のどこかに配置していたと推測される²⁵⁵。初転法輪図は、Kanaganahalli 01 の上段区画に位置する。残念なことに Kanaganahalli 01 は破損が激しく、下段区画はレリーフの断片が一部残るのみであり、碑文と蓮弁で装飾された欄楯が彫刻されている一番下部分は発見されていない。以下にその特徴を挙げる(→図 37 を参照)。



- ① 中央に空席の椅子を置き、その下に仏足跡を描くことで、ブッダが座していることを暗示している。
- ② 椅子の背に法輪が設置されている。
- ③ 法輪の中央に獅子を描き、獅子が吼える姿(獅子吼)が描写されている。
- ④ 4人の男性(四天王)が合掌した姿勢で坐し、視線を法輪と中央の獅子の方へ向けている。

図 37: 初転法輪図
(Kanaganahalli 01 上段区画)

²⁵⁵ 序論第3節第1項(0.3.1): 上段レリーフ石版の外観的特徴を参照。

Kanaganahalli 01 に描かれた初転法輪図は、ブッダを直接表現しないという古代初期インド美術の特徴を踏襲している。空席の椅子を置き、その下に仏足跡を描くという表現は、アマラーヴァティ大塔にも類似した表現があり、ナーガールジュナコンダではその椅子の上に座すブッダの姿が描き出されている。この椅子の表現は、南インド特有の表現である。

鹿が描かれていないことで、この図像の出来事が鹿野苑という具体的な場所で起こった出来事であるのかは分からないが、上段レリーフ石版より制作年代が下る第 2 期 サータヴァーハナ時代第 3 段階(紀元後 2 世紀中～3 世紀)に設置されたアーヤカ基壇上の仏伝フリーズの仏伝場面を確認することで確定し得る。先に挙げた特徴に加えて、背景に五比丘が描き込まれている図像が南門アーヤカ基壇上の仏伝フリーズと、西門アーヤカ基壇上の仏伝フリーズに 2 例存在する。南門仏伝フリーズの初転法輪図は、出城図と舎利分配図の間に存在する²⁵⁶。もう一方の西門仏伝フリーズの初転法輪図は、降魔成道図と舎利運搬図の間に挿入されている²⁵⁷。類似表現として、アジャンター第 10 窟に描かれた初転法輪図が降魔成道図と舎利分配図の間に配置している作例が挙げられることから、Kanaganahalli 01 の上段区画に位置するレリーフは初転法輪図であると判断することが出来よう。③に挙げた法輪の中央に描かれた獅子の姿は、仏伝フリーズに描かれた初転法輪図にも表わされている(→ 図 38 を参照)。

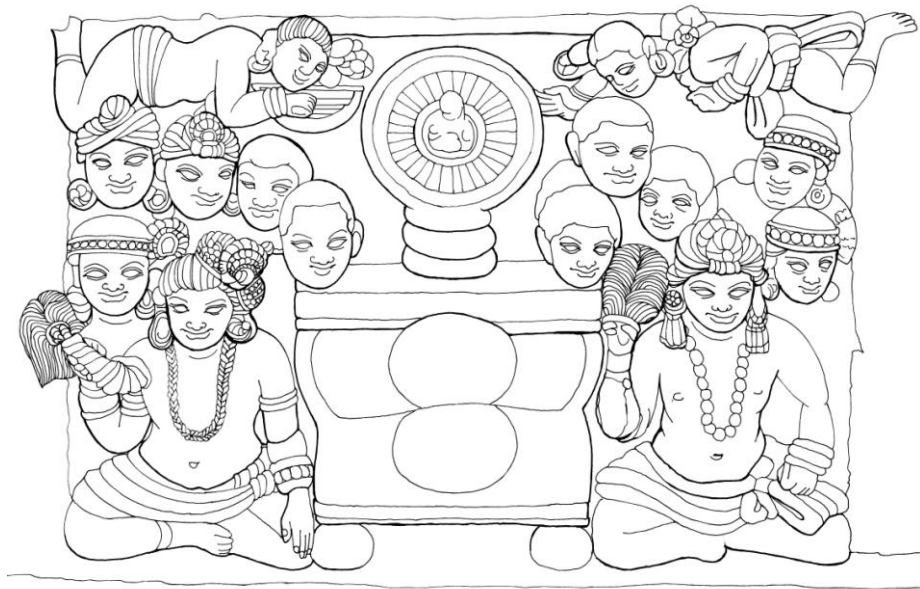


図 38: 初転法輪図 西門アーヤカ基壇上コーニス

²⁵⁶ Poonacha[2013: 430, Pl. CXXIVD]

²⁵⁷ Poonacha[2013: 431, Pl. CXXXVF]

この獅子の姿はアマラーヴァティー大塔、ナーガールジュナコンダにも見られないカナガナハリ大塔独自の表現であり、先に挙げた Sn: Nālakasutta 第 684 詩節に伝承される「彼は、仙人という名の林で、〔法〕輪を回転させるでしょう。あたかも、力を具え、鹿達を征服する獅子が吼えるように」という表現を文献に即して忠実に描写している。このようにカナガナハリ大塔の初転法輪図は、ブッダが説法する姿を強調して描き、鹿野苑を暗示する鹿には関心が向けられていないことが分かる。



図 39: 法輪柱図 下段レリーフ石板

ところが下段レリーフ石版には、法輪柱と一緒に鹿が描き込まれる表現を見ることが出来る(→ 図 39 を参照)。サー

ンチー大塔の鹿野苑での法輪柱の供養図に描かれた供養者や天人は存在しない。法輪柱と底辺に 4 頭の鹿を描いただけのシンプルな表現であるものの、情景描写に鹿を描き込むことで、サーンチー大塔と同じく法輪柱が「ブッダが鹿野苑で説法を行ったこと」を礼拝者に想見させるシンボルとしての役割を含んでいる。サーンチー大塔より開始されたこのようなブッダの主要な事蹟を象徴的に描く図像表現は、同じサータヴァーハナ王朝下で造営されたカナガナハリ大塔においても辿ることが出来る。

小結 4

古代初期インド美術にみられる初転法輪図の成立過程を整理し、その成立過程に基づき、Kanaganahalli 01 に描かれた初転法輪図の図像表現と特徴をまとめると次のようになる。

古代初期インド美術において、初転法輪伝説を図像化したものは、初転法輪図と鹿野苑での法輪柱の供養図と 2 つのタイプが存在し、両者は厳密に区別された。特に法輪柱は、もともと

初転法輪伝説とは別の背景に基づいて図像化されたものである。しかしその後、法輪柱の一番底辺に鹿を配し、この出来事が鹿野苑での出来事であることを暗示するようになり、「ブッダが鹿野苑で説法を行ったこと」を礼拝者に想見させるシンボルとして、初転法輪図とは制作意図の異なる図像表現へと展開する。

上述したこれら初転法輪伝説に関する2つのタイプの図像表現は、カナガナハリ大塔のレリーフにも認めることが出来る。カナガナハリ大塔の初転法輪図は、アジャンター前期石窟やサーンチー大塔に保存される最初期の初転法輪図を継承し、仏弟子(比丘)の姿を表すことを避け、法輪に向かって合掌する四天王だけを背景に描き込んでいる。カナガナハリ大塔特有の表現としては、法輪の中央に描かれた獅子の姿によって獅子吼を表現する図像表現が挙げられる。

第5章

下段レリーフ石版－祇園精舎布施図と舎衛城の神変図－

本章で取り上げるカナガナハリ大塔の祇園精舎布施図は、主塔の下段を円環するレリーフ石板の2ヵ所に描かれている²⁵⁸。そのうち状態の良い1つの図像に焦点を絞り、第2期サータヴァーハナ時代 第1段階(紀元前1世紀頃～紀元後1世紀)に設置されたとする下段レリーフ石板の祇園精舎布施図がどのような内容を保存しているのかを、文献資料と碑文の解読に基づき考察する²⁵⁹。また、第2節第1項(5.2.1)では、カナガナハリ大塔の祇園精舎布施図中に描き込まれる舎衛城の神変図について検討する。同主題は類例が乏しいため、パールフットの祇園精舎布施図を解明した Lüders[1963]以降の論考は見られず、広く認知されていないように思われる。そこで、文献資料の精査と、該当する図像資料(パールフット、サーンチー第1塔)の観察を行い、その要因について考察を行った後に、同じ図像表現が見られるカナガナハリ大塔の祇園精舎布施図中に描かれる舎衛城の神変図を新たにその一例として加えることで、これまでの指摘が妥当であることを明らかにしたい。

5.1

＜祇園精舎布施＞を伝える諸文献

＜祇園精舎布施²⁶⁰＞と呼ばれるエピソードの骨子は「給孤独長者 (Skt. Anāthapiṇḍada, Pā. Anāthapiṇḍika)(以下、給孤独と呼ぶ) がブッダとその弟子達とを舎衛城 (Skt. Śrāvastī Pā. Sāvattihī)

²⁵⁸ 下段レリーフ石版以外に、祇園精舎布施図と関係するレリーフ断片が2点確認される。

Poonacha[2013: 361, Pl. VLA, B]、Nakanishi and von Hinüber[2014: 96–97 (III. 2, 15, 16)]

この2つの祇園精舎布施図については、最初に Meister[2007]が画像 (Figs. 8–10) とそれに対する見解を簡潔に記している。

²⁵⁹ Poonacha[2013: 627]を参照。

²⁶⁰ 祇園精舎の遺蹟は、Gonda 県 Saheth 村に位置する。『高僧法顯傳』及び『大唐西域記』は、祇園

へと招待するために、ジェータ王子 (Skt. / Pā. Jeta) が所有している舎衛城郊外のジェータヴァナ (Skt. / Pā. Jetavana) を購入して、精舎を用意した」というものである²⁶¹。このエピソードは初

精舎の東門にアショーカ王によって建てられた2本の石柱があり、2つの石柱の柱頭にそれぞれ、法輪と牡牛が造形されていたことを記している。

『高僧法顯傳』[T. 51, No. 2085, 860b15–b16] 『大唐西域記』[T. 51, No. 2087, 899b6–b8]

また遺跡内からは、マトゥラーで製作された後に祇園精舎まで運ばれた菩薩立像（頭部を欠く）が出土している。高田修[1967: 322–323, 挿図 119]

Bala 比丘によって寄進されたその菩薩立像及び傘蓋柱には同文の碑文が刻まれており、カニシカ王治世時に、この菩薩立像が説一切有部の所有として Kosamba 堂にある経行処に造立されたことが記されている。

Lüders, List. 918, 919. = 塚本啓祥[1996: 700–701, Saheth-Maheth 2, 3]

²⁶¹ <祇園精舎布施>を伝える文献資料を収集整理し、7グループ(I～VII)に大別し以下に挙げる。

I. 初期経典（阿含・ニカーヤ）

1. *Samyuttanikāya* 1. 1: Devatāsāmyutta 5. 8, Jetavana (SN i, 33, 23–34, 6)
2. *Samyuttanikāya* 1. 2: Devaputtasāmyutta 2. 10, Anāthapiṇḍiko (SN i, 55, 10–56, 13) = 『別訳雑阿含経』(187) [T. 2, No. 100, 441a27–442a17] = 『雑阿含経』(593)「須達生天」[T. 2, No. 99, 158b24–c29]
3. *Samyuttanikāya* 1. 10: Yakkhasāmyutta 8, Sudatto (SN i, 210, 29–212, 18) = 『別訳雑阿含経』(186) [T. 2, No. 100, 440b2–441a25] = 『雑阿含経』(592)「須達」[T. 2, No. 99, 157b18–158b23]
4. *Majjhimanikāya* 143: Anāthapiṇḍikovādasutta (MN iii, 258, 1–263, 12) = 『中阿含経』「教化病経」(28) [T. 1, No. 26, 458b28–461b15] = 『増一阿含経』巻49(51. 非常品 8) [T. 2, No. 125, 819b11–820c2]

II. 仏伝文学(1) Skt.

1. *Buddhacarita*, Aśvaghoṣa 著 ch. 18, vv. 1–87 / ch. 20, vv. 1–56 = 『佛所行讃』[T. 4, No. 192, 34b6–36c6 / 38b17–40a1] ≡ 『佛本行経』第18「度寶稱品」[T. 4, No. 193, 81c17–82a6]

III. 仏伝文学(2) Jātaka 註釈文献

1. *Jātaka-aṭṭhavaṇṇanā*, Nidānakathā (Jā i. 92, 14–94, 25)

IV. 仏伝文学(3) 漢訳（インド側の資料を欠く）

1. 『中本起経』巻7「須達品」[T. 4, No. 196, 156b3–157b11]
2. 『佛説十二遊経』[T. 4, No. 195, 147a25–27]

V. 諸部派の律

1. *Vinaya: Cullavagga* (南方上座部・臥坐具犍度) VI 1, 1–5. 4, 1–10. 9, 1–2. (Vin ii, 146, 3–148, 6 / 154, 26–159, 21 / 163, 35–165, 2)
2. 『四分律』(法蔵部・房舎犍度) [T. 22, No. 1428, 938b20–941c4]
3. 『彌沙塞部和醯五分律』(化地部・臥具法) [T. 22, No. 1421, 166c10–167b19]

期經典(阿含・ニカーヤ)、諸部派の律、仏伝文学及び説話に至るまで多くのヴァリエーションがあり、それら細部の比較検討は、岩田朋子氏による一連の研究成果等が挙げられる²⁶²。様々なヴァリエーションが残る文献資料を精査すると、初期經典に説かれる祇園精舎布施の段階では、それらの諸文献は 2 系統に大別される。給孤独が生天し、給孤独天子 (Pā. *Anāthapiṇḍika devaputta*-) として再生したことを説く系統と²⁶³、給孤独が優婆塞となり、ブッダを舎衛城へ招待するに至った経緯を説く系統である²⁶⁴。前者は、*Samyuttanikāya* 1. 1: *Devatāsamyutta* に属する

-
4. 『摩訶僧祇律』(大衆部・跋渠法) [T. 22, No. 1425, 415a29–c9]
 5. 『十誦律』(説一切有部・臥具法) [T. 23, No. 1435, 243c20–251a15]
 6. *Mūlasarvāstivāda-Vinaya, Śāyanāsanavastu* (Śay-v, 10, 13–27, 17)
 7. *Mūlasarvāstivāda-Vinaya, Saṅghabhedavastu* (Sbhv i, 166, 16–181, 16) = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 [T. 24, No. 1450, 138b18–142b12] ≡ 『佛説衆許摩訶帝經』 [T. 3, No. 191, 967c7–969c27]

VI. 説話

1. 『賢愚經』卷第 10 「須達起精舎品」 [T. 4, No. 202, 418b–421b]

VII. 史伝

1. 『高僧法顯傳』卷第 1 [T. 51, No. 2085, 860c14–c17]
2. 『大唐西域記』卷第 6 [T. 51, No. 2087, 899b4–b22]

なお、仏伝文学として物語られる<祇園精舎布施>は、ブッダが初転法輪を終えて、涅槃に入るまでの間、いわゆる教化活動期間内に挿入されている。

²⁶² 初期經典における祇園精舎布施説話を比較検討した研究には、徳岡亮英[1989]、岩田朋子[2008][2009]が挙げられる。

諸部派の律では、網干善教[1997]、岩田朋子[2001][2004]、山本眞理子[2007]等がある。

仏伝文学・説話中の祇園精舎布施を取り上げたものに、岡本健資[2014]の、祇園精舎布施中に挿入される舎利弗の外道調伏譚に焦点を絞った論究がある。

翻訳研究では、丹治昭義[1997]、平岡聡[2011]、岩田朋子[2011]があり、本研究で参照した。

また、舎衛城及び祇園精舎の現地調査に関しては、赤沼智善[1981]が発掘史を記している。さらに、関西大学が 1986 年より 3 年間に及ぶ、インド考古局と共同で実施した総合学術調査の結果を刊行している。この調査によって初めて、F-II 調査区の僧院遺構の下層において北方黒色磨研土器 (Northern Black Polished Ware: the 4th-3rd century BCE) の破片が出土したことを報告している。

²⁶³ 給孤独が死後に再生する天界は、『別訳雑阿含經』(187) では「天上」、『雑阿含經』(593) では「兜率天」、『増一阿含經』 非常品 (8) では「三十三天」と各經典によって異なる。

²⁶⁴ SN 1. 10: *Yakkhasamyutta* 8, *Sudatto*、『別訳雑阿含經』(186)、『雑阿含經』(592) が後者の系統に属する。

第5章 第8節 Jetavana に説かれる詩節を核にして展開する²⁶⁵。以下に該当する給孤独天子が唱えた詩節を提示する。

idaṃ hitaṃ jetavanaṃ || isisaṅghanisevitaṃ ||

āvutthaṃ dhammarājena || pītisañjananaṃ mama || ||

Samyuttanikāya 1. 1: Devatāsāmyutta 5. 8, Jetavana (SN i, 33, 23–24)

ここにジェータヴァナが設けられた。聖仙達が〔修行に〕専念するところであり、ダンマの王(ブッダ)が住んでいる。私に喜びをもたらすところである。

この詩節が含まれる『別訳雑阿含経』第187経、*Majjhimanikāya* 第143経 (Anāthapiṇḍikovādasutta)、及び『増一阿含経』非常品 第8経では給孤独が生天する前に「臨終間際の給孤独に対して、舍利弗が説法する」というエピソードが付属している²⁶⁶。いずれも給孤独天子が上記した詩節を唱えていることを考慮すれば、「布施の果報による生天」が前者

²⁶⁵ 提示した詩節に続き、以下の詩節が説かれる。

kammaṃ vijiā ca dhammo ca || sīlaṃ jīvitam uttamaṃ ||

etena maccā sujjhanti || na gottena dhanena vā || ||

tasmā hi paṇḍito poso || sampassaṃ attham attano ||

yoniso vicine dhammaṃ || evaṃ tattha visujjhati || ||

sāriputto va paññāya || sīlena upasamena ca || yo pi pāragato bhikkhu || etāva paramo siyāti || ||

Samyuttanikāya 1. 1: Devatāsāmyutta 5. 8, Jetavana (SN i, 34, 1–6)

行為と明知と教え、戒めと最上の生活、人々はこれによって清められる。氏姓や財産によって〔清められる〕のではない。それゆえに、賢明なる人は、自分の利益を見つつ、正しく教えを考察しなさい。このようにして、そこに清まるのである。サーリプッタのように、知恵と戒めと寂靜によって、彼岸に至った比丘もまた、これだけで、最上者であろう。

²⁶⁶ 『別訳雑阿含経』(187)では舍利弗ではなく、ブッダが病床の給孤独を見舞い、説法する。

また、SN 1. 2: Devaputtasāmyutta 2. 10, Anāthapiṇḍiko と『雑阿含経』(593)は、給孤独天子が登場して詩節を唱えるのみで、舍利弗の病氣見舞いを欠く。このことは、病床の給孤独を見舞い説法する経典が本来、個別に伝承されていたことを示唆する。

岩田朋子[2008][2009]は、『雑阿含経』にはジェータヴァナとは無関係に、病床の給孤独を見舞い説法するのみを記した複数の経典(『雑阿含経』(1030–1032))が存在することを指摘し、諸経典の臨終説法内容の比較分析、順序構成を提示しており、＜舍利弗による見舞いと説法＞と＜給孤独の病死と生天＞が個別に伝承されていた可能性を示している。

の系統における主題であり、そのことが生前の給孤独による祇園精舎の布施を前提にして説かれたと考えられる²⁶⁷。

一方で、後者の系統では、給孤独が王舎城郊外のシータヴァナでブッダと出会い舎衛城へ招待するまでを記しており、細かい異同はあるものの、内容に大きな差異は無い²⁶⁸。しかしながら、これら両系統が説かれる段階では、いかにして給孤独が舎衛城郊外のジェータヴァナを購入し、準備したのかを語る記述は見られない。初期経典では唯一、両系統が合わせて説かれる説一切有部所伝の『中阿含経』第28経「教化病経」にジェータヴァナを購入する場面が記されている。この経典では、病床にある給孤独が舎利弗の説法によって生天せずに快復する。

「我れ教化病法を聞き、苦痛即ち滅し、極快樂を生ず。尊者舎梨子、我れ今、病差え、平復するが故の如し。尊者舎梨子。我れ、往昔の時、少しく爲す所有り」

『中阿含経』「教化病経」(28) [T. 1, No. 26, 459c7-9]

続いて回想場面に切り替わり、給孤独がブッダを舎衛城へ招待し、ジェータヴァナに精舎を建立するまでが舎利弗に語られる。その最終場面を順に追うと、

(1) 給孤独が夏安居を過ごすブッダとその弟子たちを舎衛城に招待する。

我即叉手白曰。世尊。願受我請。於舎衛國而受夏坐。及比丘衆。

『中阿含経』「教化病経」(28) [T. 1, No. 26, 460c8-10]

(2) 給孤独がジェータ王子からジェータヴァナを購入する。

吾不賣園、至億億布滿。我即白曰。童子。今已決斷價數。但當取錢。

『中阿含経』「教化病経」(28) [T. 1, No. 26, 461a6-7]

²⁶⁷ ところが、諸部派の律では異なり、ヴィハーラの布施による果報を南方上座部所伝の律では般涅槃とする。Vinaya: Cullavagga vi, 9, 2 (Vin ii, 164, 36-37)

これに関しては、岩田朋子[2003][2004b]が諸部派におけるヴィハーラの布施による果報を広範囲に及んで調査した論究によって明らかになった。

²⁶⁸ SN 1. 10: Yakkhasamyutta 8, Sudatto は、給孤独が舎衛城にブッダを招待するという最後の記述を欠く。

また、給孤独が夜半に起きて、王舎城郊外のシータヴァナへ向かう間の出来事に関しては徳岡亮英[1989]が、諸文献の記述を比較し検討している。

(3) 金貨をジェータヴァナに敷き詰めるが、少し足りない場所がでてしまう。

我即入舎衛國、還家取錢。以象馬車、舉負輦載。出億億布地、少處未遍。

『中阿含經』「教化病經」(28) [T. 1, No. 26, 461a11–13]

(4) その空地にジェータ王子が門を建てる。

長者且止。莫復出錢布此處也。吾於此處造立門屋、施佛及衆。

『中阿含經』「教化病經」(28) [T. 1, No. 26, 461a22–23]

(5) ジェータヴァナに房舎と小房が完成する。

我即、於此夏、起十六大屋六十拘絺。

『中阿含經』「教化病經」(28) [T. 1, No. 26, 461a25–26]

となり、我々の知る祇園精舎布施の基本的な内容を全て揃えている。ジェータヴァナに建てられた建造物に関しては、房舎と小房のみが記され具体的な名前は見られない。それについては、諸部派の律に詳細な記述があり、南方上座部所伝の律 *Vinaya: Cullavagga* (4, 1–10) は、上記した『中阿含經』「教化病經」の最終場面 (1)–(5) と同じ内容を伝承しつつも、最後にジェータヴァナに造られた建造物が種類別に列挙されている²⁶⁹。以下に *Vinaya: Cullavagga* の該当箇所を提示する。

atha kho anāthapiṇḍiko gahapati jetavane vihāre kārāpesi, parivenāni kārāpesi, koṭṭhake kārāpesi, upaṭṭhānasālāyo kārāpesi, aggisālāyo kārāpesi, kappiyakuṭṭiyo kārāpesi, vaccakuṭṭiyo kārāpesi, caṅkame kārāpesi, caṅkamanasālāyo kārāpesi, udapāne kārāpesi, udapānasālāyo kārāpesi, jantāghare kārāpesi, jantāgharasālāyo kārāpesi, pokkharāṇiyo kārāpesi, maṇḍape

²⁶⁹ 『中阿含經』「教化病經」では、先に舍利弗が現場監督として派遣される。

『中阿含經』[T. 1, No. 26, 460c18–20]

「爾時、世尊、即差尊者舍利子。遣尊者舍利子、令見佐助」

Vinaya: Cullavagga には、この記述は見られない。諸部派の律において、舍利弗が祇園精舎の現場監督として派遣される事例と、されない事例と2系統があることが岩田朋子[2004a]によって指摘されている。それに従えば、『中阿含經』「教化病經」は、『摩訶僧祇律』、『五分律』、『十誦律』、『根本説一切有部律』と同じ系統に属する。

kārāpesi.

Vinaya: Cullavagga VI, 4, 10 (Vin ii, 159, 16–21)

そして、長者アナータピンディカは、ジェータヴァナに複数の房舎を造らせた²⁷⁰。小室を造らせた。倉庫を造らせた。講堂を造らせた。火堂を造らせた。食堂を造らせた。廁を造らせた。経行処を造らせた。経行堂を造らせた。井戸を造らせた。井戸堂を造らせた。温浴室を造らせた。温浴室堂を造らせた。蓮池を造らせた。〔野外の〕会堂を造らせた。

ここでは 15 種類の建造物が、すでにブッダ在世時からジェータヴァナにも建てられていたことになっている。また、祇園精舎完成時の建造物の種類や数は諸部派の律によって異同が認められる²⁷¹。次に具体的な建造物の記述があるのは、『五分律』(舍利弗。然後以繩量度、作經行處、講堂、温室、食厨、浴室及諸房舎。[T. 22 No. 1421, 167b17–18])である。『十誦律』、*Śayanāsanavastu*、*Saṅghabhedavastu*、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』、『佛説衆許摩訶帝經』には、『中阿含經』と同じく房舎と小房のみで、その他の具体的な建造物の名は記されない。臥坐具犍度での主題は律蔵制作時の僧団において住居や寝具を如何に取り扱うべきかであり、そのことを記すために祇園精舎布施のエピソードに因んで当時使用されていた建造物の名前が付加されたと理解出来る。

²⁷⁰ *Vinaya:* Cullavagga の該当箇所では、給孤独が造らせた建造物はすべて複数形で記されるが、これ以降は省略する。

²⁷¹ また *Paramatthajotikā II* にも関連する記述があり、祇園精舎においてブッダが過ごす場所として、大香堂、Karerī 円形講堂、Kosamba 堂、Candana 円形堂の 5 つの建造物が挙げられている。

nivāsāgāraṃ pana bhagavato jetavane mahāgandhakuṭi - karerimaṇḍalamāla - kosambakuṭi - candanamālādi anekappakāraṃ, taṃ sandhāya na yujjati.
Paramatthajotikā II (Pj II, 403, 2–4)

現地調査の報告では、サヘート村にある祇園精舎址に残る伽藍群のうち、最も古い寺院 No. 2 が香堂、そして寺院 No. 3 が Kosamba 堂と同定されている。そして菩薩像の寄進文から、経行処があったことも確認出来る。本論: 註 256 を参照。

ジェータヴァナの門に関しては、ジェータ王子が 9 コーティの財産を投じて建設させたことが *Jātaka* No. 229: *palāyijātaka* の序文に別記されている。

mahājanaparivuto jetavanaṃ gacchanto Jetarājakumārena navakoṭṭhānaṃ vissajjetvā kārītaṃ jetavanadvārakoṭṭhakaṃ disvā ...
Jātaka No. 229: *palāyijātaka* (Jā ii, 216, 18–20)

また、第2節第1項(5.2.1)に論じる祇園精舎布施図中に描かれる舎衛城の神変図について、両者の文献資料上の接点を探ると、祇園精舎布施を伝承する初期経典及び諸部派の律には、途中に挿話として収められたり、連続して説かれるような舎衛城の神変の痕跡は見られない。しかしながら、*Buddhacarita* 第20章(ch. 20, vv. 1–56 = 『佛所行讃』受祇桓精舎品第二十)に語られる祇園精舎布施と同じ章の最後に<舎衛城の神変> (ch. 20, vv. 52–53²⁷²)が記されていることには留意すべきであろう²⁷³。この興味深い現象は、本来、個別に説かれていた祇園精舎布施と舎衛城の神変が仏伝文学として物語られる場合、同地域で起こった出来事として編集されたことを示している。そして、それがアシュヴァゴーシャ(*Aśvaghoṣa*, Chi. 馬鳴)の作品中に見られることは、少なくとも彼の活動期であるおよそ紀元後1世紀～2世紀前半頃のガンダーラ地域の仏伝文学を反映していると言える²⁷⁴。

以上のような仏伝文学形成の萌芽が、古代初期インド美術における祇園精舎布施図の描写に見出されると推測しつつ、次節からは同主題に対する図像資料の観察に進むことにしたい。

5.2

古代初期インド美術における祇園精舎布施図と舎衛城の神変図

<祇園精舎布施>のエピソードが図像によって伝承され始めるのは、バールフット (*Śunga*, 150 BCE: 欄楯装飾)、ボードガヤー (*Śunga*, the 1th century BCE: 角柱 No. 10 外側)、サーンチー第一塔 (*Sātavāhana*, the early 1th century CE: 北門東柱正面第2区画) 等の古代初期インド美術からであったことが知られている(→ 表6を参照)²⁷⁵。

²⁷² 『佛所行讃』受祇桓精舎品第二十の対応箇所は[T. 4, No. 192, 39c16–39c23]である。

²⁷³ 梶山雄一ほか(編)[1985: 235]より借用。第20章 第52詩節

「大主の主たるかの王が〔ブッダを〕礼拝したと知って他の異教徒たちは、その場で十力〔を具せるブッダ〕に神通の試合を挑んだ。地の守護者〔たる王〕に依頼されたときに、自己を克服せる仙人(ブッダ)は神通を示すことに同意された」

²⁷⁴ *Buddhacarita* の著者であるアシュヴァゴーシャについては梶山雄一ほか(編)[1985: 478]を参照。

²⁷⁵ ガンダーラ地域出土の祇園精舎布施図と確定し得る作例は僅か2例である。

高田修[1967: Pl. 17, 18]、栗田功[2003: Fig. 329, 327]に挙げられているが祇園精舎布施図とする決定的な場面を欠く。高田修[1967]は、その祇園精舎布施図を出土地不明(現在はペシヤーワール博物館

表 6. 祇園精舎布施図：インド内陸部の主な作例

出土地	所在(現所在地)	年代	出典
Bhārhut → 図 40	南東四分円欄楯第 15 柱 (P14)	Śuṅga: 150 BCE	Coom1956. Fig. 67.
Bodhgayā	第 10 柱外側	Śuṅga: the 1th century BCE	Coom1935. Fig. 51–2.
Sāñcī → 図 42	第 1 塔北門東柱正面第 2 区 画	Sātavāhana: the early 1th century CE	MF. Pl. 34, a2.
Kanaganahalli → 図 43	下段レリーフ石版	Sātavāhana: ca. the 1th century BCE / CE	MAI106. Pl. LV, A. N. 3430.
Kanaganahalli	下段レリーフ石版	Sātavāhana: ca. the 1th century BCE / CE	MAI106. Pl. LV, B. N. 3701.
Amarāvātī	アマラーヴァティー考古 博物館: No. 405.	Sātavāhana: the 2nd century CE	Zin2010. Fig. 1.
Amarāvātī	マドラス州立博物館: No. 147.	Sātavāhana: the 2nd century CE	Burgess. Pl. 12, 3. Sivaramamurti. Pl. 35, 2. Zin2010. Fig. 3.
Amarāvātī	アマラーヴァティー考古 博物館: No. 62.	Sātavāhana: the 2nd century CE	GS. Pl. 41. 全集 13. 挿図 104. Zin2010. Fig. 2.

まず初めに、どのような表現によって祇園精舎布施図と同定されるのかを、パールフットの
図像を解明した Lüders[1963]の解説に基づいて確認しておこう。(→ 図 40 を参照)

蔵) ではあるものの、様式的に最も遡るべきガンダーラ美術の作例の一つに位置付けている。

もう一例は、マルダーン出土の作例が現存する(カラチ・パキスタン国立博物館蔵, Inv. No. 50)。
図像表現と構図は、両者とも全く同じである。奈良国立博物館(編)[1988: 77, Pl. 44]

但し、それ以後のガンダーラ地域出土の作例が未発見であることや、仏伝文学に属する文献資料
が僅かであることを考慮すると、祇園精舎布施のエピソードをガンダーラ地域では仏伝文学や説話
として理解する意識が希薄であったと推測される。

3 箇所記された碑文のうち、下部の碑文によってこのレリーフが祇園精舎布施の場面を画像化していることが分かる²⁷⁶。図像は一図二景の表現形式をとる。以下にその特徴を挙げる。

1. ジェータヴァナを購入する： 円形区画の右半分に1場面目が描かれている。給孤独は荷車の左横に立ち、その前には2頭の雄牛が横臥している。一人の男性が荷車から金貨を下ろしている間に、別の男性は金貨を背中に載せて敷地に運んでいる。座っている2人の男性達は、中央に刻印が押された正方形の金貨を地面に敷き詰めている。



図 40: パールフット 南東四分円欄楯第 15 柱 (P14)

2. ジェータヴァナを譲渡する： 円形区画の左半分には2場面目の給孤独が水差し(Skt. *bhṛṅkāra*-)を持って再度登場し、見えざるブッダの両手へ水が注がれている²⁷⁷。その反対側では

²⁷⁶ Lüders[1963: 105] B32: *Jetavana Anādhapeḍiko deti koṭisaṃthatena ketā* Trans. Anādhapeḍiko (Anāthapiṇḍika) presents the Jetavana, having bought it for a layer of crores.
塚本啓祥[1996: 561–562, Bhārhut 46]

「Anādhapeḍika (Anāthapiṇḍika 給孤独) は敷き詰められたコーティ(10,000,000)〔の金貨〕と交換して、Jetavana を寄進する」

²⁷⁷ 祇園精舎布施図とは別に、水差しで水を注ぐ行為によって譲渡を表現した図像はカナガナハリ大塔上段レリーフ石版 No. 39、と上段レリーフ石版 No. 59 にも確認される。
荒牧/Dalayan/中西[2011: 81, 91]、Poonacha[2013: 418, Pl. CXII A / 415, Pl. CIX A]

この行為は古代インドの慣習に由来し、それが仏教文献や図像にも表現されることが、阪本(後藤)純子[2008: 93]によって指摘されている。図像表現に関しては、パールフットとガンダーラ地域の祇園精舎布施図、サーンチー第1塔のヴェッサンタラ・ジャータカ図が挙げられている。阪本(後藤)純子[2008: 93, n. 46]

『四分律』[T. 22, No. 1428, 941b19–b22]

「鉢持金瓶授水已、白佛言。我以此祇桓園奉上世尊、唯願受之。佛言。居士。汝可持此園奉佛及四方僧」

mahāseṭṭhi suvaṇṇabhiṃkāraṃ ādāya dasabalassa hatthe udakaṃ pāteṭvā “imam

6人の男性達が立っている。彼等のうちの1人は合掌していて、2人目は衣を振って波立たせ、3人目は指笛を鳴らして、喜びを表現しており、給孤独がブッダにジェータヴァナを譲渡する場面であることが分かる。その周囲には、碑文によって Kosamba 堂²⁷⁸と香堂²⁷⁹と知られる2つの小房が描かれている。

パールフットの図像表現を観察すると、祇園精舎布施図として図像化されるのは、給孤独によるジェータヴァナの購入と、ブッダへの布施場面であり、従ってそれら2場面が祇園精舎布施を物語る場合の主題であったと言える。

5.2.1

古代初期インド美術における舎衛城の神変図の図像表現

次いで、左下の Kosamba 堂の右側に果実を付けたマンゴー樹が描かれていることに注目したい。(→ 図 41 を参照)。マンゴー樹の根元は欄楯に取り囲まれ、台座が設置されている。伐採を免れて目立つ場所にあるマンゴー樹について、リューダースはカニングハムの意見に賛同して、舎衛城の神変に記される Gaṇḍamba 樹 (ガンダのマンゴー樹: 以下、マンゴー樹と呼ぶ) と同定し²⁸⁰、この図像の舞台設定が舎衛城郊外の祇園精舎であることを暗示させるものであると解釈している²⁸¹。

jetavanavīhāram āgatānāgatassa cātuddisassa buddhapamukhassa saṃghassa dammīti” adāsi.

Nidānakathā (Jā. i, 93, 13–15)

大商人は黄金の水差しを持って、十の力を有する人(ブッダ)の両手に水を注いで、「私は、このジェータヴァナの精舎を、過去未来の、四方の、ブッダを先頭とする僧団に与えまう」と〔言って〕与えた。

その他、*Buddhacarita* ch. 20, v. 3 = 『佛所行讃』[T. 4, No. 192, 38b27–b28]、*Saṅghabhedavastu* (Sbhv i, 180, 28–181, 7) = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』[T. 24, No. 1450, 142a27–142b5] ≡ 『佛説衆許摩訶帝経』[T. 3, No. 191, 969b11–17]等にも見られる。

²⁷⁸ *kosabak[u]ṭi* Lüders[1963: B33]

Kosambakuṭi < Skt. *Kauśāmbakuṭi* はブッダによって居住された房舎の1つ(DPPN I, p. 691)。赤沼智善[1981]は、コーサンバ樹がその戸口に立っているから、その名になったと理解している。Lüders[1963: 108]は、小房(Pā. *kuṭi*-)がある *Kauśāmbi* 出身者によって建設されたという事実から、おそらくその名前を被ったのだらうとする。

²⁷⁹ *gadhakuṭi* Lüders[1963: B34]

²⁸⁰ PED s.v. *Gaṇḍamba*-, N. of the tree, under which Gotama Buddha performed the double miracle. < *Gaṇḍa*

パールフットに表されるマンゴー樹は、サーンチー大塔のように個別に表現されるのではなく、祇園精舎布施図の一部にマンゴー樹が描かれている為に主題から外れ、あまり意識されてこなかった作例であるが、すでにリュエダースは舎衛城の神変説話の舞台に着目し、*Sarabhamigajātaka* (No. 483) の序文では「舎衛城の城門のところにある *Gaṇḍamba* 樹の下で、(*sāvattihināgaradvāre gaṇḍambarukkhāmūle* : Jā iv, 264, 6–7)」と、舎衛城にその舞台が設定されていたが、『高僧法顯傳』には「ジェータヴァナの東門から出て北方向に 70 歩進んだ道の西〔側〕²⁸²」と、少なくとも 4 世紀にはその舞台が舎衛城郊外に据えられていることから、パールフットの祇園精舎布施図中に舎衛城の神変説話の舞台も合わせて描かれていることに理解を示している²⁸³。

次に観察するサーンチー大塔でも、同様の解釈に基づく両者の配置が見取れるので、続けて取り上げる。サーンチー大塔では、注目すべきことに祇園精舎布施図と舎衛城の神変図が北門東柱にまとめて描かれている。サーンチー第 1 塔北門東柱正面の第 1 区画に位置するレリーフが舎衛城の神変図で



図 41: パールフット
南東四分円欄楯第 15 柱(P14)
(部分拡大)

+ amba

Sarabhamigajātaka の序文には、ガンダ(*Gaṇḍa*)という名の王園の番人がブッダに布施したマンゴーの種から生じたマンゴー樹の下で双神変が現ぜられたことを記す。(Jā iv, 264, 28–265, 9)

²⁸¹ Cunningham[1962: 87]、Lüders[1963: 106]

肥塚隆[1975: 93]は、*Gaṇḍamba* 樹には特定していないが、聖樹であると同時に精舎を訪れたブッダを暗示すると解釈している。

²⁸² 『高僧法顯傳』[T. 51, No. 2085, 860c18–19]

「出祇洹東門北行七十歩道西。佛昔共九十六種外道論議」

なお、舎衛城とジェータヴァナとの距離は、1200 歩ある。「出城南門千二百歩道西。長者須達起精舎」『高僧法顯傳』[T. 51, No. 2085, 860b14–15] 現在遺構が残る祇園精舎址から舎衛城の城址までの距離は 450m である。塚本啓祥[1996: 31–32]参照。

²⁸³ その他、『根本説一切有部毘奈耶雜事』[T. 26, No. 1451, 331a4–5] と *Divyāvadāna* (Divy, 155, 17–20) は神変対決の舞台が、舎衛城とジェータヴァナの間であるとする。平岡聡[2007: 277]を参照。

あり、その下の第2区画に祇園精舎布施図が配置されていることが分かる(→ 図42を参照)。
 サーンチー大塔の祇園精舎布施図はバールフットとは異なり、一図一景をとって、譲渡場面のみが表現されている。舎衛城の神変図は、中央にマンゴー樹と台座が設置されており、舎衛城の神変の中でもマンゴー樹の瞬間的な成長の場面を描いた最初期の舎衛城の神変図であると解釈されている²⁸⁴。舎衛城の神変説話にはブッダが現出させる複数の神変が記されており、神変の種類や表現は文献資料によって異なる²⁸⁵。それら種々の神変については、宮治昭[1971][2002]、李柱亨[1991]、福山泰子[2014]、杉本瑞帆[2017]等によって以下の3つのタイプに整理されているので提示したい²⁸⁶。

²⁸⁴ バールフットにも舎衛城の神変図と比定される図像が存在する。Coomaraswamy[1956: fig. 31]、宮治昭[2002: 6-7]を参照。

²⁸⁵ <舎衛城の神変>を伝える文献資料を収集整理し、4グループ(I~IV)に大別し以下に挙げる。

I. Pāli 註釈文献

1. *Jātaka* No. 483: Sarabhamigajātaka (序文) [Jā iv, 263, 6-267, 15] = *Jātaka* No. 29: Kaṇhajātaka (序文) [Jā i, 193, 20-194, 4]
2. *Dhammapadāṭṭhakathā* 14, 2 (=181): Yamakapāṭihāriyavatthu [Dhp-a iii, 199, 9-230, 14] ≡ 『法句譬喻經』第30「地獄品」[T. 4, No. 211, 598c1-599c18]

II. 諸部派の律

1. 『四分律』(法蔵部・房舎犍度) [T. 22, No. 1428, 946b13-951b5]
2. 『根本説一切有部毘奈耶雜事』第26 [T. 26, No. 1451, 329a8-333c13]

III. 仏伝文学

1. *Buddhacarita*, Aśvaghōṣa 著, ch. 20, vv. 52-53 = 『佛所行讃』第20「受祇洹精舎品」[T. 4, No. 192, 39c16-23] ≡ 『佛本行經』第20「現大神變品」[T. 4, No. 193, 83c27-87a3] ≡ *Divyāvadāna* No. 27: Aśokāvadāna (Divy, 394, 3 / 401, 13-20) = 『阿育王傳』[T. 50, No. 2042, 104a23 / 105b23-25] = 『雜阿含經』[T. 2, No. 99, 167b29-c1 / 169c16-21] = 『阿育王經』[T. 50, No. 2043, 140a23-29]

IV. 説話

1. 『佛説義足經』第10「異学角飛經」[T. 4, No. 198, 180c4-181c21]
2. *Divyāvadāna* No. 12: prātihāryasūtra (Divy, 143, 1-166, 28)
3. 『賢愚經』卷14「降六師品」[T. 4, No. 202, 360c14-366a11]
4. 『菩薩本生鬘論』第4「最勝神化縁起」[T. 3, No. 160, 334c25-336c11]

²⁸⁶ 李柱亨[1991: 1, 24-30]、及び宮治昭[2002: 6]を参照。

- (1) マンゴー樹の瞬間的な成長²⁸⁷、
→ マンゴー樹の奇跡
- (2) 身体の上下から火と水を出す神変
→ 双神変 (Skt. *yamakaprātihārya*)
- (3) 複数の化仏を出だして遍満させる神変
→ 千仏化現 (Skt. *mahāprātihārya*)

である。このうち(1)に挙げた〈マンゴー樹の奇跡〉は、説一切有部所伝の律や *Divyāvadāna* 等には言及されず、南方上座部所伝の *Jātaka* の注釈書や史書に引用箇所が散見され²⁸⁸、南伝の伝承に特有な神変であることが知られている²⁸⁹。李柱亨[1991: 36]はこの引用箇所の定型表現に着目し、それが最も簡素型の南伝(Pāli Tradition)における舎衛城の神変説話に対する理解であったと指摘している。

そして、その下段には、続けて祇園精舎布施図が描かれているが、パールフットとは異なり、一図一景をとって、譲渡場面のみが表現されている。この配列は偶然的ではなく、古代初期インド美術の配列傾向に基づき、舎衛城郊外で起こった個々の出来事が北門東柱

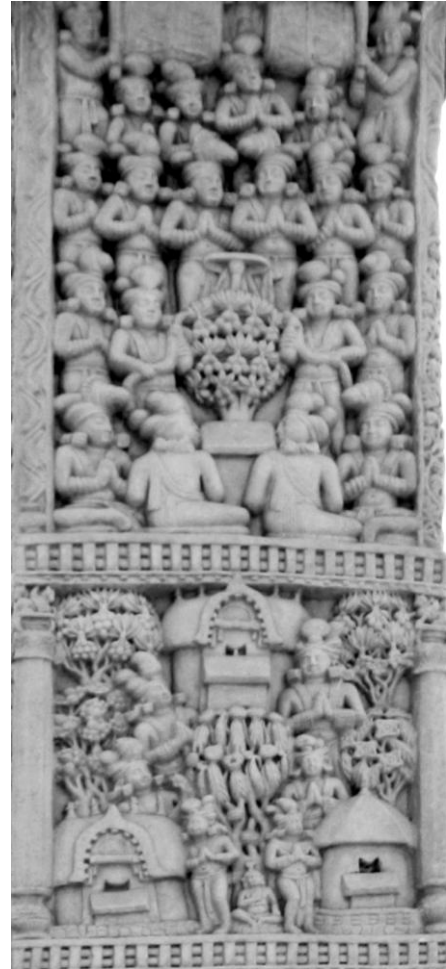


図 42: サーンチー第1塔
北門東柱正面第1区画、第2区画

²⁸⁷ 宮治昭[2002: 6]は、マンゴー樹の神変と双神変とを分けて、3タイプに分類している。

²⁸⁸ *Milindapañha* (Mil, 349, 20–21), *Nidānakathā* (Jā i, 77, 24–25 / 88, 20), *Mahāvamsa* (Mhv ch. 17, v. 44. ch. 30, vv. 81–82. ch. 31, v. 99) Lüders[1941: 63, n. 2]参照。

いずれの引用箇所も、双神変が *Gaṇḍamba* 樹の下で現ぜられたことのみを記す。

²⁸⁹ Lüders[1941: 66]、Schlingloff[2000]、及び宮治昭[2002: 6]は、南伝に記される〈マンゴー樹の奇跡〉が最も古い舎衛城の神変説話の表現であるとする。

中川正法[1982]は諸経典の内容を比較分析した結果、舎衛城の神変説話は、*Jātaka*, No. 483 の序文に記されるエピソードが基になり、それが取り出されて、律や説話として発展したとする。

Schlingloff[2000]は、それがパールフット、ボードガヤー、サーンチーの図像に描写されていることを指摘したうえで、説一切有部所伝(MSV Tradition)の舎衛城の神変説話はマンゴー樹を *Kāṇḍikāra* 樹と *Asoka* 樹に置き換えて記しているとする。Schlingloff[2000: 499–500]を参照。

にまとめて表現されていることを Marshall and Foucher [1940: 181, 201, 235]や宮治昭[2002]が指摘している²⁹⁰。

以上のことを把握したうえで、次節では、カナガナハッリ大塔の祇園精舎布施図の図像表現を考察する。

5.3

カナガナハッリ大塔に描かれる祇園精舎布施図と舎衛城の神変図

本章で取り上げるカナガナハッリ大塔の祇園精舎布施図がどのような内容を保存しているのかを検討する²⁹¹。まず初めに、その特徴を挙げる。(→ 図 43 を参照)

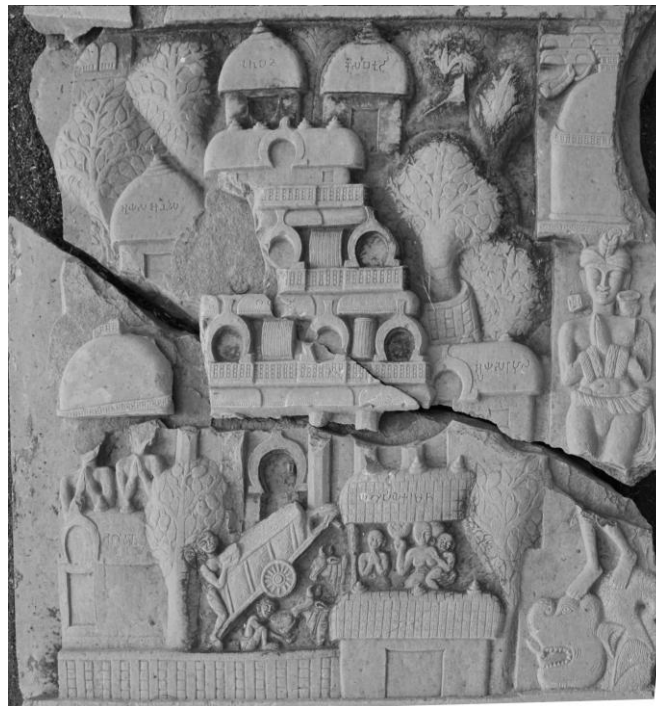


図 43: 祇園精舎布施図 下段レリーフ石版

²⁹⁰ より踏み込んで解説するならば、フーシェは、とりわけ古代初期インド美術に見られる同じ地域や場所で起こった個々の出来事をまとめて描く配列傾向を Topographical links (場所優先配列)、それに対してガンダーラ地域の仏伝図等が時間軸に沿って配列される傾向を Chronological order (時間優先配列)と呼んで両者の画面構成や表現方法に大きな特色があることを述べている。詳しくは宮治昭[1995]を参照。

²⁹¹ Poonacha[2013: 361, Pl. LVA]

- ① ジェータヴァナを購入する：一番下の右端にジェータヴァナへ入る門があり、入り口のすぐ左側に荷車が止まっている。そこで、2人の作業者と2頭の雄牛がいる。作業者の1人が金貨を荷車から降ろし、もう1人が座り込んで地面に金貨を敷き詰めている。
- ② ジェータヴァナを譲渡する：左端にブッダのための房舎が建てられており、その手前にマンゴー樹が生えている。その房舎の上には給孤独とジェータ王子が、ブッダの房舎に向かって合掌している。
- ③ 譲渡後の修行生活：門を入ってすぐの場所には、右手で蓮の花を掲げ、左手で息子ピヤンカラを抱いたヤクシニーが立っている。その横に立っているヤクシャは合掌し、彼ら全員でブッダや仏弟子達の唱える教えに耳を傾けている。

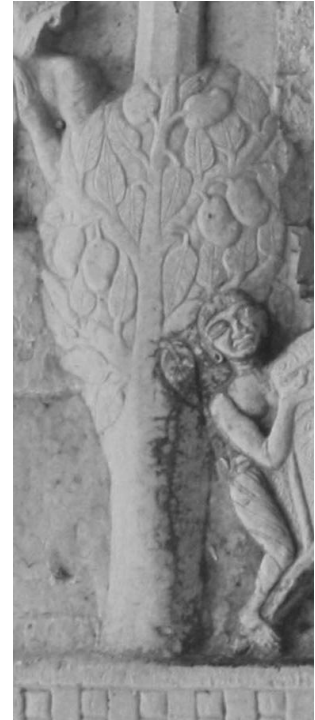


図 44: 祇園精舎布施図
下段レリーフ石板(部分拡大)

祇園精舎布施図の中には、8箇所には碑文が確認される²⁹²。そのうち3箇所の碑文は、ブッダ(世尊) (*bhagavato*²⁹³)、アーナンダ(*ayasa ānadasa*²⁹⁴)、ラーフラ (*ayasa rāhulasa*²⁹⁵) の房舎であることを示すためにそれぞれの房舎の屋根に所有者の名前が刻まれている²⁹⁶。そして、他の建造物の名が4箇所に刻まれている。最も上

²⁹² 下段レリーフ石板に描かれる祇園精舎布施図の上枠には、このレリーフの寄進者名が刻まれているが、破断しており一部分のみが解読されている。解読によれば、比丘尼がこのレリーフの寄進者であった。Nakanishi and von Hinüber[2014: 97 (III. 2, 17)]

²⁹³ Nakanishi and von Hinüber[2014: 99 (III. 2, 23)]

²⁹⁴ Nakanishi and von Hinüber[2014: 97 (III. 2, 18)]

²⁹⁵ Nakanishi and von Hinüber[2014: 99 (III. 2, 22)]

²⁹⁶ 通常、図像に対する碑文は、その図像の縁や下部に寄進者名や主題が刻まれることが多い。

パールフットに建物の名前がその建物の屋根に刻まれている例 Lüders[1963: 93–94, B21, B22] はあるが、レリーフ内に描かれた造形に対する所有者の名前を *sg. gen.* で直に記す例は稀である。

類似例としてはサーンチー第3塔 (Lüders, List. 666. = 塚本啓祥[1996: 868, Sāñci 795])、サットダーラ第2塔 (Lüders, List. 152, 153. (on steatite box No. 1, 2) = 塚本啓祥[1996: 935–936, Satdhāra1, 2])、ソーナリー第2塔 (Lüders, List. 156. (on crystal box No.1), 157–160. (on steatite box No. 2–5) = 塚本啓祥[1996: 939–940, Sonāri 3–7]) 等から出土した舍利容器に記される碑文がある。

いずれも紀元前3世紀頃のもので、舍利容器の蓋の内側、外側、頂部等に、舍利容器に収められた舍利の人名が *sg. gen.* の形で刻まれている。

部にある2つの建造物の屋根には、井戸(*utupāno*²⁹⁷)と、Kosamba 堂(*kosabakuṭi*²⁹⁸)と各々に記されている。Kosamba 堂のすぐ右側には、経行(*caka(mo)*²⁹⁹)と側面に記された長方形の経行処が描かれており、表面に3足の仏足跡を描くことで、経行を行う様子が表現されている³⁰⁰。中央に特別大きく描かれた建造物の2階の屋根には、香堂(*ga(dha)[kuṭi]*³⁰¹)と記されているのが認められる。パールフットではKosamba 堂と香堂のみが記されていたのに対して、カナガナハリ大塔ではそれを継承しつつも、新たに井戸と経行処が設けられている。これら2つの建造物は、仏伝文学には言及が無く、第2節(5.2)に提示した *Vinaya: Cullavagga* に記される15種類の建造物のうちの2つに対応する³⁰²。

また、もう1つの祇園精舎布施図には、3箇所に碑文が刻まれている。そのうち2つの碑文には、それぞれの房舎の屋根に尊者サーリプッタの房舎(*ayasa sāriputasa vihāro* III. 2, 26)と尊者アーナンドの房舎(*ayasa ānadasa vihāro* III. 2, 16)と記されている。

Nakanishi and von Hinüber[2014: 97 (III. 2, 16), 99–100 (III. 2, 26)]

従って、ブッダや仏弟子が滞在する建造物はヴィハーラ (Skt. / Pā. *vihāra*-) と理解されていたことが分かる。

²⁹⁷ Nakanishi and von Hinüber[2014: 98 (III. 2, 21)]

²⁹⁸ Nakanishi and von Hinüber[2014: 97 (III. 2, 19)]

²⁹⁹ Nakanishi and von Hinüber[2014: 98 (III. 2, 20)]

³⁰⁰ パールフットには経行処 (Skt. *caṅkrama*-, Pā. *caṅkama*-) が描かれている作例が3例ある。

Coomaraswamy[1956: Fig. 71, 87, 145]

その内2例の経行処は長方形の石板で、表面は花々と小枝が散りばめられた表現で、側面には五指印 (Pā. *pañcaṅgulika*-) が一列に並んで描かれている。

もう1例は、三角形の形をした経行処が描かれている。それらは、信者によって供養のしるしとしての花々や五指印が表面や側面に描かれている為に、ブッダや比丘達が経行を行う経行処としての表現ではない。

Lüders[1941: 32–40]によれば、パールフットに描かれた経行処はいずれも何らかの出来事や伝説の場に設置された記念の経行処であるとする。

従って、このカナガナハリ大塔の祇園精舎布施図中に描かれた経行処は、表面に仏足跡を描くことで、経行処を圖像化した作例として注目される。

また、Kosamba 堂と同定される寺院 No. 3 から出土した菩薩立像に刻まれる碑文内容から、Kosamba 堂の付近に経行処が設置されていたことが明らかとなっている。本論: 註 262 を参照。

³⁰¹ 図 43 の中央に配置される建造物の屋根に碑文が刻まれていることは、Nakanishi and von Hinüber[2014]を出版後に気づき本研究で追記するに至った。破断しており解読が困難ではあるが「香堂」記されていることが解読できる。

³⁰² Nidānakathā (Jā i, 92, 23–28)では約11種の建造物について記されているが、井戸堂の記述は無い。その他の仏伝文学の記述は『佛説十二遊經』[T. 4, No. 195, 147a25–27]が「六年須達與太子祇陀、共爲佛作精舎。作十二佛圖寺、七十二講堂、三千六百間屋、五百樓閣」と記している。

この種々の建造物のうち、左端の手前に描写されるブッダの房舎の傍に、敢えてマンゴー樹が配されていることが意味するのは、これまでの考察に基づいて解釈すれば、舎衛城の神変によって知られるブッダに所縁のあるマンゴー樹である(→ 図 44 を参照)。つまり、その樹を見することでこのレリーフの舞台が舎衛城の郊外での出来事であることを示すためと考え得ることが出来よう。

5.3.1

祇園精舎布施図中のヤクシャとそれに対応する初期經典

大画面に表されるカナガナハハリ大塔の祇園精舎布施図は、この古代初期インド美術の特色を活かして、さらにもう一つの特徴的な説話を描き込んでいる。残りあと 1 つの碑文は、一番下のジェータヴァナへ入る門のすぐ上部ある屋根に刻まれている。*yakhi piyekaramāta*³⁰³ と記され、その門と屋根との間には、ヤクシャ・ピヤンカラ (Pā. Piyaṅkara) と、その母であるヤクシニー、そして合掌しているヤクシャが描かれている³⁰⁴(→ 図 45 を参照)。 *Samyuttanikāya* (Sagāthavagga) の Yakkhasamyutta に属する SN 1. 10: 6, Piyaṅkara に記されるこの經典の内容は短く簡潔で、早朝に尊者アヌルッダがダンマパダを唱えていたところ、その声に耳を傾けていたピヤンカラの母が、まだ内容の理解出来ない息子ピヤンカラに対して、声を出さないように誡めたというものである³⁰⁵。ニカーヤには同じくジェータヴァナで起こった出来事として記されているので、図像中に併存させたと理解出来る。

³⁰³ Nakanishi and von Hinüber[2014: 99 (III. 2, 24)]

³⁰⁴ Zin[2006: 47, 14–24]は、このカナガナハハリ大塔に描かれたヤクシニーが最も古い鬼子母の図像であると指摘し、後に Hārītī と名付けられる鬼子母神の伝承の原型が SN 1. 10: 6, Piyaṅkara と SN 1. 10: 7, Punabbasu にあるとする。

鬼子母神伝承とヤクシャピヤンカラの接点は、『雑宝蔵經』(106)「鬼子母失子縁」にあり、鬼子母の子供の 1 人が嬪伽羅 (= Pā. Piyaṅkara) という名で登場することを指摘しておく。

『雑宝蔵經』[T. 4, No. 203, 492a13–15]

「鬼子母者、是老鬼神王般闍迦妻。有子一萬。皆有大力士之力。其最小子、字嬪伽羅。此鬼子母兇妖暴虐、殺人兒子、以自噉食」

³⁰⁵ 漢訳の相当箇所は以下の通り。

『別訳雜阿含經』(320) [T. 2, No. 100, 480c20–481a03]、『雜阿含經』(1321) [T. 2, No. 99, 362c07–21] ま



図 45: 祇園精舎布施図 下段レリーフ石板（部分拡大）

ところが、それに対応する漢訳『別訳雑阿含経』第320経及び『雑阿含経』第1321経の舞台設定は、マガダ国の鬼子母宮（『雑阿含経』では畢陵伽鬼子母住處）であり、ニカーヤの伝承との相違が見られる³⁰⁶。それはつまり、カナガナハリ大塔に描かれるヤクシャ・ピヤンカ

た以下の『佛本行経』にも確認される。

『佛本行経』第18「廣度品」[T. 4, No. 193, 83a3–4]

「於祇樹之中 化諸鬼子母 將從無數衆 佛授以正法」

漢訳ではより多くの經典名が列挙されている。

『別訳雑阿含経』[T. 2, No. 100, 480c21–22]

「時阿那律中夜早起、正身端坐誦法句偈及波羅延大徳之偈」

『雑阿含経』[T. 2, No. 99, 362c10–12]

「律陀夜後分時、端身正坐。誦憂陀那、波羅延那、見眞諦、諸上座所説偈、比丘尼所説偈、尸路偈、義品、牟尼偈、修多羅、悉皆廣誦」

³⁰⁶ 該当箇所を以下に提示する。

ラのエピソードが、南方上座部所伝のニカーヤと同系統の伝承を汲むものであったと考えることが出来る。

小結 5

カナガナハリ大塔の祇園精舎布施図は、初期經典、諸部派の律、及び仏伝文学に説かれる祇園精舎布施の記述のみでは解明出来ない、より踏み込んだ内容を保存していることが確認された。図像表現としては、パールフットの祇園精舎布施図を継承しつつも、新たに井戸や経行処、及び個人の房舎を図像化し、さらに初期經典に説かれる他経を譲渡後の場面として追加している。これら付加された描写は、南方上座部所伝のニカーヤ及び律に該当箇所が認められた。

カナガナハリ大塔の祇園精舎布施図に描かれるマンゴー樹はパールフット以来の伝承を受容していることは明瞭であり、リュウダースの解釈に基づいて理解すべきであろう。従って、このマンゴー樹の図像表現は、舎衛城郊外での出来事であることを暗示させる役目を果たすと同時に、紀元前1世紀から紀元後120年頃までの間の〈マンゴー樹の奇跡〉という神変の中でも最初期に位置付けられる表現の伝承過程を把握することが出来る題材とも言える。それは即ち、南伝に特有の〈マンゴー樹の奇跡〉関する文献の記述が、実際にパールフット、サーンチー大塔を通して、南インド・カナガナハリ大塔へと伝播する様子を具象しているとも解釈することが可能であろう³⁰⁷。

『別訳雜阿含經』(320) [T. 2, No. 100, 480c20–21]

「爾時尊者阿那律從佛遊行。至彼摩竭提國鬼子母宮」

『雜阿含經』(1321) [T. 2, No. 99, 362c8–9]

「時尊者阿那律陀、於摩竭提國人間遊行。到畢陵伽鬼子母住處宿」

³⁰⁷ アマラーヴァティー大塔の舎衛城の神変図は2例確認される。

Sivaramamurti[1942: Pl. 38, 2. / 47, 1]

両者ともにブッダは、マンゴー樹ではなく、アショーカ樹の下に座していると指摘した Schlingloff [2000: 503–504]は、アマラーヴァティ大塔に伝承される舎衛城の神変図が、説一切有部所伝の律や *Dīvyāvadāna* の伝承に汲みするものであるとしている。

従って、同時代頃に同じ南インド、クリシュナー河の上流と下流に位置するカナガナハリ大塔とアマラーヴァティー大塔では、図像表現による相違から伝承の系統が異なることが確認出来る。

加えて、第1節(5.1)で指摘した *Buddhacarita* に記される〈祇園精舎布施〉と〈舎衛城の神変〉が接近して記される背景にも、同主題の図像表現が関与していたと考えられる。しかしながら、説かれる順序は決まっており、ブッダにジェータヴァナが寄進され、ブッダ及び仏弟子が修行生活を営んでいた時の出来事として〈舎衛城の神変〉が挿入されているので、この点に関しては先に挙げて解説した、時間軸に沿って配列される傾向に従っていると言えよう³⁰⁸。

³⁰⁸ 『佛説義足經』第10「異学角飛經」に記される〈舎衛城の神変〉も、ジェータヴァナがすでにブッダに寄進された後の出来事として説かれている。加治洋一[2016: 44]から借用した。

『佛説義足經』[T. 4, No. 198, 180c23–24]

「佛、王舎國に於て教授し竟り、悉く衆比丘を從へ轉た郡縣に到り、次で舎衛國祇桓中に還りたまふ」

また、『佛説義足經』も神変の舞台を舎衛城の郊外であるとする。加治洋一[2016: 44]から借用した。

『佛説義足經』[T. 4, No. 198, 181a4]

「時に舎衛の人民、悉く城を空しくして、出て佛の威神を出したまふを觀んとす」

結論

カナガナハッリ大塔仏伝図の図像表現

本研究は、上段・下段レリーフ石板の図像表現を文献資料に基づいて解明することにより、カナガナハッリ大塔の特色を明らかにすることを目的にしている。最後に、各章で検討した仏伝図の考察結果を要約して、図像表現の特徴を確認しよう。

第2期 サータヴァーハナ時代

第1段階 紀元前1世紀頃～紀元後1世紀

- ・ 聖者カッサパゴッタによる伝道図: Kanaganahalli 21
- ・ 雪山夜叉とナーガの礼拝図: Kanaganahalli 22

1回目の導入時期に設置された Kanaganahalli 21 と Kanaganahalli 22 には、これら2枚のレリーフ石板を用いて、＜高僧たちによる雪山地方への伝道伝説＞が図像化されている。スリランカ史書に記される伝道伝説の伝承を遡ると、紀元前3世紀頃にサーンチー大塔のあるビールサ周辺を活動拠点としていた西インドの上座部系仏教僧団(雪山部)に属するカッサパゴッタ、マッジマ、ドゥラビサラに由来する伝記であることが判明した。現存資料から言えることは、4世紀頃に上座部大寺派の僧団がスリランカ史を記す以前に、カナガナハッリ大塔は伝道伝説を、その上座部系仏教僧団(雪山部)から受容していることである。

第2段階 ～紀元後2世紀初頃

2回目の導入時期に設置された上段レリーフ石板が、複数のサータヴァーハナ王の肖像以外にどの程度の数あるのかは Poonacha[2013]に紹介されていない。本研究では修正する可能性も十分にあるうえで、暫定的に仏伝図を2回目の導入時期に設定した。この導入時期については、他のレリーフの解明がなされた後に総合的に検討すべきであり、今後の研究課題となる。

- ・ 誕生図: Kanaganahalli 15

Kanaganahalli 15 の下段区画には、図像の特徴からブッダの誕生伝説を図像化した誕生図が描かれている。続く碑文箇所を彫刻を合わせると、〈誕生〉→〈ブッダを四天王が受け取る〉→〈灌水〉→〈七歩〉と、場面展開を順序立てて追うことが出来る。この場面展開を伝承する文献資料が、南方上座部所伝のニカーヤ MN 123: *Acchariyabbhutammasutta*、DN 14: *Mahāpadānasuttanta* と *Nidānakathā* の3つの文献資料のみであることが確認された。従ってカナガナハリ大塔の誕生図は、南方上座部所伝のニカーヤに依拠した図像表現であると言える。

- ・ 頭髪礼拝図: Kanaganahalli 09/05

- ・ 頭髪礼拝図: Kanaganahalli 32

- ・ 出城図: Kanaganahalli 08

Kanaganahalli 09/05 と Kanaganahalli 32 には出家者となるために剃髪したことを暗示する頭髪礼拝図がシッダールタの出家場面として描写されている。その理由は、シッダールタが出家するその瞬間を、直接ブッダ自身を描写することが無い古代初期インド美術段階では描き難いためである。従って初期経典では *pravraj* を用いて「〔世俗生活から〕出て行く」と表現された出家の描写を、図像に求めることは不可能であった。それに対して文献資料では、シッダールタの出家を〈頭髪礼拝〉として伝承する記述は、*Buddhacarita*、*Mahāvastu* などの仏伝文学から始められたと言える³⁰⁹。このような事情を顧みれば、文献資料より図像資料が先にブッダのエピソードを制作した一例であり、非常に興味深い。そして、同様の現象が Kanaganahalli 08 にも認められた。初期経典中の *niṣ-√kram* を用いた出家前の行動を表現する「(自分の住む場所から)出て行く」という表現に基づいて、神々を登場させてより文学的に発展させた〈出城伝説〉が古代初期インド美術で図像化されるようになり、それが仏伝文学中に収められるという過程を辿ることが可能であった。

カナガナハリ大塔の頭髪礼拝図と出城図の考察を通じて、文献資料と図像資料に保存される仏伝の個々のエピソードは全く無関係ではなく、相互に影響を与え合いながら伝承されるのであり、その変遷を具体的に示す例となった。頭髪礼拝図と出城図は両者とも、バールフット、サーンチー大塔の図像表現を継承している。

³⁰⁹ 第3章: 註188を参照。

- ・ 初転法輪図: Kanaganahalli 01
- ・ 鹿野苑での法輪柱の供養図: 下段レリーフ石板

古代初期インド美術の段階に初転法輪伝説を図像化したものは、初転法輪図と鹿野苑での法輪柱の供養図と2つのタイプが存在する。前者は Kanaganahalli 01 の上段区画に描かれている。その図像表現からは、中央に空席の椅子を置き、その下に仏足跡を描くという表現が見受けられ、アマラーヴァティー大塔、ナーガールジュナコンダにも見られる南インド特有の表現が確認された。

後者は、画面中央に法輪柱を描き、地面に鹿を配すことで「ブッダが鹿野苑で説法を行ったこと」を礼拝者に想見させるシンボルとしての役割を含んでいる。サーンチー大塔から開始されたブッダの主要な事蹟を象徴的に描く図像表現を、カナガナハリ大塔の下段レリーフ石板に辿ることが出来る一例となった。

- ・ 祇園精舎布施図: 下段レリーフ石板

カナガナハリ大塔の下段レリーフ石板に彫り出される「祇園精舎布施」図中には8箇所に碑文が刻まれている。パールフットの祇園精舎布施図では Kosamba 堂と香堂のみが記されていたのに対して、カナガナハリ大塔ではそれを継承しつつも、新たに井戸と経行処が描かれている。これら2つの建造物は *Vinaya: Cullavagga* に記される15種類の建造物のうちの2つと合致する。加えて、初期經典に記されるヤクシャ・ピヤンカラとピヤンカラの母の姿が「祇園精舎布施」と無関係に図像化されており、これら付加された描写は、南方上座部所伝のニカーヤ及び律に該当箇所が認められる。

その他にも祇園精舎布施図中には、舎衛城の神変説話でも南伝に特有の「マンゴー樹の奇跡」が併存している。マンゴー樹の神変図が、実際にパールフット、サーンチー大塔を通して、カナガナハリ大塔へと伝播する様子が見て取れる作例となった。

以上、本論で論じてきた図像表現の考察結果を踏まえると、カナガナハリ大塔が、サータヴァーハナ時代第1段階より、西インドの上座部系仏教僧団(雪山部)と非常に密接な接点をもつ仏塔であることが明らかになった。続く、第2段階に設置された上段・下段レリーフ石板の仏伝図には、パールフットや、西インドの上座部系仏教僧団の活動地域にあるサーンチー大塔の図像表現が色濃く継承されており、それらの表現を文献資料では南方上座部所伝のニカーヤに求められた。つまり、仏伝図の表現基準からも同様の特色が見られることで、カナガナハリ大塔が西インドの上座部系仏教僧団の活

動地域に属していたと言っても良いだろう。そのことは、サータヴァーハナ朝の支配する地域が南下して南インドにまで拡大することと連動していると考えられる。

スリランカへの仏教伝来の経緯を 4 世紀に制作された *Dīpavaṃsa* に基づいて理解すれば、アショーカ王の息子マヒンダによって、仏教発祥地マガダ国から直接伝えられたことになるが、そのことはすでにこれまでの研究によって修正されており、*Dīpavaṃsa* は、自国の仏教の正統性を主張するための脚色に富むことが知られている。このために現在は、マヒンダが西インドを拠点とする上座部系仏教僧団より仏教を学んだこと、パーリ語が西インドの方言と深い関係にあることから、西インドを経由してスリランカへ伝来したと考えられてきた³¹⁰。その具体的な伝承経路はこれまで不明瞭であったが、新発見のカナガナハッリ大塔の研究によってその一端が解き明かされつつあると言えよう。

³¹⁰ 静谷正雄[1978: 237] 山崎元一[1979: 155–162] 前田恵学[1964: 15–53]